

2023年度
第10回

アクサ ユネスコ協会
減災教育プログラム

活動報告書

2024年3月



～ 目 次 ～

(小学校)

1. 札幌市立北光小学校(北海道)
2. 市川市立宮田小学校(千葉県)
3. 気仙沼市立鹿折小学校(宮城県)
4. 大阪教育大学附属天王寺小学校(大阪府)
5. 堺市立新檜尾台小学校(大阪府)
6. 紀美野町立下神野小学校(和歌山県)
7. 八女市立八幡小学校(福岡県)
8. 徳之島町立亀徳小学校(鹿児島県)

(中学校)

9. むかわ町立鷗川中学校(北海道)
10. 石巻市立北上中学校(宮城県)
11. 気仙沼市立鹿折中学校(宮城県)
12. 三郷市立早稲田中学校(埼玉県)
13. 珠洲市立緑丘中学校(石川県)
14. 出雲市立河南中学校(島根県)
15. 松山市立旭中学校(愛媛県)
16. 延岡市立延岡中学校(宮崎県)

(小中一貫校)

17. 静岡市立大河内小中学校(静岡県)
18. 福山市立鞆の浦学園(広島県)

(高等学校・中高一貫校)

19. 東京都立大島高等学校(東京都)
20. 東京都立山崎高等学校(東京都)
21. 長野県伊那北高等学校(長野県)
22. 日本福祉大学付属高等学校(愛知県)
23. 京都府立東陵高等学校(京都府)
24. 福井南高等学校(福井県)
25. 鳥取県立鳥取西高等学校(鳥取県)
26. 済美高等学校(愛媛県)
27. 福岡雙葉中学校・高等学校(福岡県)
28. 鹿児島県立徳之島高等学校(鹿児島県)

(ユネスコ協会協働校)

29. 奈良女子高等学校・奈良ユネスコ協会(奈良県)
30. 福岡県立三池工業高等学校・大牟田地方ユネスコ協会(福岡県)

学校名	札幌市立北光小学校
活動のテーマ	北光防災サポーターズ～地域みんなで考えよう「もしも」のこと～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間・国語科・社会科・特別活動）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練 避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（1学年 57人）（複数可）
活動に携わった教員数	（6）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（112）人【保護者・地域住民・その他（区役所や消防職員、消防団の方等の防災関係団体）】
実践期間	西暦2023年10月13日 ～ 西暦2024年2月12日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）
活動報告	
1）活動の目的・ねらい	
・災害が発生した時に、進んで地域や家族の安全について考え、主体的に行動し、役立とうとする気持ちを育む。	
・防災に関する正しい知識をもち、防災にどんな人やものが携わっているのか理解する。	
2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）	
出会う知る・体験する生かす・広める	
 10月中旬  10月下旬  11月上旬  11月中旬  12月 社会科「自然災害からくらしを守る」 災害の恐ろしさの理解と自分たちにもできることがあるという自覚 校舎内（備蓄庫や貯水槽、防火設備）探検を行う。 自分たちの目で実際に確かめる 校区内探検を行い、避難場所や危険場所について調べる。 地域防災マスター水口さんとの出会い 家族への防災意識アンケート&防災グッズ交流会 自分たちにできることをより明確に考える 防災カードゲーム「シャッフル」 プロから本物の知識を学ぶ 東区役所・消防署・消防団の出前授業、体験学習 体験を通した本物の経験 対象を「地域・校内・家族」に分けて、防災の伝え手として、何ができるかを考え、発信していく。 子どもたちが主体者となって伝えることの責任感・達成感を味わう 冬の避難訓練での注意事項を全校に伝えるスライドや放送での発表 地域の方・保護者を招いた「防災フォーラム」の実施  1月30日	

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・学校内での学びで完結させずに、地域と連携して地域を巻き込んだ持続的な取組になることを意識した。
- ・より子どもたちが主体的になるようなカリキュラムづくりを行い、「自分たちが地域の防災の担い手の一人である！」という当事者意識を育むようにした。そのために、「知る・体験する」で終わらずに最後は「発信する」というゴールであることを学びのスタートで子どもたちに伝え、どのように学びを積み重ねていきたいかを話し合いながら進めることができた。
- ・助成金により、防災のプロの方を講師として何度もお招きすることができ、子どもたちの意欲の高まりと本物の知識と経験を与えていただいた。また、5回に渡って「防災フォーラム」のためのミーティングを開き、学校と行政・民間の視点から地域のための防災について綿密に話し合うことができた。
- ・残った予算で、今年度使用した「シャッフル」のカードゲームと「なまずの学校」のボードゲームを購入した。今年度は区役所から借りていたの、次年度以降は好きなタイミングで子どもたちが活動できるようになった。このゲームは、校内のプレイルームに置き、どの学年でもトランプや将棋のように遊べるようにしたい。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・昨年度よりも学びのゴールを明確にしたことで、子どもたちが目的意識をもって学びを積み重ねていくことができた。
- ・社会科を本学習の窓口にすることで、子どもたちの「～たい!」をつなげながら導入に入ることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・学びを深めていく中で、子どもたち自身が「今この地域で一番防災に詳しいのは自分たちだ。だからこそ、家族や地域、他の学年に大切さを伝えたい!」という思いをもつことができた。その思いがあったからこそ、発信の手段も相手に合わせて創意工夫し、ICTの活用など今までの学びを総合的に生かしながら発表する準備をすることができた。減災教育で大切にしている「アクセス力・思考力・行動力」の3つの力がしっかりと育ってきた。
- ・地域防災フォーラムでは、4つのグループによるプレゼン発表（防災グッズのスライド紹介、応急手当やAEDの使い方の実演、学校にある備蓄庫の動画紹介、災害時の優先順位についての劇）を行った。また、非常食・災害用トイレ・避難時の寝具の3つのブースを設け、保護者や地域の人に子どもたちが主体となって体験活動を促すことができた。
- ・12月に行った校内児童アンケートでは、「人の役に立つ人間になりたいと思う。(100%)」「自分の学びや成長に学校以外の様々な人が関わっていると感じている。(89%)」など、他学年や3年生の時よりも数値が高くなっており、防災教育を通した子どもたちの成長を実感できた。
- ・「シャッフル」の防災ゲームは子どもたちの意欲を高めるねらいで取り入れたが、このゲームをきっかけにして応急手当に関心をもち、フォーラムで発表するグループが出てきた。教師側の想定を超えた多様なテーマの設定や発信の方法が生まれたのは間違いなく大きな成長だと思う。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・防災教育を柱にして、大きなつながりを生み出したことが成果だと思う。ESDの観点でも、子どもたちから発信することで、保護者や地域の方などより多くの人が防災に関わることができ、防災意識を高めるきっかけになった。
- ・各関係機関の専門性を生かしたカリキュラムづくりを行えた。何より、子どもたちの主体性を生かすように協力してくれたことが嬉しかった。
- ・今年度は町内会などの地域の自治体との連携は行わなかったが、フォーラムに参加してくれた町内会長さんがこの活動を認めてくれ、次年度はぜひ一緒にやりたいという声をいただいた。次年度は少しずつ持続可能な範囲で輪を広げたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・本物の経験を意識した授業づくりを行った。出前授業では、各専門家による視点を踏まえた内容を重視することで、社会科の授業や日常生活では学ぶことのできない深い学びにすることができ、それが子どもたちの発信したい気持ちの原動力になっていた。
- ・防災フォーラムの実施を子どもたちに「手伝ってもらおう」のではなく、子どもたちが「主催者側・防災の担い手」という意識をもたせることで、主体的・持続的な学びにすることができた。
- ・防災フォーラムでは、①子どもたちの防災の学びの発表②「非常食・トイレ・寝る場所」の体験ブースの運営③防災のプロの方の講演の3本立てで行った。これにより保護者の方の参加が増え、若い世代からの防災への意識の高まりを促すことができ、地域の防災につながっていくと考えた。

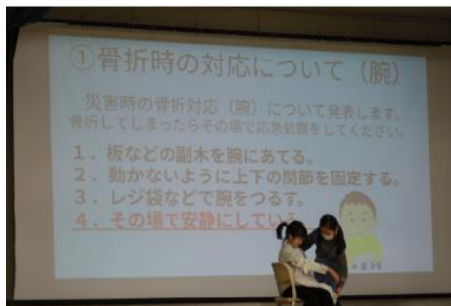
6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・子どもたちのニーズとして、応急処置について詳しく学びたいという思いがあったので、消防署・消防団と連携して体験学習を進めていきたい。
- ・この取組を持続的に行っていけるようにカリキュラムの精査を行い、どの先生でも負担なくできるようなシステムを構築していきたい。
- ・次年度も全く同じ内容ではなくマイナーチェンジしていくことで、少しずつ知識や経験が更新されていくようにしたい。そして、より多くの地域の方に興味をもっていただき、地域の防災活動の一環として根付いていくような活動にしたい。
- ・今年度は、助成金のおかげで防災プランナーの方を招くことができたが、学校予算だけの活動になると修正が必要となる。

防災フォーラム当日の様子（保護者の方には写真の承諾を取っていないので、掲載・使用不可をお願いします）



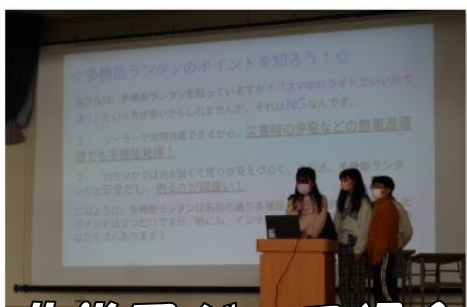
これまでの学びを写真掲示



応急手当の実演



AEDの使い方指導



非常用グッズ紹介



札幌特注の寝袋体験



何をどう備えるかを伝えました



トイレの大切さも分かりやすく



札幌ならではの防寒対策も



防災プランナーによる講演



すぐに活動の振り返り&聴き合い



区役所の方からもお話



町内会長さんからのメッセージ

令和5年度 4年生総合的な学習「北光防災サポーターズ～地域みんなで考えよう「もしも」のこと～
防災教育全体計画

①学習のねらい

- ・災害が発生した時に、進んで地域や家族の安全について考え、主体的に行動し、役立とうとする気持ちを育む。
- ・防災に関する正しい知識をもち、防災にどんな人やものが携わっているのか理解する。

②全体計画

時期	活動内容	人・ものとのつながり
10月上旬	社会科「自然災害からくらしを守る」(7時間)の学習をスタート 「地震」をメインで取り扱う。教材として「さっぽろ備え箱」の資料を活用できる。 →「自分たちは防災についてほとんど知らない(していないという状態を理解することが学習のスタート) ゴールとしては、「自分たちにも防災に関してできることがあるという自覚と知識をもたせること、学んだことを発信して広げていくこと」という意識をもたせ、現状を確認するところから始めていく。	導入として、過去の事実から「災害の恐ろしさ」を伝え、「考えないといけないもの」という意識をもたせる。
10/23月	校内の防災設備(備蓄庫・消火器・地下室・職員室火災報知器など)について調べ、「北光小校舎内ハザードマップ」を作る。 備蓄庫ではどんなものがどのくらいあるのか、これで地域の人の何日分の備蓄になるのか考えさせる。 地下室では、受水槽の容量や何人分をまかなえるのかを考えさせる。 ※必要に応じて、分からないことを教頭や <u>区役所の方に質問。</u> 備蓄庫にあるもの 寝袋・毛布・ガストーブ・ガスコンロ・非常食・おむつ・排泄グッズ、照明など(詳しくは東区HPに掲載)	クローム地図 教頭先生と確認 区役所の方が来て質問に対応することも可能。
10/26(木)	北光小校区に関わる避難場所や避難経路、防災に関わることを実際に歩いて確かめる。初めて水口さんと出会う。	クローム地図 水口さんに参加依頼
11/2(木)	家庭へのアンケートも行い、防災への意識を問う。 自宅にある防災グッズや防災の取組を確認し、そのうちからいくつかを持ち出し(クロームブックで撮影してくる)、「防災グッズ交流会」を開き、何のためにどのようなものがあるかを実際に確かめる。 同時に、「シャッフル」という防災カードゲームを行い、どんなことが防災に役立つのかを考える。	家族に協力要請 白石区役所と連絡を取り、シャッフルを借りる
11/9(木)	「災害にそなえるは誰がやる？」を合言葉に、在宅避難や家庭での備蓄のポイントについての話、非常食としてわかめご飯の試食。東区役所の方に出席授業を受ける。	東区役所に依頼 「東京備蓄ナビ」というサイトを利用
11/16(木)	通学路や身の回りの場所について、どんな場所が災害時に危険になりそうかを考えるために、消防署・消防団の出席授業を受ける。	消防団・消防署に依頼
11月下旬	ここまでの学習を一度整理し、これからどのような学習をしていくか整理して今後の学習の方向性を決めていく。 ここである程度の学びのゴールを全員で共有していきたい。	

時期	活動内容	人・ものとのつながり
12月中 (学習発表会終了後)	グループに分かれて、伝える対象・方法を自分たちで話し合い、発表をまとめていく。この時に、冬の避難訓練を企画するグループを作りたい。	
12/5	水口さんに、「今、地域で一番防災に詳しいのは北光小の4年生」という話をもらい、家庭での防災や避難への子どもの役割について考える。また、防災フォーラムの存在を伝え、発信する側としての意識を高める。	水口さんに防災フォーラムの存在を提案していただく
12/13	防災フォーラムでのブース体験のためのシミュレーションを行う。ブースは、①非常食②トイレ③寝る場所の3ブース。前半に体験を行い、後半に自分が何を担当するかを話し合い、決定する。	東区役所に依頼 前日に段ボールベッドや寝袋の搬入作業
1/30	地域防災フォーラムを開き、防災に関する講演、4年生による防災学習のまとめ発表、体育館への避難を想定した「地域防災訓練」を行う。 ※リハーサルも必要。 ※お持ち帰り品の準備もできるとのこと。	講師の方、区役所、地域の方、保護者、消防団など広い範囲を巻き込む
2月	今までの学びを振り返り、防災を通して地域への参画について考える。	最後に、水口さんと区役所の方に子どもたちの振り返りの様子を見ていただき、フィードバックができた。

③考えられる子どもたちの発表内容

○「校内」が対象のグループ

- ・北光小校舎ハザードマップの作成・北光小校区ハザードマップの作成
- ・避難を呼びかけるポスターづくり・避難グッズを伝える
- ・スライドを作成して、クラスルームを通して発信
- ・冬の避難訓練の立案（子どもたちが考えたことを、校務部会を通して全校に発信）

○「家庭」が対象のグループ

- ・防災グッズや非常食の準備をよびかける・家にいる時に災害が起きた時の避難のしかたを伝える
- ・災害時に役立つホームページや資料を教える
例）自分の家の防災の準備を学習前と学習後で比較する
- ・スライドを作成し、学校のHPに掲示する

○「地域」が対象のグループ

- ・防災フォーラムで学びを発表する
- ・新聞やポスターを作成して、区役所や地域のお店に掲示する

④地域防災フォーラムの規模感について

前提としては、今後も持続的に取り組めるような規模・負担感で、主催者側も参加者側もメリットのある「やってよかった！」「来てよかった！」という活動を行いたい。

北光小学校の体育館で実施ということで、収容人数は200名前後と考える。4年生児童60名＋保護者60名（1家庭1名と参加と仮定）＋主催者側10名程度とすると、地域分は70名程度となる。学校だより等で、他学年の保護者と興味のある人や地域の回覧板に呼びかけると一定数の人数に達すると考える。また、東区連合町内会に呼びかけ、ホームページの掲載させてもらうなど、より幅を広げた告知も可能である。

参加費
無料

定員80名
(先着順)



地域防災フォーラム in 北光小学校

未来を担う **子どもたち** と考えよう
私たちの地域の **防災** のこと

日時

令和6年1月30日(火)

13:15～15:00(13:00開場)

場所

北光小学校体育館

東区北12条東6丁目1-1

参加者特典
非常食を
プレゼント!



01

本校4年生の子どもたちが
提案! 「もしも」への備え

02

体験が理解を深める!
子ども発 防災体験ブース

03

水口さんと考える「自分も
みんなも守る 地域の防災」

講師紹介



水口綾香さん

防災ライフプランナー

フジカン代表/防災したっけ代表

「楽しい気持ちを作る」をモットーに、
一人ひとりの暮らしに寄り添った備えや地
域にあわせた防災の仕組みづくり、子ども
向け防災イベントなど実施している。

申込締切
1月19日

お申し込み・お問い合わせ

札幌市立北光小学校



011-721-0377



こちらから
申し込みます

主催：札幌市立北光小学校

協力：東区役所

東消防署 東消防団

学校名	市川市立宮田小学校																																														
活動のテーマ	地域とともに取り組む減災活動 ～自分の命は自分で守る～																																														
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、社会科、特別活動、道徳科）																																														
アプローチ	※該当するものに口をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発																																														
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 433 人）（複数可）																																														
活動に携わった教員数	（ 28 ）人																																														
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（約 200）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に口をつけ、人数をお書きください。（複数可）																																														
実践期間	西暦 2023 年 4 月 20 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 23 日																																														
想定した災害	※該当するものに口をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）																																														
活動報告																																															
1）活動の目的・ねらい ・児童一人一人が自然災害やそれに伴うリスクに対する意識を高め、自分の生命を守ることができるような能力や態度を養う。 ・地震や洪水などの危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、日常的な備えができるようにする。 ・自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校及び家庭・地域社会の活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする。 ・現在および将来に直面する災害に対し、的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができるようにする。 2）実践内容・実践の流れ・スケジュール <table border="1"> <tr> <td>4/20</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>地震と火災を想定した避難訓練で、避難場所や避難経路を知った。</td></tr> <tr> <td>9/1</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>出会いの会で、過去に起きた大地震と被害の状況について教員の話聞いた。</td></tr> <tr> <td>9/1</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>中学校ブロック（中学 1 校、小学校 2 校、幼稚園 1 園）合同引き渡し訓練をした。</td></tr> <tr> <td>10/28</td><td>地域</td><td></td><td>防災拠点要員と自治会の方々による避難所設営と炊き出し訓練をした。</td></tr> <tr> <td>11/18</td><td>全校児童 保護者</td><td>行事</td><td>宮田祭にて、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、倒壊家屋からの救出のためのギャジアップ体験、防災備品の展示などを児童や保護者が体験した。</td></tr> <tr> <td>11/21</td><td>4 年生</td><td>社会科</td><td>「自然災害から人々を守る活動」単元で、様々な災害とそれに伴う被害状況、備えの必要性について学習を開始した。</td></tr> <tr> <td>12/15</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>消防署や企業と協力し、地震と火災を想定した休み時間の避難訓練を実施した。訓練後、1 年消防車見学、2 年防災かるたの実施、3 年と 5 年煙脱出訓練、4 年防災備品の見学、6 年心臓マッサージとロープワーク体験を実施した。</td></tr> <tr> <td>1/26</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>地震と火災を想定した抜き打ちの避難訓練（保育クラブ合同）を実施した。</td></tr> <tr> <td>3/11</td><td>全校児童</td><td>学活</td><td>防災教育の日、防災朝会で自分の身を守る方法について確認した。</td></tr> <tr> <td>3/11</td><td>全校児童</td><td>行事</td><td>地震と火災が発生後、避難できなかった児童がいたと想定した抜き打ちの避難訓練をした。</td></tr> <tr> <td>3/23</td><td>全校児童 保護者・地域</td><td>イベント</td><td>PTA 主催「夜の校舎探検」のイベントで、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、ジャッキアップ体験、防災備蓄品展示を多くの児童・保護者・地域の方々が体験した。</td></tr> </table> 3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと・研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。 昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点・助成金の活用で可能になったこと。 ① 研修会の学びの中から実践に活かしたこと ・研修会で得た情報や学んだことを、3 月 11 日防災教育の日の集会を通して全校児童に伝えることができた。 ・災害を想像したり疑似体験したりすることが大切だと考え、企業の減災プログラムを授業やイベントに取り入れた。				4/20	全校児童	行事	地震と火災を想定した避難訓練で、避難場所や避難経路を知った。	9/1	全校児童	行事	出会いの会で、過去に起きた大地震と被害の状況について教員の話聞いた。	9/1	全校児童	行事	中学校ブロック（中学 1 校、小学校 2 校、幼稚園 1 園）合同引き渡し訓練をした。	10/28	地域		防災拠点要員と自治会の方々による避難所設営と炊き出し訓練をした。	11/18	全校児童 保護者	行事	宮田祭にて、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、倒壊家屋からの救出のためのギャジアップ体験、防災備品の展示などを児童や保護者が体験した。	11/21	4 年生	社会科	「自然災害から人々を守る活動」単元で、様々な災害とそれに伴う被害状況、備えの必要性について学習を開始した。	12/15	全校児童	行事	消防署や企業と協力し、地震と火災を想定した休み時間の避難訓練を実施した。訓練後、1 年消防車見学、2 年防災かるたの実施、3 年と 5 年煙脱出訓練、4 年防災備品の見学、6 年心臓マッサージとロープワーク体験を実施した。	1/26	全校児童	行事	地震と火災を想定した抜き打ちの避難訓練（保育クラブ合同）を実施した。	3/11	全校児童	学活	防災教育の日、防災朝会で自分の身を守る方法について確認した。	3/11	全校児童	行事	地震と火災が発生後、避難できなかった児童がいたと想定した抜き打ちの避難訓練をした。	3/23	全校児童 保護者・地域	イベント	PTA 主催「夜の校舎探検」のイベントで、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、ジャッキアップ体験、防災備蓄品展示を多くの児童・保護者・地域の方々が体験した。
4/20	全校児童	行事	地震と火災を想定した避難訓練で、避難場所や避難経路を知った。																																												
9/1	全校児童	行事	出会いの会で、過去に起きた大地震と被害の状況について教員の話聞いた。																																												
9/1	全校児童	行事	中学校ブロック（中学 1 校、小学校 2 校、幼稚園 1 園）合同引き渡し訓練をした。																																												
10/28	地域		防災拠点要員と自治会の方々による避難所設営と炊き出し訓練をした。																																												
11/18	全校児童 保護者	行事	宮田祭にて、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、倒壊家屋からの救出のためのギャジアップ体験、防災備品の展示などを児童や保護者が体験した。																																												
11/21	4 年生	社会科	「自然災害から人々を守る活動」単元で、様々な災害とそれに伴う被害状況、備えの必要性について学習を開始した。																																												
12/15	全校児童	行事	消防署や企業と協力し、地震と火災を想定した休み時間の避難訓練を実施した。訓練後、1 年消防車見学、2 年防災かるたの実施、3 年と 5 年煙脱出訓練、4 年防災備品の見学、6 年心臓マッサージとロープワーク体験を実施した。																																												
1/26	全校児童	行事	地震と火災を想定した抜き打ちの避難訓練（保育クラブ合同）を実施した。																																												
3/11	全校児童	学活	防災教育の日、防災朝会で自分の身を守る方法について確認した。																																												
3/11	全校児童	行事	地震と火災が発生後、避難できなかった児童がいたと想定した抜き打ちの避難訓練をした。																																												
3/23	全校児童 保護者・地域	イベント	PTA 主催「夜の校舎探検」のイベントで、企業による減災ブースを設置した。減災迷路、ジャッキアップ体験、防災備蓄品展示を多くの児童・保護者・地域の方々が体験した。																																												

② 活動の変更・改善点

- ・避難訓練を様々な被害を想定して実施した。
- ・総合防災訓練の際に、全学年が減災防災に関する学習や体験ができるようにプログラムを組んだ。
- ・イベント開催時に企業の教育力を活用して減災ブースを設置したことで、保護者や地域の関心も高まった。

③ 今年度の実践で変わった点

- ・保護者や地域の減災防災への関心が高まった。
- ・教員研修会の内容を伝達したことで教職員の意識が高まり、避難訓練の内容や事後指導が充実した。

④ 助成金の活用で可能になったこと

- ・企業の教育力を活用し、児童の減災教育や体験内容が充実した。
- ・購入したボードを使って減災コーナーを作ったこと、購入した防災かるたやすごろくで、遊びを通して防災減災の知識を得ることができること。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・中学校区（中学校 1 校、小学校 2 校、幼稚園 1 園）合同の引き渡し訓練ができたこと。家庭によって引き取り方が様々であるため、家庭でも有事の際の引き取りや連絡方法について考える機会になった。
- ・総合防災訓練の際、消防署や企業の教育力を活用して全学年が減災防災に関する学習や体験ができるようにしたことで、発達段階に応じた減災防災教育ができた。
- ・イベントを活用して企業による減災ブースを設置したことで、児童のみならず保護者や地域の方々も防災士の話を聞いたり体験ができたりと減災防災への意識が高まり、次年度 PTA 主催による AED 講習会も企画された。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・学校では、地震や火災が発生したとき、速やかに身の安全を守る方法を身につけた。
- ・登下校時や家庭、地域の中でも同じように身の安全を守る方法を身につけなければならないと意識できた。
- ・現在および将来に必ず直面するであろう災害について自分事として考え、身の安全を確保するための行動や日常的な備えについて考えようとする態度を身につけた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・教師や保護者、地域の減災防災への興味関心が高まった。防災拠点要員による避難所開設訓練も自治会と一緒にすることができ、課題や対応について協議することができた。
- ・教員研修プログラムで学んだことを伝達したことによって教職員の意識も高まった。企業の教育力を活用した減災体験も児童と一緒にすることで多くのことを学んだ。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・企業の教育力を積極的に取り入れたこと。
- ・家庭や地域に広めるために、イベントを活用して減災ブースを開設したこと。
- ・防災やかるたやすごろくの活用など、発達段階に応じた減災防災の学び方ができたこと。
- ・教員研修プログラムで学んだことを教職員に伝達するとともに、全校集会を活用して全校児童に指導したことで、どの児童も身を守る方法について身につけたり考えたりすることができた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・現地を視察したからこそ地震や津波でどんな状況になるのかわかった。被災していない自分たちが、その状況をどれだけ想像できるかが、自らの安全を確保する行動につながるのだと実感した。避難訓練では、避難の仕方だけでなく様々な自然災害をイメージできるよう、具体的に繰り返し伝えていくようにしたい。
- ・来年度も企業の教育力を活用し、発達段階に合わせて減災防災教育を継続的に実施していく。
- ・授業参観等を活用して減災防災教育を実施していくことで、家庭の意識を変えていく。
- ・地域とともに減災防災について考えることができるよう、イベント開催時は、減災ブースを開設する。また、避難所開設訓練等に自治会をはじめ地域の方々の参加を呼びかけていく。

7) その他

特にありません。



減災迷路



ジャッキアップ体験



防災備品展示見学



ロープワーク体験



防災備品展示見学



防災かるた



中学校区合同引き渡し訓練

学校名	宮城県気仙沼市立鹿折小学校
-----	---------------

活動のテーマ	防災学習を通して、地域を見つめ、地域を愛し、地域の未来を創造しよう
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 3～6 学年 115 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 10 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 225 ）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 5 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

東日本大震災で本校は、校舎に 140 c m の津波が押し寄せ壊滅的な被害にあった。学校にある位置は標高が低く、津波を含め水害の危険が想定されることから、災害時に自分の身は自分で守ることや災害に備え自分ができることを考えるなど、より実践的な防災教育の実践が必要とされる。

このことから本校では、児童が緊急時に主体的に自らの命を守る行動ができることを目指し、業前活動の防災タイム、避難訓練等を行うとともに、総合的な学習の時間では、学年毎にテーマを設定し、防災・減災に関する探究的な学習を実施している。しかし、総合的な学習の時間については、児童が命の大切さを学び、自助・公助・共助などの災害から命を守ることへの意識と行動を高めるための単元構成や学習内容の精選が十分に図られていない現状である。このことは、新たに単元構成を改編していくための教員の時間的余裕がないことが要因の一つとなっていると考える。

そこで、総合的な学習の時間の内容を見直し、本校独自の領域である「海と生きる探究活動」と相補的な配列にすることで、より充実した教育効果が得られるのではないかと考えた。また、単元の改編、指導に担任以外の教員が加わることで担任の負担も軽減され、児童に十分目が行き届き、学びがよりよい方向に向かい教員の士気も高まるのではないかと考え以下の実践に取り組むこととした。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

総合的な学習の時間の見直し・改善を行った。本校では、総合的な学習の時間で防災について学年毎にテーマを設定し探究することとしているため、既存の学年テーマをそのまま活用しつつ、担任から児童に取り組みさせてみたい内容を聞き取り、相談して計画を立てた。児童が意欲的に探究したくなるような具体的な活動名を示し、時間毎の指導内容について大まかな指導計画を作成した。また、この計画をもとに児童用の学習計画表を示し、3月の防災発表会に向けて見直しをもって学習を進められるようにした。

指導体制として、T1を主幹教諭、T2を担任が務め授業を進めることで、担任が児童の学びの過程を見取り細やかに助言できるようにした。各時間の授業の準備を主幹教諭が中心になって行うことで、担任は他の授業の準備に時間を当てることができるように考えた。

月	内 容
6～9 (9)	・既存の総合的な学習の時間の計画見直し、立案 ・昨年度の反省、研修内容を生かした実効性のある避難訓練の実施 ・業前時間の防災タイムの実施（防災副読本「未来への絆」活用） ・東北大学災害科学国際研究所・保田先生講話（結プロジェクト）
10～2 (1)	・授業実践（防災学習シートの活用） ・昨年度の反省、研修内容を生かした実効性のある避難訓練の実施 ・業前時間の防災タイムの実施（防災副読本「未来への絆」活用） ・東北大学災害科学国際研究所・保田先生講話
3	・保護者、地域に向けた防災発表会、実践の振り返り ・児童の作成物の配付・発信 ・八女市立八幡小学校との交流（4年生）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

- ・これまでの年間指導計画を見直すよい機会と捉え、児童が意欲的に探究できる学習となるようカリキュラムを見直し再構築した。
- ・気仙沼市作成の「防災学習シート」の活用の仕方について見直し、有効なものを授業の中で適宜活用するようにした。

- ・東北大学災害科学国際研究所の保田真理先生に依頼し、児童に対する防災・減災に関する講話や、教員が計画する活動、授業に対して助言をしていただいた。
- ・研修に参加した教員同士のつながりを生かし、本校と福岡県八女市立八幡小学校とのオンライン交流を行った。児童間で防災・減災について取り組んだことについて交流した。
- ・児童が作成したマップ等の成果物を冊子にまとめ地域に向けて配付した。地域の防災意識を向上させることにつながるために、児童の取組や考えを発信した。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

具体的な活動名を学年毎に設定し、地域と関わりながら防災、減災に関する探究活動を行えるよう計画した。

3年生は、「防災マイスターを目指そう」として、家庭の防災力を測定し、さらに防災力を高めるためにはどのような取組を家庭でするとよいかを家族に提案する活動を行った。この活動を通し、自分で課題を発見し解決しようとする姿が見られた。

4年生は、「えがこう！鹿折小オリジナルハザードマップ」として、学区の中を歩いたり、地域の方に聞き取りを行ったりしながら、危険箇所や避難に役立つ情報について地図上にまとめ発表する活動を行った。それにより、必要な情報を自分たちで集め、協力して考えをまとめる力が高まった。

5年生は、「めざせ！減災動画クリエイター」として、段ボールを使ったイスを作ったり、非常食を利用したアレンジレシピを作ったりするなど、避難所体験で感じたことをもとに避難所生活をより過ごしやすくするための手立てを試し、その有効性を知らせるための動画を作成した。動画作成のスキルに加え、相手意識をもったプレゼンテーション能力が高まった。

6年生は、「命を救うプロジェクト」として、町に住む外国人や高齢者、移住してくる人など様々な人の立場を考え、どのようなことが将来のまちづくりに必要かを他の地域と比較しながら考え、自分の思いを下学年に対し提案した。その活動を通して、多様な見方・考え方がまちづくりの中に生かされ、これからも必要であることに気付くことができた。

それぞれの学年の導入では、学習計画表を提示し、学習の進捗を確認したり振り返りを行ったりできるようにすることで、児童が見通しをもって学習を進められるようにした。学習の導入段階では、気仙沼市で作成した「防災学習シート」をヒントにしながら、防災クイズ、非常用持ち出し袋の中身を考えようゲーム、防災ゲーム・クロスロード、避難所運営ゲームHug、学校の備蓄倉庫探検など、気仙沼市で作成した防災学習シートの内容を学年に応じた活動に再編し、それぞれの活動への意欲付けや今後学習を進めるための予備知識を得ることにつながることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

これまで児童は、学校の備蓄庫や避難所で使う簡易トイレなどを見る機会はなかったようだった。また、避難所運営訓練に実際に参加し、テントの中で感じることを友達と共有することができた。実際に見る・体験することから新しく学んだことが多い様子で、探究活動に向けて意欲を高めることができた。

非常用持ち出し袋の中身についての相談やクロスロードの活動では、タブレットを上手に活用し、自分の考えを相手に伝えたり、友達の考えについて意見したりと、これまで学んできた防災に関する知識を生かしつつ活発に意見交流する姿が見られた。考えを交流することで、自分だけの考えにとどまらず相手の考えを批判的に見たり、分からないところを質問したりして考えを深める姿が見られるようになってきた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

東北大学の保田先生とは実際にお目にかかるだけでなくオンラインで打合せの機会をもった。これまでの本校の取組や進捗状況をお話することで、授業を進めていく上で大事にしたい視点がどこにあるかご指導いただき、防災に関する教員の研修を深めることができた。

3、4年生の活動では、自分で調べたことを家族と一緒に試したり、地域の中を実際に歩いて調べたことを地図にまとめたりする活動を行った。学校だけの学びにとどまらず、家族や地域に範囲を広げて学習を進め、さらに成果物である冊子を作成・配付することで、児童の学びを地域に向けて発信することができた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・担任と相談し、児童の実態やニーズに即した具体的な活動名を児童に提示するようにした。このことで児童が活動のテーマを継続して意識でき探究活動をスムーズに進めることができた。
- ・気仙沼市の防災シートは学年に応じた系統性が大変分かりやすく、指導において様々な場面で活用できた。
- ・自校だけでなく、大学の先生の講話や他地域の学校とのオンライン交流など連携して学習を進めることで、児童は防災に対し多面的な見方をもつことができた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

これまでの教育活動を振り返り、気仙沼市の取組と併せて指導計画を見直していくことは大変有意義であった。今年度12月に実施した学校評価の「命を守る大切さを理解しているか」という質問項目では、回答した児童、保護者、学校関係者が全て90%以上「している」と回答している。総合的な学習の時間を中心とした防災・減災に係る取組により、全体で意識が向上していると感じられる。今回の取組を通して、防災・減災に関する学習はそれ自体を目的にするよりも、学校教育目標の実現や児童がこれからの社会を生きていくための資質を養う手立ての一つであるため、防災に関する学習のみを改善していくだけでなく、学校教育全体の中でどう位置付けるとよいか、他の領域との関連はどうかを考える必要があることを改めて感じた。他の領域との関連を意識しつつ、年度の初めから適切に指導できるよう、担任と協力してカリキュラムの見直しを今後も継続して行っていく。

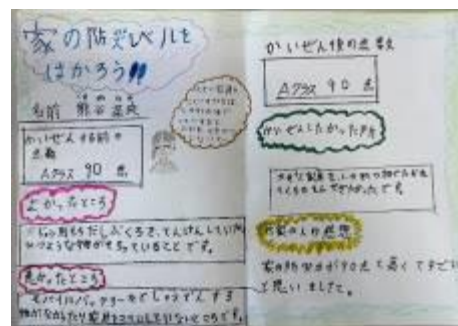
7) その他【写真資料】



< 3年・非常用持ち出し袋についての話し合い >



< 3年・東北大学の先生の講話 >



< 3年・児童の家の防災レベルまとめ >



< 4年・まちの危険箇所調べ >



< 4年・防災マップづくり >



< 5年・学校の備蓄庫調べ >



< 5年・段ボールを使ったイス作り >



< 5年・動画を使った発表会 >



< 6年・市の危機管理課職員からの講話 >



< 6年・震災伝承館の見学 >



< 6年・まちづくりの提案 >

学校名	大阪教育大学附属天王寺小学校
-----	----------------

活動のテーマ	共に学び合う地域別防災プロジェクト～生き抜く力の育成をめざして～
主な教科領域等	教科領域（ぼうさい科）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全年626人）（複数可）
活動に携わった教員数	（23）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（防災宿泊訓練＋学習参観約800）人【保護者・地域住民・その他（消防・自衛隊・区役所）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2023年10月20日～西暦2023年10月21日（準備9月末頃～）
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校では、平成31年度より独自のカリキュラム「ぼうさい科」を設置し、1年生から6年生まで防災教育カリキュラムを計画し実施している。また、毎年、防災給食（防災食体験）や防災宿泊訓練を実施しており、児童、教職員、保護者の防災への意識は高いといえる。本プロジェクトでは、これまでの知識・経験を活かし、避難所生活をより意識した防災宿泊訓練の実施、そして翌日にそれぞれの通学班に分かれ、自分が生活する地域の防災対策を異学年で学び合う活動を計画する。そうすることで、大人のいない状況であっても、適切に避難行動ができる力を育成することができると考える。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

10月20日（金）防災宿泊訓練（希望者のみの行事ではあるが、申し込みが多かったため、本年度は抽選にて100家庭限定で実施）

1日目 活動内容	
15：45～	保護者受付開始（講堂）（18時までは講堂で受付可。それ以降は、職員室にて行います。）
16：30	＊保護者の方は、校内・講堂・運動場、靴を履き替える必要はありませんが、動きやすい靴でご参加ください。
16：30～	開会式（講堂）＊開会式後、荷物を各就寝部屋に移動させます。
17：00	防災クッキング ママコミュ！ドットコム代表：出水真由美さん（講堂）
18：00	夕食（CoCo 壱番監修 尾西のカレーライス、おやつ 焼き芋：教室）
19：00	活動Ⅰ 防災漫オショー（阿倍野区住みます芸人ピコーンさん）／防災クイズ
19：30	活動Ⅱ 4年生企画「防災スタンプラリー」 みかん／救命救急講習会（希望した保護者対象）
20：30	活動Ⅲ 避難所のできる簡単ストレッチ 講師：ヨガインストラクター（講堂）
21：00	就寝準備（割り当てられた教室で、就寝準備）・就寝

10月21日（土）土曜授業～ぼうさいDAY～

	低学年（1～3年生）	高学年（4～6年生）
9:00～	もしもに備えて自衛隊から学ぼう（講堂）	ぼうさい授業（各教室）
9:50～	ぼうさい授業（各教室）	もしもに備えて自衛隊から学ぼう（講堂）
10:40～	通学班別防災学習	

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
 研修会で学んだ防災教育の視点 Step1～4について学び、自校の取り組みを整理・分析した。そうすることで、これまでできていた点と課題のある点が明確となり、教職員の危機意識に対する認識を高めることにつながった。

本校のぼうさい教育を通して育成したい子どもの姿

「日常生活の様々な場面で発生する災害の危機を理解し、安全な行動をできるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童」の育成をめざす。

上記の目標を達成するために、児童の発達段階を踏まえたSTEP1～4のプロセスを意識したカリキュラムを計画・実施する。

段階 Stsge	Step1 災害発生時の仕組み Mechanism	Step2 災害の社会や環境への影響 Linkage	Step3 災害リスク軽減への対応と 準備 Action	Step4 被災からの復興と 持続可能な社会の創造 Recovery
能力 Ability	災害の知識・理解 Knowledge&Awareness for Mechanism	因果関係の認識能力 RecognitionofInfluence & Relation	備え・対応の判断力・行動力 Action for Response & Preparedness for Mitigation	復興への創造と協働 Creativity and Collaboration for Recovery & BBB
学習内容 Content	気候変動や災害の種類、その発生 のメカニズムを科学的・客観的な 知見に基づいて理解する Mechanism of disaster ・地震や津波の発生メカニズム ・台風や高潮の発生時の仕組み 等	気候変動や災害が人間生活や環 境、文化にどのような影響。文化に どのような影響を与えるかの因果 関係を認識する Influence on society & life ・ハザードマップ作り ・タウンウォッチング 等	気候変動や地殻変動がもたらす災 害のリスクを軽減するための対応 や準備の仕方を理解し実践する Mitigaion and Adaptation ・備蓄や非常用持ち出し袋の準備 ・避難マニュアル作成と訓練 等	災害による被災からの創造的復興 (BBB)に向けたプロセスや貢献 のあり方を学ぶ Build Back Better ・災害からの復旧 ・より良い復興(BBB) 等
本校ぼうさい カリキュラム	低学年	通学班別活動	中学年 不審者・火災・地震各種避難訓練	高学年
	防災宿泊訓練(任意参加) / 4年生に一部の企画を移譲			

資料引用:奈良県教育大学 及川幸彦:持続可能な社会の構築のための防災・減災教育資料を一部筆者が加筆・修正

本プロジェクトの柱でもある通学班での防災(表では Step2)、被災からの復興と持続可能な社会の創造(Step4)への取り組みが課題であると認識し、本年度、重点を置いて取り組みを行った。

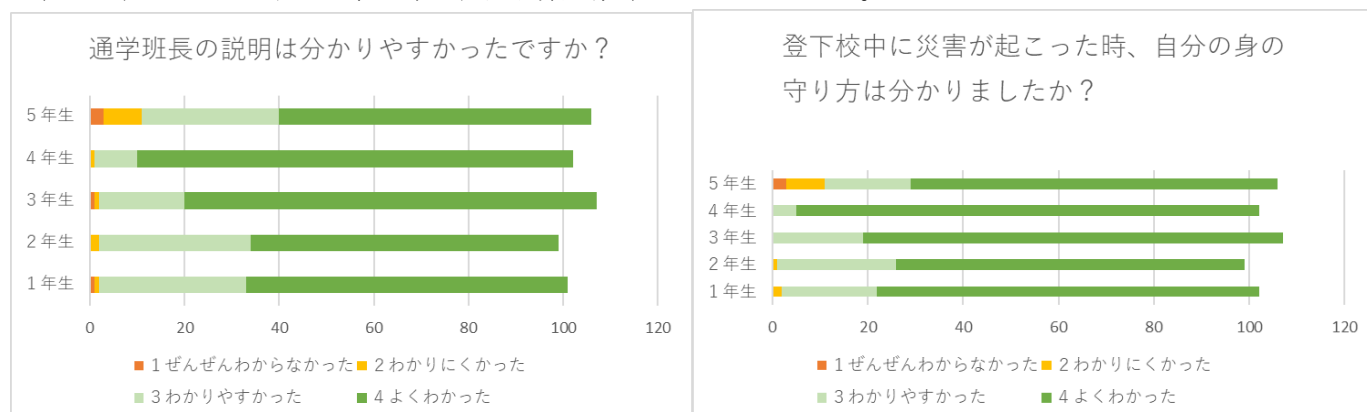
4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

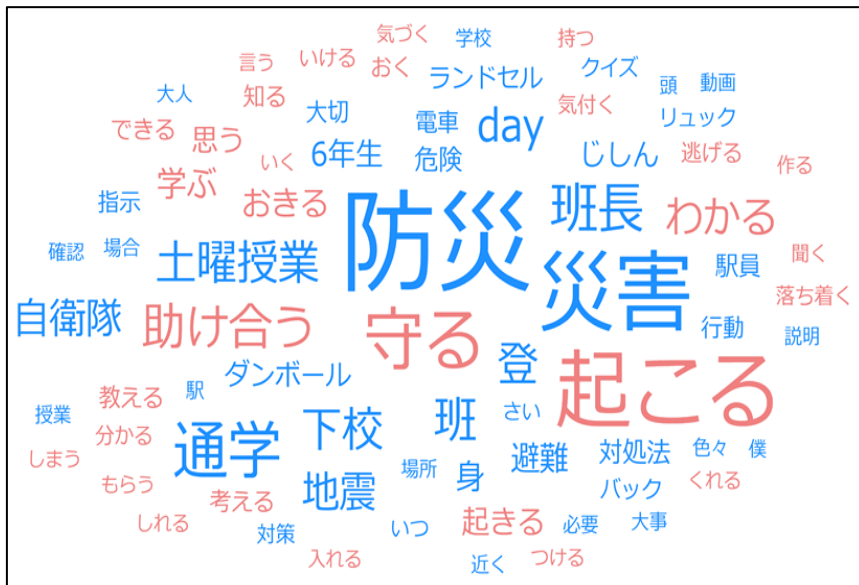
- 防災宿泊訓練**では、今年度 Step 4 の復興への創造と協働を意識してプログラムを作成した。例えば、活動する際のグループを異年齢集団で構成し、5・6年生がリーダーとなって下の学年の食事の準備や活動の引率など児童のお世話をする事で、社会参画の素地の育成を意識した。また、避難所生活をより意識して過ごすことができるよう、防災士をゲストに招き、防災食の知識、備えの重要性について学んだり、健康被害のリスクを減らすために、ヨガインストラクターを招き、避難所でもできるストレッチの方法を学んだりすることができた。
- 通学判別防災プロジェクト**では、今年度より、Step2 を意識し、通学班別の引き渡し訓練を実施。さらに、通学班別の防災学習を行った。本校の子どもたちは、様々な地域から通学してくるため、有事の際には、子どもたちだけで避難しなければならない。そこで、通学班のリーダーが自分の通学経路での危険性を事前に調査し、それを通学班活動で報告するという活動を行った。また、土曜授業を利用したため、保護者も共に参加することができ、共に危機意識を高めることができた。また下記で示す通り、十分な成果が見られたため、次年度も継続的に実施を進めていく。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

通学班ぼうさい授業のアンケート結果から、どの学年の児童も「よくわかった」「わかりやすかった」と回答しており、6年生が中心となって行った、地域別防災提案は効果があったといえる。



また、3年生から5年生の自由記述をテキストマイニングで表したところ、「防災」「災害」「通学」という名詞項目の次に、「助け合う」「守る」「落ち着く」など、災害が起きた場合に必要な非難行動の仕方が表現されていることも成果であるといえる。



324名の自由記述を ChatGPT にて 文章要約したもの

災害がいつ起こるかわからないため、常に準備をしておくことが大切だと感じました。具体的な対策や避難場所の確認などを通じて、自分自身や周りの人を守る方法を考えることができました。また、通学班の仲間と協力して助け合うことの重要性も実感しました。防災バッグの中身や避難時の行動についても学び、自分の身を守るために日常から意識を持つ必要があると感じました。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

a. 防災宿泊訓練の保護者アンケートの一部

防災宿泊訓練で学んだことを、家庭生活や日常生活に活かそうと思いましたが
63件の回答



・いつか必ずくるその時に備えて、親子で知る、考える、準備する、体験する、このような機会を設定いただきありがとうございました。まだ大きな災害を経験したことのない子供たちにとって、実際のお話や、映像、防災食、講堂での宿泊等全てが学び、貴重な経験となりました。私自身も、どうしても被災したときに子供たちをどう守るかということばかり頭にありましたが、それは当たり前のこととして、自分自身が周りの人を助けるという視点を持ち、必要な備えをしたいと思います。

b. 防災宿泊訓練・土曜授業ぼうさいDAYでの教職員アンケートの一部

・パパボランティア、ママボランティア非常に助かりました。有事の際もこうあるといいなと思います。自然に対話も生まれるので、教員と保護者の絆が深まりを感じました。

・通学班での活動がとてもよかったです。高学年の児童が一生懸命取り組んでいて、下級生に良い影響を与えていると思う。中学年にとってはあのような高学年をめざすというモデルにもなっていたように思いました。授業で使った資料などは保管しておき、次年度に生かしていけると良いと思いました。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

カリキュラムを見直した際に、本校で実施できているところと課題が明らかとなった。また、本研修での学びをもとに整理・分析することで、職員の危機意識も高めることができた。STEP 2 では地域別の防災授業、STEP4 では避難所生活を意識した防災宿泊訓練を実施することができた。理論にもとづいて、カリキュラムを見直したことは、本校の防災力を強める契機となった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

防災を行う上で重要だと感じたのは、カリキュラムの作成である。Step 1～4を意識し、学校として系統的にカリキュラムを行うことで、有事の際にも、力を発揮できる防災教育となる。それは、実地研修で様々な学校へ訪問させて頂いた機会にも感じたことである。「この先生がいるからできる」これが防災教育の課題である。だからこそ、カリキュラムを計画すること、さらに地域をも巻き込んでいくことで持続可能な防災教育となるであろう。今後も、カリキュラムの見直しと、地域とのつながりを意識し、発展させていきたい。

7) その他 (※特にあれば記述)



「防災宿泊訓練」の様子



5・6年生がリーダーとなって過ごします



企画の一部は4年生が準備します



防災士から非常食の大切さを学びました



楽しく学もコンセプト「防災漫才／クイズ」
阿倍野区住みます芸人さん



防災ストレッチ
ヨガインストラクターさん



土曜授業「ぼうさいDAY」の様子
各学年カリキュラムにそって防災授業を実施



自衛隊から身の守り方を学ぼう
陸上自衛隊中部方面隊のみなさん



「通学班別防災プロジェクト」



6年生が中心となって自分の通学
路で危険な個所を調べました



6年生の報告に、他の学年の保護者
の方々も感心されていました



地域のマスコット「防災あべのん」
もかけつけてくれました。
防災プロジェクト『大成功！！』

学校名	堺市立新檜尾台小学校
-----	------------

活動のテーマ	地域の特性を活かし持続可能な地域づくりに繋がる 「減災教育活動」
主な教科領域等	教科領域（生活科・総合・理科・社会・保健体育・家庭科・道徳）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全 学年 297 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 30 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（220）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校の「防災・減災教育」は、上記に掲げた教科領域の授業において「減災教育」をキーとする各教科が繋がる授業展開をしている。全校での活動 として、避難訓練・蘇生訓練に加え、日常における身の周りの安全を感じる重要性を意識し、従来教職員だけで行っていた校内安全点検を本年度より教職員と児童による月 1 回 の合同校内安全点検を行い、身近な所から「減災」意識を高めている。年度当初より連合自治会と 3 年間中止 していた地域防災減災行事の検討を重ね、合同行事として「減災運動会」を実施し、地域と学校における協働的な「減災教育」を行う。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

令和 5 年 05 月 01 日 連合自治会・学校共同減災行事準備委員会（以下「減災委員会」）発足
令和 5 年 05 月 21 日 減災委員会が地域住民・小学校高学年・中学生を対象の減災講演会計画（講演者・及川先生）
令和 5 年 06 月 11 日 減災委員会が自治会避難訓練に加え、11 月 18 日「減災運動会」実施を決定
令和 5 年 06 月 13 日 大阪教育大学元講師と地震調査に関わる共同研究協議会締結（校内に地震計設置）
令和 5 年 06 月 18 日 連合自治会幹部と本校教職員による「減災運動会実行委員会本部」立ち上げ
令和 5 年 07 月 17 日 減災委員会が地域住民・小学校高学年・中学生を対象の減災講演会開催（参加者 110 名）
この間 この間 5 年生が地域巡りを行い、減災マップを作製開始
令和 5 年 08 月 25 日 2 学期より教員主体実施の校内安全点検を教職員と児童で点検開始（児童・教職員の申し出）
令和 5 年 11 月 18 日 午前：オープンスクール（授業参観）にて減災教育の授業公開
午後：減災運動会実施（雨天の為規模縮小）/防災マップ模造紙版の展示
この間 避難訓練及び堺市総合防災センター地震体験・消火体験見学等
令和 6 年 01 月 12 日 能登半島地震を受けての緊急授業公開
令和 6 年 02 月中旬 「令和 6 年度 減災運動会実行委員会本部」立ち上げ・減災パンフレット完成・配布

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・「減災教育」をキーとする他教科とのつながる「カリキュラムマネジメント」が着実に進化しつつある。気仙沼市教育長の講話で出てきた「防災学習シート」の活用を活かした取り組みが大変参考になった。更に人間生活を持続不可能にする災害の観点より、ESD の観点を意識する言動が児童の中から出ており教職員が ESD を意識して授業する授業改善にもつながっている。
- ・階上小中学校訪問により小中連携は、本校が令和 6 年度より 2 小 1 中の学校群（いわゆる複数校の小中連携）が始まり一体となって減災教育を行う予定であり、2 学期から本格検討に入った来年度計画に大いに参考になった。また地域連携においても減災活動と一緒にを行うにあたり、両校の取組は教えられることが多かった。早速来年度より自治会の防災委員会に中学生と小学校高学年が委員として参加する予定である。
- ・助成金の活用で、地震計を繋ぐために適したパソコンを購入出来て、遠方（海外）までキャッチできる地震計のデータ集計や観測が出来て理科教育の充実となっている。3 学期に実施する手作り防災マップの地域配布は連合自治会長からも期待をされており、その他含めて有効に利用させていただいている。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・昨年半年間の地域連携を中心とする本校の減災教育を行っているが、先ず災害を「自分ごと」とすることを第一ステップと考え、その上で共助を意識させている。そのためには、自分の安全・自宅の安全・学校の安全・地域の安全と広がっていくことが小学校低学年段階では特に重要であり、その上で中高学年は「共助」における自分の役割を認識させるステップの重要性にも気づき、改善を行っている。
- ・1 学校単独での取組より、地域や隣接学校間での総合的な取組が機動性を発揮するのではないかと研修を通じて考えていた。特に自宅滞在中に災害が起きて共助対応する場合は同じ学年というよりは異年齢の活動が主にならざるを得ない。よって今回の減災運動会は縦割り班（小1 から小6 まで1 学年2 名程度ずつ）で振り分けた。上級生が下級生に指示しながら、下級生は指示の下、協力しながら対応にあたる姿が散見できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・上記①の通り、上級生としての自覚特にリーダーシップを発揮する良い機会となった。下級生は、上級生の指示を仰ぎながら協力することの意味を意識しながら行動できるようになってきている。
- ・防災教育を通じて、身の回りのこと、命に関することを自分ごととして児童が考え仲間と取組み、減災教育を通じて「主体的・協働的・深い学び」を実践した。特に地域や児童に配布した減災パンフレットは、地域や児童・保護者からの評判がよく1 年間減災活動を学び続けた結果が形になり、この学びがより実践的なことにつながる確証を得た。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・教職員及び児童から日常における減災意識の高揚が必要という提案を受けて、月1 回の校内安全点検を児童と生徒が共に行い、身の回りからの減災意識の高揚に結びついた。
- ・減災教育を地域とコラボレーションして行うことにより名実共に「地域・社会に開かれた学校」となりつつある。学校と地域のつながりが強化されたことにより、地域の多くの方々が学校を訪問する機会が増えて、近々コミュニティスクールの発足が予定されるまでになった。
- ・本校ではアクティブ・ラーニングの観点から授業改善を進めているが、防災教育を通じて、身の回りのこと、命に関することを自分ごととして児童が考え取組み、「主体的・協働的・深い学び」を実践した。この実践をきっかけに他教科のアクティブ・ラーニングの活性化につながっている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・減災運動会開催にあたっては、実体は連合自治会と本校の共催になっているが、外部からの見た目は連合自治会主催の形式を取った。わざと学校や教職員は黒子として全面協力するが、連合自治会及び単一自治会幹部が運営主体となるように仕組んだのである。運動会的な行事は学校や教職員にノウハウがあるからと言って学校の教職員中心に進め、地域の方が指示を受けて作業する形は持続可能な行事にならなくなる可能性が高いと考えたことが理由である。学校はどうしても校長は3 年程度、教職員は5 年前後で異動となるケースが多い。そうなると学校主体・教職員リーダーで進めるとESD 的概念の持続可能な活動にならなくなる可能性がある。自治会活動における地域住民の「主体的・協働的・深い活動」が重要なのである。学校と連合自治会長は、「減災運動会」は一過性のものでなく毎年の恒例行事として広く地域に呼びかけ、関係が希薄になっている住民同士のコミュニケーションの充実を図り、災害発生時に「共助」につなげることがもっと重要と考え、児童も地域住民（将来は自治会活動の中心になることも考慮）の一員と考え、そのようにした。つまり、減災運動会は他の連合自治会行事のように幹部が企画し当日地域住民が単に一参加者として参加するのではなく、企画段階から単一自治会の代表に参加してもらい、意見交換して、可能なら代表以外の地区の皆さんの意見も反映して行う方式を取ったのである。立ち上げ当初は慣れていないこと、地区代表住民同士のコミュニケーションが従来なかったことに起因するいろいろ課題もあったが、その課題を解決するプロセスも結果的にはコミュニケーションを深める機会となり、減災運動会開催半月前には現実的に防災減災意識が高まる企画準備が整い、来年度は学校側のサポートは殆ど不要ではないかと思われるくらい組織が動いていた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・実践から得られた教訓は、児童や地域住民が減災教育減災活動を「自分ごと」と捉え、考えるようになった。
- ・次年度以降の改善については、減災運動会中心とする減災教育を本校のみでなく中学校区の2 小学校1 中学校で考え、地域と共に、より実践的な「共助」「N助」に結びつける。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

- ・特になし

防災 パンフレット



たくさんの安全危険を子どもたちが見つけ、まとめました。



学校名	紀美野町立下神野小学校
-----	-------------

活動のテーマ	『“きみの” できること』自分の命を守り、人のために行動する、主体意識を持った防災リーダーの育成を目指して
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習、学校行事、社会、国語等）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（第1～6学年　63　人）　※主に4年生11名
活動に携わった教員数	（　16　）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（　約100　）人　【保護者・地域住民・その他（　　　　　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦　2023　年　4　月　1　日　　　～　　　西暦　2023　年　3　月　31　日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（　　　　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

【背景】本校は山間部の川沿いに位置し、地震や台風等が起きた際、土砂崩れや河川氾濫などによる集落の孤立化が予想される。また、広い校区に集落が点在しており、避難所となっている本校や役場等とも距離があるため、過疎化・高齢化した集落によっては、小学生の児童も避難生活等の大きな担い手となり得る。令和5年6月2日の台風2号による豪雨では、行方不明者も出ており、地域全体で防災・減災への意識が高まっている。

【ねらい】地域で起こりやすい災害やその危険性について理解し、自他の命を守るため危険を予測し災害に備えたり、災害後の生活を考えて行動したりすることのできる、主体的な防災リーダーとしての資質・能力を身につけさせる。

【育成すべき資質能力】

- ア 地域で起こりやすい災害や、被害の軽減や発生後の生活のためにできることについて理解する。（知識・理解・判断）
- イ 災害時における危険を認識し、自らの安全を確保したり、災害後の生活を考え備えたりすることができる。（危険予測・主体的な行動）
- ウ 自他の生命を尊重し、他の人や地域の安全に役立つことができる。（社会貢献・支援者の基盤）

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

	内容	学年	取り組んだ具体的な活動
1学期	下校指導・地区別児童会	全校	地区別班に分かれ、登下校の在り方、危ない場所について話し合った。
	“きみの” できることとは…	4年生	総合的な学習のテーマ決め。6/2の台風の災害状況をもとに、防災について自分たちにできることについて話し合った。
	避難訓練(火事)	全校	地震による火事を想定した避難訓練を行った。
2学期	地域合同防災学習	全校	学校運営協議会、近隣の中学校と合同で、防災学習を行った。内容は以下の通り。 ・地域の方への避難者登録カードの記載(中学生主催) ・中学生による防災クイズ(低学年) ・役場総務課による、6.2豪雨と対応についての講話(高学年、地域住民) ・役場総務課による、子ども園災害対応設備の案内(中学生、地域住民) ・保健福祉課による、認知症講話(高学年、中学生、地域住民) ・社会福祉協議会による、防災グッズ作り(小学生) ・トヨタカローラ和歌山による防災グッズ展示
	学校探検・備蓄会議	4年生	校内の危険箇所や防災用備蓄について校内を調査し、ICTを活用してまとめた。その後、気仙沼市立階上中学校の防災備蓄と比較し、本校に不足している備蓄について話し合い、その活用法等について考えた。
	災害避難ゲームで議論！ 「南海トラフ地震が起きたら」	4年生	社会科の授業において、和歌山県の作成する「きいちゃんの災害避難ゲーム」を活用し、災害への備えについて話し合った。
	家族防災会議	4年生	地域合同防災学習や、災害避難ゲームを通して学んだことをもとに、家庭で災害への備えについて話し合い、学級で共有した。
	東日本大震災伝承館との オンライン学習 “きみの” すべきこととは…	4年生	9月研修会での見識を児童に伝え、そこから生まれた疑問や、学校探検・備蓄会議で見つけた課題について、オンラインにて東日本大震災伝承館の館長さんにお話を伺った。
	校内・郡研修会		9月研修会での学びについて、校内での報告会及び、郡社会科研修会を実施。
	保小合同避難訓練(地震)	全校	隣接する子ども園と合同で、地震を想定した避難訓練を行った。

	こども園防災遊び交流 「小さい子にできること」	4年生	気仙沼市立階上中学校の中学生にアドバイスを頂き、こども園児に災害への備えについて伝えるため、カルタ・塗り絵・紙芝居を制作した。
	リーフレット制作	4年生	オンライン学習で学んだことをもとに、国語の学習にて災害への備えについてまとめたリーフレットを作成。学習発表会にて全校保護者に配付し、また町内随所に置かせて頂いた。
	学習発表会 「防災～命を大切に～」	4年生	学習発表会にて、災害のおそろしさや、備えておくことの大切さについて伝える劇を発表した。
	防災ラジオ 「“きみの” できること」	4年生	インターネットラジオ「きみの FM88 ラジオ」協力のもと、防災学習での学びや思い、地域住民への呼びかけなどを伝えることを目的とした 1 時間のラジオ番組を収録。12/11～12/17 までの 1 週間、放送して頂き、3 月まで毎週木曜 12 時から放送。
	地域の人に伝わるには 防災無線放送収録	4年生	紀美野町役場協力のもと、町内の防災無線放送にて災害への備え等の呼びかけを行う放送を収録させて頂いた。1 月～3 月の間放送。
	防災社会見学 「“きみの” 学んできたこと」	4年生	和歌山市消防局防災学習センター及び稲むらの火の館の見学を行った。
3 学 期	消火器・避難体験体験活動	4年生	模擬消火器を活用し、消火の模擬体験を行った。テントや段ボールベッドを活用し、避難体験を行った。
	防災調理実習 「“きみの” 食べるもの」	4年生	備蓄用食料の味見、及び湯煎での炊飯など、停電等を想定した調理実習を行った。
	遠隔防災報告会 「“きみの” してきたこと」	4年生	本プログラムに参加した広島県福山市立鞆の浦学園 4 年生と、1 年間の取り組みについての報告会を実施。
	授業参観家族防災会議 「“きみの” 住む場所」	4年生	1 年間の取り組みを生かし、今後気をつけること、発信していきたいこと等について、話し合った。
	防災の証 缶バッジ作り	4年生	この 1 年間の取り組みを今後に繋げること、また同じ「減災」という視点で関わった各所との繋がりを忘れないことを目的に、缶バッジをデザインし、作成、各所に送付した。

3) 9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月研修会で見て感じた、災害の爪痕、自分事として考え捉え発信している子どもの姿について、児童に伝え、学校全体でも共有した。児童からは「直接話を聞きたい。アドバイスをもらいたい。」という声が聞かれ、オンライン学習や、防災遊びのアドバイスなどを実現することができた。また、本プログラムに参加されていた他県の学校と連携することができ、「自分たちと同じように防災について考えている小学生がいるんだ」という励みになった。

受け身でなく、1 人の地域住民として発信する子ども達の姿勢に感銘を受け、起こる災害を想定し、自分事として捉えること、地域や周りの人といかに連携をとり取り組んでいくかという視点に重点を置き、計画の修正を行った。

助成金により、施設見学や、模擬消火器体験・防災調理・避難体験、缶バッジ製作が実現できた。見学・体験では、これまで学び、発信してきた事柄について、実際に想定した経験をすることで、児童にとってより生きた知識となった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・単発的に取り組んできた減災教育から、長期目標を位置づけた系統性ある教育計画を立てることができた。
- ・多様な機関と連携し、「課題発見」⇒「情報収集」⇒「課題解決」⇒「新たな課題の発見」というプロセスを設けることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

※ 1) 活動の目的・ねらい【育成すべき資質能力】に即して

- ・受け身ではなく発信する立場として、安全確保や災害への備えについての知識を獲得し、発信しようとする姿が見られた。特に、防災ラジオ収録の際には、誤った情報を発信しないよう事前に確認する姿や、地域住民に少しでも呼びかけを行い、役に立とうとする姿が見られた。
- ・主体的、協働的に課題発見・解決に取り組んでいく中で、人の役に立つために発信しようとする姿や、児童の自己有用感が高まっていく様子が見られた。自ら進んで地域の防災イベントに参加し学校で共有する児童や、収録したラジオ番組を全校児童に聴いてもらいたいという意見が見られた。
- ・「災害への備え」という視点で様々な物事を見る姿勢が見受けられた。農協と連携して行った「梅干し講座」では、梅干しが非常時の塩分補給に結びつくことや、長期保存の方法について話す姿が見られた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・防災について、「大人が教え、子どもが教わる。」という一方的な視点から、「大人も子どもも一緒に考えていく。」という視点で取り組むことができた。
- ・子どもの意識が高まっていく中で、地域や保護者の減災への意識が高まっていく様子が見受けられた。
- ・校内・郡研修会を通して、また主体的に発信しようと努める 4 年生の姿から、防災・減災教育への意識の高まりが感じられる。今後は学校全体を通したカリキュラム開発を行っていき、より職員全体で努めていきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・本プログラムでのつながりを生かし、様々な「出会い」の場面を設けることで、児童の主体意識につながった。
- ・保小中、学校運営協議会、役場、ラジオ局、大学等、様々な機関との連携を図り、「教わり、発信し、ともに考えていく」取り組みを進めることができた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・今年度の計画は系統性がとりきれないところがあったため、今年度のプログラムを生かし、系統性ある年間計画を作成していきたい。
- ・今年度は1学年が中心となって取り組んできたが、FMラジオ局とのつながりや、子ども園とのつながり等の成果を活用し、今後は児童会等を中心に全校での取り組みに広げていきたい。現在、児童会活動として、FMラジオでの呼びかけ運動を計画之中である。

7) その他（※特にあれば記述）

地域合同防災学習



災害避難ゲーム



家族防災会議



伝承館オンライン学習



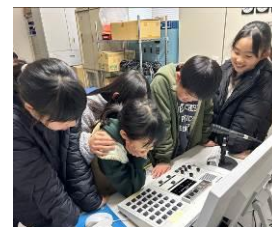
学習発表会「防災～命を大切に～」



防災ラジオ



防災無線放送



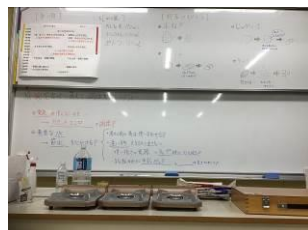
防災リーフレット



防災社会見学



防災調理実習



缶バッジ製作



校内研修



家族防災会議

家族みんなで
本気で話し合ってください！



9/4(月)締切 名前

☆家族にとって大切な会議です。4年生が司会となって進めよう！

Check1 事前準備について

①家の中でキケンなところはないですか？チェックしてみましょう！

- ・大きな家具はたおれないように固定している。(はい / いいえ / 固定する!)
- ・高いところに、きけんな物を置いていない。(はい / いいえ / 移動する!)
- ・ねる場所の近くに、たおれそうな家具はない。(はい / いいえ / 移動する!)
- ・地震が起きても、出口をふさぐ物はない。(はい / いいえ / 移動する!)
- ・ガラスには、フィルムをはっている。(はい / いいえ / フィルムを買いに行く!)
- ・家のまわりにあぶないブロック塀はない。(はい / いいえ)



②「和歌山県防災ナビ」やハザードマップを知っていますか？

(はい / いいえ / 調べてみる!)

③家のまわりでキケンなところを出し合ってみましょう！



④家族でひなん先を決めていますか？どこにひなんするか、話し合っておきましょう！

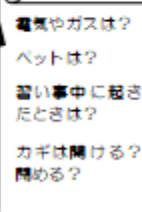
※どの道を通してひなんするかも話し合っておきましょう！



⑤非常時の連絡方法について話し合ってみましょう！

- ・避難カードを作っていますか？(はい / いいえ / 作ってみる!)
- ・災害用伝言ダイヤル「171」を知っていますか？(はい / いいえ / 調べてみる!)

⑥その他安全なひなんについて必要なことを話し合ってみよう！



うーへ！



Check 2 非常時用の持ち物について

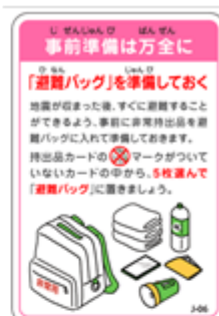
① ひなんバッグは作っていますか？

(はい / いいえ / これから作ってみる！)

② ひなんするときに持って出る物をまとめておきましょう！

ひなんバッグに入れておく物

ひなんバッグに入れていないが、持って出る物 例 携帯電話



Check 3 「家族防災会議」をしてみよう

① 今回の「家族防災会議」に参加したメンバー(家族)を教えてください！

※参加できなかった家族にも、会議の内容を伝えてください！

② 家族会議をしてみた感想を書こう！

③ 保護者の方も、今回の会議の感想をご記入下さい。ご協力宜しくお願い致します。

最後に、みんなで「ありがとう」と伝え合って、会議終了です。

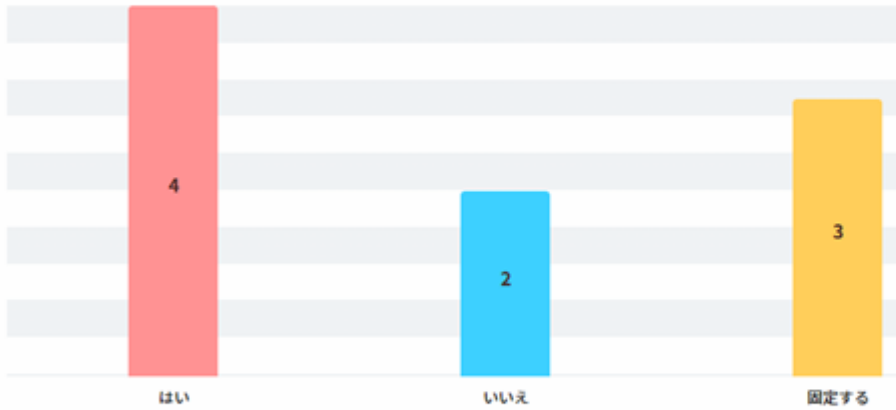
～ 今日の会議が、みなさんの「笑顔」につながりますように。～

家族防災会議の結果

名前

【1】大きな家具はたおれないように固定している

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

.....

.....

.....

【2】高いところにきけんな物を置いていない

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

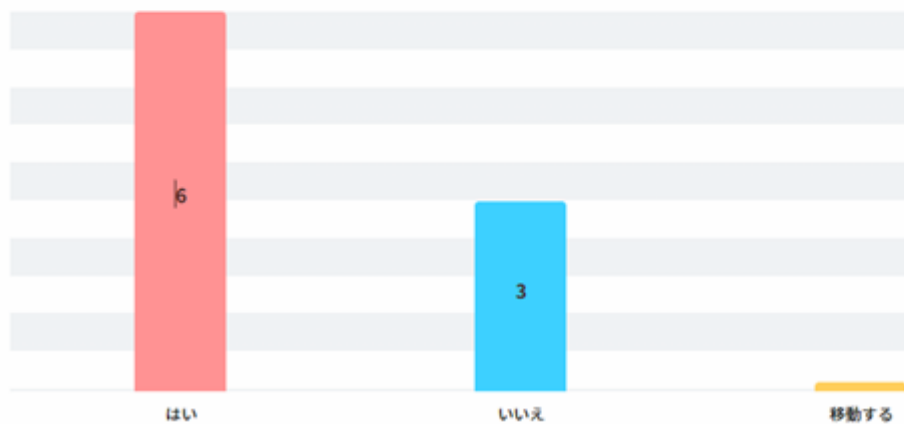
.....

.....

.....

【3】ねる場所の近くにたおれそうな家具はない

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

.....

.....

.....

【4】地震が起きても、出口をふさぐ物はない。

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

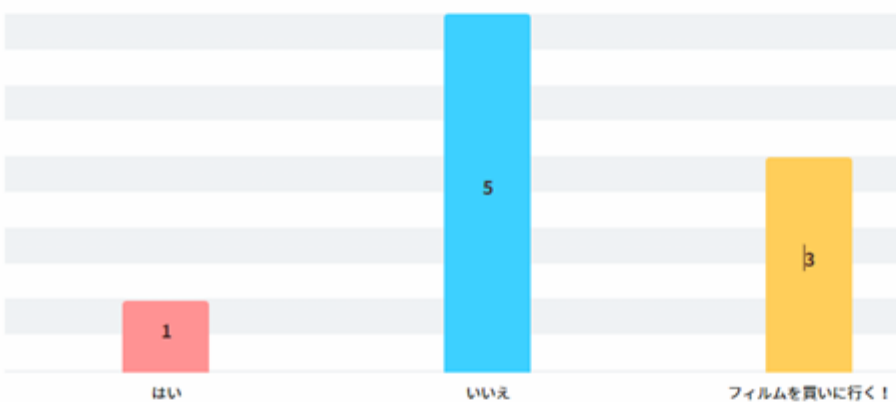
.....

.....

.....

【5】ガラスにはフィルムをはっている

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

.....

.....

.....

【6】家のまわりにあふないブロック塀はない

棒グラフ 円グラフ



.....

.....

.....

.....

.....

感想

.....

.....

きみの FM88 ラジオ

紀美野町立下神野小学校 4年生 presents

防災ラジオ “きみの” できること

レギュラー放送決定！！

毎週木曜日 12:00～12:57

※令和6年3月まで

4年生では、総合的な学習「“きみの” できること」として、防災について学んでいます。これまで学んできたことを地域の方々に伝えるための取り組みとして、きみのFMさんにご協力頂き、インターネットラジオ番組を制作することになりました。

前向きな気持ちで明るく「防災」について話したいと思います。ぜひお聴き下さい！

※児童は個人情報保護のため、ラジオネームを使って話します。

下のQRコードを読み取って視聴して下さい。



紀美野町立下神野小学校4年生 presents

防災無線放送

3月8日まで放送開始！

毎週月火、木金 16:00前後

町内全域放送！

子ども園児への防災遊び、リーフレット作り、学習発表会、防災ラジオなど、様々な方法で発信してきた4年生。しかし、もっともっと地域の人たちに知ってもらいたい！と考え、紀美野町役場の方のご協力のもと、防災の呼びかけを無線放送で発信させて頂くことになりました！

※聴いてもらいやすいよう、2グループに分かれて、短く伝えています。

月・木担当



火・金担当



防災社会見学について

1. 日時

令和5年1月12日(金)

2. 目的

- ・集団行動を通して人と協力し合うこと、人と助け合うことの大切さを学ぶ。
- ・災害への危機意識や防災意識を高め、自らの安全を確保したり、災害後の生活を考え備えたりするための知識を身につけたりする。
- ・災害に対する先人の思いやその努力について学ぶ。

3. 見学施設

- ・和歌山市消防局防災学習センター(和歌山市八番丁12番地 TEL:073-427-0119)
- ・和歌山城西の丸広場(和歌山市一番丁3)
- ・稲むらの火の館(有田郡広川町広671 TEL:0737-64-1760)

4. 引率者

■■■■■■■■■■ (2名)

5. 行程

08:30 学校出発
09:30 和歌山市消防局防災学習センター 到着、見学 ※和歌山城駐車
11:30 和歌山市消防局防災学習センター 出発
11:45 和歌山城西の丸広場 到着 昼食
12:30 和歌山城西の丸広場 出発
13:15 稲むらの火の館 到着、見学 ※施設内駐車場有
14:30 稲むらの火の館 出発
15:30 学校到着、下校

6. 持ち物

- ・ハンカチ ・ティッシュ ・弁当 ・お茶
- ・レジャーシート ・筆記用具 ・折りたたみのかさ ・ナイロン袋(数枚)
- ・酔い止めの薬

7. 見学内容

【防災学習センター】

地震のしくみ、災害体感シアター、津波ハザード、煙避難体験、初期消火体験、防災情報、VR防災体験※参加同意あり

【稲むらの火の館】

3D映画鑑賞、館内見学

1. 目的

災害発生後の生活を考え、災害備蓄用食品の調理及び、湯煎等水道や電気を使わない調理の方法を理解する。

2. 対象

指導

4年生 11名

3. 日時 令和6年1月15日(月) 5・6限

4. 献立(児童が食べるもの)

- ・防災備蓄用保存パン
- ・防災備蓄用アルファ米
- ・湯煎コーンごはん
- ・湯煎ポトフ

※使用食材

○湯煎コーンごはん(3班分)

- ・無洗米・・・・・・・・・・300ml
- ・水・・・・・・・・・・360ml
- ・コーン缶・・・・・・・・2缶

○ポトフ

- ・じゃがいも・・・・・・・・中2個
- ・たまねぎ・・・・・・・・1個
- ・キャベツ・・・・・・・・1/2玉
- ・にんじん・・・・・・・・1本
- ・ウインナー・・・・・・・・1袋
- ・コンソメ・・・・・・・・1個
- ・水・・・・・・・・・・450ml

※調理道具等

- ・ガスコンロ…3つ +予備
- ・ガスボンベ…3本 +予備
- ・ざる…3個
- ・なべ…3つ
- ・トング…3本
- ・アイラップ(ポリエチレン袋)…1箱
- ・包丁…6本
- ・牛乳パック(まな板代わり)…6枚
- ・まな板シート…1箱
- ・使い捨て容器(小)…22個+予備
- ・割り箸…11膳+予備
- ・使い捨てスプーン…15本+予備

○アルファ米(3班分)

- ・アルファ米・・・3種
- 1 ・水・・・・・・・・・・510ml

5. 留意点

○食材

前日、2日前にオークワ野上店で購入し、家庭科室の冷蔵庫に保管する。

○事前準備

調理器具、食器等は洗浄し、乾燥機で乾かして使用する。

調理器具の使い方については事前指導を行っておく。

手指、調理台の消毒を徹底する。

6. 調理手順

	保存パン	アルファ米	コーンごはん	ポトフ
13:50	手指消毒を済ませ、家庭科室に集合。調理手順の確認。			
13:55			・木・コーンを水に浸す。	
14:00		・水を入れる。		・材料を一口大に切
14:05			牛乳パックを使用。	
14:10				
14:15				
14:20			・ざるを沈め煮る。	
14:25				・ざるを沈め煮る。
14:30				
14:35			・火を止め、余熱で加熱。	
14:40				・火を止め、余熱で加熱。
14:45			・容器に移し蒸らす。	
14:50	・パンを一口大に		・袋の口を切る。	
14:55	切る。			・容器に移す。
15:00	食器等を準備し、試食を行う。試食を終えた児童から片付けを行う。 洗い物の際、水は最小限使用する。※2.0Lのペットボトルで済ませる。 感想を発表し合い、ふりかえりを行う。 号令を行う。			
15:05				
15:10				
15:15				
15:20				
15:25				

※保存用に少量とっておく。

※調理器具については、再度洗浄する。



試作品※食器は使い捨ての物を使う。

第10回（2023年度）「アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム」（最終報告）

学校名	八女市立八幡小学校
担当教員名（役職名）	古賀 隆 広（教諭）

活動のテーマ	「やはタウン・スクール構想」における防災・減災教育プログラム
主な教科領域等	教科領域（社会科、総合的な学習の時間、学校行事〔健康・安全体育的行事〕等）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全学年 97人）（複数可）
活動に携わった教員数	23人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	250人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 （○）地震 （ ）津波 （ ）台風 （○）洪水 （○）河川氾濫 （ ）土砂 （ ）その他

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- （1）自然災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童の育成
 ア 災害について理解し、安全な行動をとるための判断に生かすことができる。
 イ 災害時における危険を認識し、訓練を生かして安全を確保することができる
 ウ 地域の人と積極的に関わり、自分のできることをする。

（2）「やはタウン・スクール構想」とは

八幡のまちのひと・もの・こと「を学ぶ」「から学ぶ」「と共に学ぶ」学校であり、特に『ひとと共に学ぶ』に重点を置いた教育課程を具体化したものである。これまでは、いわゆるGT（ゲストティーチャー）を学校に招いて、ひと「を」学んだり、ひと「から」学んだりすることが多かったが、本校が描く“やはタウン・スクール”とは、端的に言えば、まちのひととも子どもたちと同じ教室で学び合う学習者になって、一緒に授業に参加するというものである。子どももまちのひととも、自分の考えをつくったり説明したりするとともに、お互いの考えを比べて考えを広げたり深めたりしていく。日常の授業に、まちのひとたちが同じ立場、同じ目線で参加することを大事にするものである。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

（1）防災・減災教育の全体計画

自然災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童の育成
 ア 災害について理解し、安全な行動をとるための判断に生かすことができる。

- 防災教育に関する系統（社会科）

・3年…地域の安全を守る ☆4年…水害からくらしを守る(本年度研究実践)

・5年…自然災害を防ぐ

・6年…災害復興の願いを実現する政治 など
- 学級活動(2)

・心身ともに健康で安全な生活態度の形成

イ 災害時における危険を認識し、訓練を生かして安全を確保することができる

- 防災教室

○ 避難訓練や災害時児童引き渡し訓練 など

ウ 地域の人と積極的に関わり、自分のできることをする。

- やはタウン・スクールでともに地域の方と学ぶ

○ 八女市防災安全課や校区の自主防災組織との連携、地域への発信 など

（2）実施した具体的な計画・内容

- 職員研修及び訓練の充実…防災・減災教育についての研修、訓練道具の整備

○ 防災・減災教育カリキュラムの見直し改善…効果のあるカリキュラムの作成

○ 引き渡し訓練の内容検討…他地域の実践に学ぶ

○ 防災講話や防災体験の実施…災害の現実学ぶ

○ 防災・減災に関連した書籍の購入…図書館への「防災・減災コーナー」の設置

期 日	主な活動	活動の実際
4月20日	火災避難訓練	迅速かつ安全に避難することができるよう訓練を行うとともに、その様子を消防署の方に評価していただいた。
4月22日	防災教室（地震） 災害時児童引き渡し訓練	P T A総会に合わせ防災教室を開くとともに、災害時の児童引き渡し訓練を行った。実際にやってみることで課題が明らかになり改善へとつながった。
6月	着衣水泳	水中では体が動かしづらくなることや力を抜いて浮いて待つ方法などを実際に試しながら学ぶことができた。
9月 1日	防災訓練 （防災の日）	地震を想定した避難訓練を行い自分や周りの人たちの命を大切にするにはどうしたらいいか考えることができた。
9月22日	環境体験学習 ・森の講話 ・林業体験 ・森林観察	くじゅう九電の森の教室で、地球温暖化の現状や森の役割について学習した。森の「水を蓄える」機能と「土砂災害を防ぐ」機能について、実験を通して確認することができた。
10月～	第4学年社会科「水害からくらしを守る」授業研究	自然災害時の公助・共助・自助を地域の人と一緒に学びながら、どのように対応し行動すればよいのか考えることができた。
2月 9日	防災講話「空のメッセージを聞いて自然災害から身を守ろう」	気象予報士の名倉さんを講師に招き防災講話を行った。雲や災害時の映像視聴、実験などを通して自然災害と防災について考えることができた。
3月 1日	防災・減災学習会 ・映画上映 ・避難所、防災キャンプ体験	校区にある人権のまちづくり推進協議会「八幡よかとこ会」と協力し、震災から命について考えることをテーマに映画「ふしぎな石～閑上の海」の上映を行った。また、避難所体験ブースを用意し、キャンプなどの体験が防災・減災にもつながることを提案した。
3月21日	気仙沼市立鹿折小学校4年生とのオンライン交流	地域防災マップ作りに取り組んだことをマップの紹介をしながら交流することができた。同世代の子たちの丁寧なマップ作りに関心するとともに、新たな視点で自分たちの作ったマップを見直すことができた。交流については、本プログラム参加者の川村先生（鹿折小学校）にご尽力いただいた。



防災教室・児童引き渡し訓練の様子



くじゅう九電の森「森の教室」の様子

子どもたちと一緒に 防災・減災 について 学んでみませんか

参加者大募集

日時と内容

第1回 10月25日(水)9:20～ 45分
八女市のとりくみについて防災安全課の方から話を聞きます

第2回 11月7日(火)9:20～ 120分
校区内の危険な場所について地域に出かけて調べます

第3回 11月9日(木)9:20～ 90分
校区内のとりくみについて上新庄公民館に出かけて調べます

第4回 11月14日(火)9:20～ 90分
地域に出かけて調べたことを地図にまとめていきます

第5回 11月21日(水)13:30～ 45分
どんな地図ができたかを発表し合いよくしていきます

4年生社会科「災害からくらしを守る」の学習では、八女市や八幡校区の防災・減災のとりくみについて 見て、聞いて、触れて…、考えていきます。

お問い合わせ
八女市立八幡小学校
やはタウンスクール担当
TEL (0943) 22-4801

参加希望の方は、10月末日までに、学校へお出ください。近所の方へもぜひお声をかけを！

参加申込書
第1・第2・第3・第4・第5

お名前
連絡先 TEL

行政区

※希望される回を、○で囲んでください。単発での参加でもぜひどうぞ。

授業への参加を呼びかける案内チラシ



4年「水害からくらしを守る」授業の様子

防災講話の様子

上映会の様子

オンライン交流の様子

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- 9月研修会の階上小学校授業視察防災マップ作りの実践から学んだことを、本校第4学年社会科「水害にそなえたまちづくり」の授業の中で生かすことができた。
 - ・単元の指導計画や扱う資料の見直し、授業展開の工夫など
(市防災安全課の方からの話を聞く、危険箇所調査活動、地域防災マップ作りや発表と付加修正の場の工夫など)
- ・地域住民の授業への参加
 - ※参加の呼びかけには、助成金を利用してチラシを作成し配布した。
- 防災・減災に関連した書籍の購入をおこない、教室に「防災・減災コーナー」を設置することができた。
- 防災講話「空のメッセージを聞いて自然災害から身を守ろう」を開催することができた。
- 校区にある人権のまちづくり推進協議会「八幡よかとこ会」と協力し、防災・減災をテーマにした映画「ふしぎな石～開上の海」の上映会を開催することができた。
- 宮城県気仙沼市立鹿折小学校の4年生児童と本校4年生児童同士のオンライン交流会を実施することができた。

4) 実践の成果

① 減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

- 各学年の防災・減災に関わるカリキュラムの見直しをおこない改善を図ることで、より効果のあるカリキュラムとなってきた。
- やはタウン・スクールという構想のもと地域住民に授業への参加を呼びかけ、地域住民が学習者として子どもたちと一緒に学んだことで、地域とともに学ぶ防災・減災教育という視点が教育活動に取り込まれてきている。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- 第4学年の授業では、校区行政区での防災体験の実施や校区防災マップ作りの実践により、自分ごととしての捉えをしつかり持つことで、自身の防災・減災への取り組みを見つめ直していくことにつながってきている。また、宮城県という遠く離れた同世代との授業交流を通して防災・減災への学習意欲を高めることができた。
- 「防災・減災の図書コーナー」設置により、児童は「いつでも、すぐに」触れることができ、防災・減災についての興味関心を高め、内容についても深く追求していくことにつながっている。
- 年間を通して防災・減災に関する訓練（安全の行事）や学習活動（教科、総合的な学習の時間など）を仕組むことで、自然環境の変化や前兆を察知し危険回避能力を発揮して、自分や周りの人々の命を守る行動ができるような力が育ちつつある。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- 八幡っ子応援隊や区長会、消防団などの地域団体との連携（やは・タウンスクール構想）で、次の取り組みができた。
 - ・ 第4学年社会科「水害にそなえたまちづくり」の授業では、行政区の防災の取り組みや消防団活動について見学や体験などの活動を仕組むことができた。
 - ・ 授業に地域住民の参加を呼びかけたことで、防災に対する行政や校区の取り組み調べ、校区の危険箇所調べ、校区防災マップ作りなどを児童と一緒に学ぶ機会となり、地域住民の防災意識の向上につながった。
- 児童引き渡し訓練では、訓練をおこなう前に文書を配布するだけでなく、動画を作成し視聴する時間を設けたことにより、その目的や訓練の流れについて保護者と共有できるようにすることができた。
- 11月21日に開催した小中一貫教育研究発表会で上記授業を公開したり、9月研修会の開催報告を掲示・紹介したりすることで、防災・減災教育プログラム事業を市内の先生方へ広げることができた。また、その様子は市社会教育課発刊の「八女市地域学校協働活動だより（51号）」で紹介された。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- 保護者や地域住民とともに取り組む防災・減災教育活動（やは・タウンスクール構想）
- 本校防災・減災教育の市内他校への積極的な発信

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- 系統的な内容を踏まえた持続可能な防災・減災教育カリキュラムの作成をおこなう。
- 校区行政区や消防団との連携した防災・減災活動の広がりを探っていく。
- 他地域で取り組まれている引き渡し訓練に学び本校の内容を検討することで、実際の引き渡しや次年度以降の訓練を改善し保護者への啓発につなげていきたい。

学校名	徳之島町立亀徳小学校（鹿児島県大島郡）
-----	---------------------

活動のテーマ	児童・学校・地域の防災意識・防災技術の向上と防災文化の醸成										
主な教科領域等	教科領域（理科，家庭科，保健，総合的な学習の時間，学級活動，避難訓練 ）										
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） <table><tr><td>☐ 地域連携</td><td>☐ 避難訓練・避難所運営</td><td>☐ 専門家の活用</td><td>☐ 体験学習</td><td>☐ 学校間・地域間交流</td></tr><tr><td>☐ 教科連携</td><td>☐ 地域発信</td><td>☐ カリキュラム開発</td><td></td><td></td></tr></table>	☐ 地域連携	☐ 避難訓練・避難所運営	☐ 専門家の活用	☐ 体験学習	☐ 学校間・地域間交流	☐ 教科連携	☐ 地域発信	☐ カリキュラム開発		
☐ 地域連携	☐ 避難訓練・避難所運営	☐ 専門家の活用	☐ 体験学習	☐ 学校間・地域間交流							
☐ 教科連携	☐ 地域発信	☐ カリキュラム開発									
活動に参加した児童生徒数	（1～6 学年 1 1 5 人）（複数可）										
活動に携わった教員数	（1 8 ）人										
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（6 0 ）人 【 ☐ 保護者 ☐ 地域住民 ☐ その他（徳之島町総務課防災担当，町社会福祉協議会，亀徳地区役員，町消防組合，徳之島高校）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）										
実践期間	西暦2023年 4月10日 ～ 西暦2024年3月25日										
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 <table><tr><td>☐地震</td><td>☐津波</td><td>☐台風</td><td>☐洪水</td><td>☐河川氾濫</td><td>☐土砂</td><td>その他（ ）</td></tr></table>	☐ 地震	☐ 津波	☐ 台風	☐ 洪水	☐ 河川氾濫	☐ 土砂	その他（ ）			
☐ 地震	☐ 津波	☐ 台風	☐ 洪水	☐ 河川氾濫	☐ 土砂	その他（ ）					

活動報告

1）活動の目的・ねらい

目標 基本的な防火防災の知識を身に付けさせ、非常時における避難の技能及び規律ある態度を育てる。

努力点

- ・教職員及び児童が、災害予防に対する知識を深め、「率先避難者」として避難できるようにする。
- ・災害を未然に防ぐよう防災意識を高め、防災文化を創造する。
- ・災害発生時には、被害を最小限に食い止めることができるように、体制を整え訓練する。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

5月10日	亀徳小周辺の地理的状況説明	1月17日	防災学習（炊き出し体験・社協による防災教室）
6月6日	津波発生時の避難経路確認・共有	1月19日	防災学習（紙芝居・カルタ・クイズ）
7月11日	津波対応訓練（高台への駆け上がり）	1月19日	防災学習（亀徳地域タウンウォッチング）
9月9日	火災対応消火器使用訓練	1月31日	防災学習（日本赤十字社「語り部体験談視聴」）
10月12日	津波対応訓練（別経路での高台避難）	2月20日	防災教育発表会（児童から保護者へ発表・提言）
11月8日	地震・火災・津波想定避難訓練	2月27日	防災教育発表会（児童から地域へ発表・提言）
11月14日	防災学習（地震津波発生メカニズム）	2月29日	津波対応訓練（予告なし・引率なし）
12月2日	亀徳地区役員会（学校から地域へ提言）	3月	防災の本スタンプラリー
12月6日	防災学習（NHK アナウンサーによる防災教育）	3月	防災キャラクター・防災メッセージ作成
12月11日	津波対応訓練（予告なし・引率なし）	3月22日	防災メッセージ配布・清掃・街歩き
1月16日	防災学習（避難所開設・物や人の運搬訓練）		

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・9月研修会内容の職員との共通理解（本校課題と改善の必要がある点を共有）
- ・地域住民との連携構築（亀徳地区役員会で防災について発表・提言，地区住民へ児童作成の防災新聞全戸配布）
- ・徳之島高校との連携
（ハザードマップ作製など防災教育に関する意見交換，避難訓練相互参観，地区防災庫防災備品の確認）
- ・行政，専門機関との連携「N助」（町総務課防災担当，町社会福祉協議会，日本赤十字社鹿児島支部，町消防組合等）
- ・本校の防災備品購入（折りたたみリュック，防災ラジオなど）
- ・防災に関する図書（児童用・指導者用），教具（カルタ，カードゲーム，紙芝居，DVD プレーヤー）の購入
- ・防災教育の見直し（避難訓練の実際の活動＋地震や津波に関する知識習得学習「チョコ防タイム」の導入）
- ・防災をテーマにして各教科，学級活動，体験活動を総合単元的な防災カリキュラムの検討・試験的に実施（6年）
- ・避難訓練の計画・活動内容の見直し（複数の避難経路，予告なし，児童主体の避難行動）

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

及川先生が話された「SDG s 視点からの減災・復興の4つの教育プロセス step1～4」に照らし合わせると9月の教員研修会以前の本校の取組は、その都度工夫改善しているが、基本的に避難訓練を繰り返しているだけであり、防災教育としては不十分な内容であることが明らかになった。

そこで、災害に関する知識理解、因果関係の認識力、被災からの復興に関する学習や体験活動を取り入れたり、地域や行政、専門機関との連携「N 助」を構築したりできるようにすることの重要性を職員で共有し、本年度から計画や内容の見直しを進めるようにした。

また、亀徳地域役員会、町役場、徳之島高校、社会福祉協議会、日本赤十字鹿児島支部、NHK 鹿児島、鹿児島大学地域防災教育研究センターにも連携や助言を積極的に働きかけ、防災ネットワーク構築に努めた。

他にも5・6年生の各教科、総合的な学習の時間、学級活動、避難訓練や体験活動など防災をテーマに総合単元的に学習を進めた。そのまとめとして児童が保護者や地域に防災学習について発表する会「守ろう！亀徳の未来」を実施した。最後に地域の災害体験など教えたり、防災アンケートに答えたりしてくださったみなさんに「防災メッセージカード」を配布し、防災への意識を高めてもらえるように街歩きに行き、呼びかける活動ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

繰り返しの避難訓練により、防災行動(校内外での避難行動、整列、次の避難への準備)が、速く正確になった。また、避難経路を複数設定し、どちらへ避難するか考えさせたり、告知なし、引率なしで避難行動をとらせたりすることで、思考し判断しようとする能力、態度が身に付きつつある。災害に関する知識理解も防災学習を通して得られ、適切な避難の方法や避難行動の必要性について根拠をもちつつ、理解できるようになってきたように感じる。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

教師間で防災教育や避難訓練について話したり、得られた情報を共有したりする場面が見られるようになった。保護者、地域には、連絡メールで避難訓練の日程を知らせたり、地域の全戸数に児童が作成した防災新聞を配布したりして啓発を始めている。地域は、本校の防災教育の取組に呼応し、以前作成した「自主防災組織図」の見直し、防災学習会や地域防災訓練を計画し、行った。町役場や消防組合、社会福祉協議会は、本校の訓練や体験の要望に積極的に応え、「避難所開設訓練」や「炊き出し訓練」、「物や人の運搬訓練」が実現した。そして、これらの取組から学んだことを保護者や地域の方々、専門機関に伝える防災学習発表会「守ろう！亀徳の未来！」を実施した。この会の児童の真剣な発表が、徳之島町議会で取り上げられるなど亀徳地域や徳之島町で大きな反響を呼ぶ充実した取組となった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・学習計画や内容の大幅な見直しは、職員会議などで検討した上で次年度から実施するのが通例だが、改善の必要性和緊急性を指摘し、本年度10月から新しい計画、内容を実施した。

・児童が様々な視点から防災について考え、体験的、総合的に理解し、防災意識を高め、将来的に「真の率先避難者」となる素地を身につけられるように、総合単元的な防災学習カリキュラムを計画した。学習の最後に保護者や地域、関係機関に対して防災教育発表会を行うことにより、学校内外で相互に防災意識を高め、刺激し合い、学校・地域全体で防災文化を醸成し、持続可能な防災教育・防災活動としていくきっかけになってほしいと考え、実施した。

・地域や行政、専門機関と連携を構築するために、情報を得ては直接話し合ったり、遠方の場合は電話やメールで問い合わせたりして協力関係を作った。校内だけの内向きの防災ではなく、様々な点から開かれた学校防災になりつつある。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・異例ではあるが、本年度途中に防災教育の計画、内容を見直し試験運用し、次年度への導入について検討を重ねた。そのため、課題や成果をとらえつつ、改善した計画で提案でき、次年度への導入がスムーズにできた。

・来年度以降、持続可能な防災教育カリキュラム構築をめざし、校内での防災教育をさらに充実させていく必要がある。そのために、これまで取り組んできた地震津波対応訓練(高台への避難)と災害に関する知識理解、因果関係の認識力を身につけさせる学習「チョコ防タイム」を計画実施したり、各教科の学習の中にも防災を意識させた学習を取り入れたり、上学年で集中的かつ総合単元的に防災について学ばせたりできるように「防災視点」を持たせた教育課程を編成した。

・児童、教職員の防災教育への関心を高めるために、図書室に防災コーナーを設置し、防災教育に関する指導書、参考書、絵本を充実させた。定期的に「防災読書スタンプラリー」などを行い、その効果的な活用についても取り組んでいく。

・避難訓練の参観や防災新聞の配布、地区との合同訓練や行事の計画実施など行い、児童を取り巻く保護者、地域への働きかけを続け、校区全体の「防災意識」を高める必要がある。

・教職員が個々の防災知識や技能を高め、発災時に冷静に協力して児童の命が守れるようにさらに研修する必要がある。

・行政、各専門機関と協力しながら活動を進め、日常時から連携を深めていけるようにしたい。

7) その他 (※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ (JPEG) もご提供ください。

【避難訓練の様子】

(高台への駆け上がり)
海拔約55mのサトウキビ畑の空き地に避難している。

徳之島町が、学校の横の敷地に避難用の駐車場を建設し、駆け上りの距離は、大幅に短くなり、避難にかかる時間は短縮された。条件の異なる場面設定をしたり、予告せず、児童に思考させる場面を作ったりするなど工夫を重ねて実施している。



土砂崩れなどを想定した訓練



複数の避難経路の設定



建設された避難用駐車場



高台避難場所のサトウキビ畑の様子

【災害に関する知識理解、因果関係の認識力を学ぶ学習】

日本赤十字社の防災教育プログラムを使い、津波発生メカニズムを学んだり、NHK アナウンサーによる防災教室を実施したり、東日本大震災の語り部の体験談を視聴したりした。



津波の発生メカニズムについての学習



東日本大震災語り部体験談視聴

【地域との連携】

校内で児童が作っている「防災新聞」を亀徳地域全戸に配布したり、学校での取組、地域の地理的環境、地域での防災のあり方について講演したりし、防災意識を高めてもらえるよう活動した。また、学習のまとめとして防災学習発表会を開催した。6年生が保護者や地域、専門機関の方々に防災学習で学んだことを工夫してまとめ発表し、大きな反響を呼んだ。



児童が作成した防災新聞



亀徳地区役員会・防災教室での講演を実施



6年生による防災学習発表会の様子



地域での防災メッセージカード配布の様子

学校名	むかわ町立鵜川中学校
-----	------------

活動のテーマ	震災の記憶をタテとヨコにつないで未来の命を守る 鵜川中ぼうさい2.0
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 教科連携 地域発信 カリキュラム開発 学校間・地域間交流
活動に参加した児童生徒数	（ 3 学年 109 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 16 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 40 ）人 【保護者・地域住民・その他（ 講師・大学生 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023年 4月 1日 ～ 西暦 2024年 3月 22日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

2018年の胆振東部地震から5年が経過し、在校生徒が地震を経験した年齢が低くなり、震災の記憶をいかに継承するかが課題となっている。

そこで地域の方々の参画を得て震災の記憶を継承する活動を新たにスタートしたり、これまでの活動を教科横断的に体系化し校内組織を見直したりすることによって、地域との促進を図り減災学習の持続可能な仕組みづくりを目指している。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○避難訓練（5/30（火災）、7/21（地震）、9/28（津波）、2/15（冬季・地震）） 全学年対象

想定別で年4回の避難訓練を実施した。各避難訓練の想定などは以下のように行った。

①5月（火災）：授業中に実施。教員・生徒ともに予告あり

②7月（地震）：昼休みに実施。教員は予告あり・生徒は実施日のみ予告なし

③9月（津波）：授業中に実施。教員・生徒ともに予告あり。地域の方々が参加。約2kmの水平避難。

④2月（冬季・地震）：昼休みに実施。教員・生徒ともに実施日のみ予告なし。

○被災体験聞き取り活動（8/22、8/24） 全学年対象

胆振東部地震の被災体験の聞き取り活動を学年ごとに実施。1年生は家族や親戚から震災当時の生活について、2年生は役場や消防など公的な役割を担った方から当時の対応について、3年生は町内の商店や事業所など民間の方からそれぞれの立場で地域にどのように貢献したかについて聞き取り、内容をレポートにまとめた。また、各学年の代表者は下記の防災集会にて聞き取った概要と感じたことなどを発表した。

○防災集会・オンライン講演会（9/6） 全学年対象

震災から5年の節目を迎え、これまでの取組をふり振り返りながら、減災を学ぶ意義の確認および上記の聞き取り活動の発表を生徒会主導で行った。

オンライン講演会では、中学生が震災時にどのような役割を果たせるのか考えさせるために、東日本大震災で被災された方を講師に迎えた。震災前にどのような減災学習を行っていたのかや震災当時の状況についてリアリティのあるお話をしていただいた後、縦割り班でのワークショップで今後取り組んでみたい減災学習について話し合いを行った。

○ハザードマップ学習（10/24） 2学年対象

むかわ町が作成したハザードマップをもとに、フィールドワーク形式で町内を実際に歩きながら津波による被害を具体的にイメージするとともに、必要な対策について考えた。

○災害図上訓練（DIG）学習（11/7） 2学年対象

ハザードマップで学習した地域の情報をはじめ、自然条件や災害の際に役立つ施設、想定される被害などを地図に記入しながら、災害が起きた際の対応や想定されている避難所までの経路の検証を行った。

○避難所運営ゲーム（HUG）学習（12/5） 3学年対象

本校の体育館や各教室を避難所に想定し、避難者や配給物資、トラブルへの対応について話し合う活動を通して、災害発生時に求められる判断力や日常の備えについて学んだ。

○その他

このほかに理科や社会で災害そのものについて、家庭科で災害への備えや対応について、保健体育で応急処置や心肺蘇生について、道徳で津波に関する題材を扱い生命の尊さについて学ぶなど、教科横断的に減災学習を実施した。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

本校では、これまで生徒の当事者意識が弱いことや地域との連携が少ないことなどが問題点としてあり、9月研修後はその2点に力を入れ、働きかけを行った。

まず、1点目の当事者意識についてだが、生徒に減災学習の意義を丁寧に指導したり、活動前に事前学習の一環として興味の湧くような取組を入れたりするなど、減災学習に対して前向きに取り組めるように努めた。

2点目の連携が少ないことについては、津波を想定した避難訓練やハザードマップ学習、災害図上訓練（DIG）学習、避難所運営ゲーム（HUG）学習などの取組に積極的に地域住民や行政関係者等を招いて減災学習の輪を広げた。今年度は延べ40名程度の地域住民や関係者の方に協力を得ることができた。

また、助成金があることによって減災学習に必要な道具や非常食を購入したり、講師を迎え、より肌感覚に近い実体験を聞いたりするなど、学習内容をより一層充実させることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

震災の記憶を継承する活動に地域の方が参画したことによって、校内の担当者が代わっても持続できる仕組みを構築できつつある。また、地域の人材が中学校とつながりをもつだけでなく、専門家の方々と地域の方々のつながりや地域関係者同士のつながりなど、ネットワークを広げることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

当事者意識をもつことの重要性を繰り返し伝えたことも影響し、減災学習に対する取組姿勢が前向きなものへと変わりつつある。また、減災学習を通じて今の自分たちにできることや取り組んでみたいことなどを様々な視点から考え、共有することができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

地域の方に減災教育へ積極的に参加していただいたことにより、当事者意識や危機感をもってもらうことにつながった。特に、津波を想定した避難訓練に参加した地域の方から、町が指定した避難ルートに対して様々なリスクや課題の指摘があったことは、今後の地域の減災を考える上で有意義であった。また、この研修に参加したことや本校で実際に取り組んだことを通じて、教員もさらに当事者意識を強くもつ必要があると感じた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

縦割り班でワークショップを行ったり、各学年で学んだことを共有したりしたことでタテの関係を構築できた。また、地域の方々が積極的に活動へ参加してくださったことにより、ヨコの連携を推進していくことができた。タテとヨコの連携が図られていることにより、職員が入れ替わっても継続して取り組んでいける持続可能な減災学習へとつながりつつある。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

本研修と本校での実践から、災害発生の仕組み（Step1）や被災からの復興と持続可能な社会の創造（Step4）に関する取組が弱く、順序立てて計画的に減災教育を進めていくことの重要性を学んだ。来年度は、現在の減災教育の全体計画をブラッシュアップし、小学校や高校を含めた地域との連携をさらに強めていきたい。

7) その他 (※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ (JPEG) もご提供ください。



～3年生聞き取り活動 (8/24) の様子～

6名の講師の方に来校していただき、ブース形式でグループごとにローテーションしながら、当時の状況や地域のためにどのように貢献したのかなどについて聞き取りを行った。若者が大いに貢献してくれたことを講師の方が話していたので、生徒たちは同じ立場になった際の自分の姿をイメージすることができた。



～防災集会・オンライン講演会 (9/6) の様子～

左記の写真は防災集会における黙祷の様子である。防災集会で生徒会による防災宣言や黙祷、聞き取り活動の発表を行い、これまでの取組をふり振り返りながら、減災に取り組む意義を確認した。また、オンライン講演会では釜石市「いのちをつなぐ未来館」の川崎杏樹氏に講師を依頼し、当事者意識を育てることにつながった。



～津波避難訓練 (9/28) の様子～

津波を想定した避難訓練の様子である。本校は津波災害警戒地域内にあり、津波予想浸水が5.2mとなっていることから垂直避難ではなく、2km余りの水平避難が求められる。実際に避難経路を歩くと同時に、教員の体にGoProをつけ、どのぐらいの時間がかかるか、また生徒がどのような動きをしているかを記録した。



～3年生避難所運営ゲーム (HUG) 訓練 (12/5) の様子～

避難所を運営する立場に立って、避難してくる人々を適切と思われる教室等の場所へ振り分けた。避難場所の数が限られている中で、乳児、感染症、認知症、旅行者、盲導犬、車で避難者など、さまざまな人々を受け入れる大変さを学んだ。

学校名	石巻市立北上中学校
-----	-----------

活動のテーマ	いのちの大切さの語り部として、自分ができるところから始めよう！！
主な教科領域等	教科領域（社会・理科・道徳科・学級活動・総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1 ～ 3 学年 4 4 人 ）（全校生徒参加）
活動に携わった教員数	（ 1 5 ）人 （全職員参加）
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 7 0 ）人 【保護者・地域住民・その他（北上こども園・北上小学校・北上総合支所・北上公民館・北上消防署・北上駐在所）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2 0 2 3 年 5 月 1 日 ～ 西暦 2 0 2 4 年 3 月 2 1 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

世界で最も尊い、自分のたった一つの「いのち」を大切にするとともに、他の人の「いのち」を認め、それぞれの「いのち」に秘められている無限の可能性を発揮するために何ができるかを考え、行動できるようするため、次のような生徒を育む。

- ① 自分のいのちには、無限の可能性が秘められていることを認識し、自分のいのちを大切にしようとする。
- ② 自分のいのちや隣の人のいのちを守ることの重要性を知り、自分にできることを考えることができる。
- ③ 東日本大震災で大きな被害を受けたふるさと石巻市北上で生きている一人の人間として、自分ができるところを進んでしようとする。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- ① 6月から8月：「ど根性ひまわり」の植栽活動（希望塾、生徒会）
兵庫県から送られた、震災のがれきから芽を出し花を咲かせた「ど根性ひまわり」の種を校舎周辺や近隣の地域にまき、花を咲かせた。取れた種で次年度はもっとたくさんの地域に広めて花を咲かせる計画を立てている。
- ② 10月、12月：「いのちの大切さを考える学習」
学年ごとに、社会科の授業の一環で、震災遺構「門脇小学校」へ行き語り部の方や当時小学生だった方から話を聞いた。震災当時の石巻について学びながら、命の大切さやこれから自分たちができることについて改めて考えることができた。
- ③ 11月：石巻市総合防災訓練での活動
「いのちの大切さを考える学習」等で学んだことを生かし、小学校、保護者、地域住民と石巻市全体で実施される総合防災訓練に参加した。訓練では小中合同訓練を行い、グループごとに小学生をリードしながら活動を行った。
- ④ 1月：震災被災地間の交流活動
「いのちの大切さを考える授業」で学んだこと、考えたことを伝えるため神奈川県の中学校との実践授業交流を行う。
- ⑤ 2月：シェイクアウト訓練の実施（生徒会）
「いのちの大切さを考える学習」を受け、生徒会の整美保健委員会が主体となり、いざという時に自分自身の身を守るための訓練を計画した。今後反省点を生かしながら継続して行っていく。
- ⑥ 通年：北上希望塾「いのちの大切さを考える会」
希望する生徒による自主的な活動を行う。東日本大震災の祈念集会では、能登半島地震でボランティアを行った方の話を聞いて考えたことを代表生徒が発表した。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

昨年度まで校内では、避難訓練を地震・火災・原子力・不審者の4つに分けて実施した。また、石巻市が主催となる石巻市総合防災訓練を実施していた。それぞれの訓練において、自分の身の安全を守る訓練を行ってきた。

今年度は、社会科の学習における発展的な学習として、石巻市内の震災遺構の一つである、門脇小学校の見学を全学年で行った。それぞれの学年で見学を通じて、命の大切さやこれから自分たちができることについて考えることができた。また、2年生においては、神奈川県横浜市内の中学校に対して、東日本大震災について当時の話を聞いたり震災遺構を見学したりして学んだことを発信するオンラインでの交流授業を行った。

へき地2級の本校では公共交通機関がなく、施設訪問するためには輸送費が課題であった。しかし、今年度は、助成金をいただき、全校生徒が震災遺構での体験学習を行うことができた。また、生徒が体験を通じて学んだことを北上地区内外に発信する資料等を作成することも可能になった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

11月5日(日)に石巻市総合防災訓練が市全体で行われた。市内の小中学校も今年度から登校日となり訓練に参加した。そこで、学校が中心となって立ち上げた地域防災連絡会が計画して活動を行ったが、もっと地域での活動ができるようにしていく必要があると考えている。今年度は、地域の方々にも広く訓練に参加していただき、児童生徒と活動を行っていただいた。次年度からは、今年度実施した「いのちの大切さを考える学習」で学んだことや考えたことをもとに、生徒が各地区で震災の記憶を伝える活動や、地域防災について地域住民と考え、いざという時に生かせるような活動につなげていきたいと考えている。1月の交流授業を通して、今後震災の記憶を地域だけでなく、他の地区に住む同年代の仲間たちにも広めていく語り部の役割を担っていく予定である。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

生徒のほとんどは、東日本大震災について家族から聞いてはいるが、詳しい被害状況や当時被災した人たちがどのような思いで生活していたかなどまでは聞いていない生徒が多かった。今回「いのちの大切さを考える学習」で震災遺構を見学し、当時小学生だった方から話を聞いたことで、どのようなことが起こったのか、被災した人たちはどのような思いで今まで生活してきたのかを知る機会となった。この活動をきっかけに、今年度取り組んだ「ど根性ヒマワリ」を来年度どうしたらもっと地域に広められるかを真剣に考えたり、いざという時に自分で自分のいのちを守るために「シェイクアウト訓練」を計画したり、生徒たちなりに今できることを考え実践しようとする様子が見られるようになってきた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

学校では毎年避難訓練や防災教育などをしっかり行っているが、実際に震災遺構を見学し、生の声を聴くことは生徒たちの心を大きく揺さぶったと感じる。この北上で何が起きたかを知り、伝えていくことが、生徒自身のためにも地域のためにも必要なことである。児童生徒数が減少し、集落に小中学生がいない地区もあり、子どもたちが地域で活動することを楽しみにしている高齢者も多いため、地域に向けてさらに発信していく必要がある。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

「いのちの大切さを学ぶ学習」で学んだことを、他の活動につなげることができた。門脇小学校の卒業生の話から、自分のいのちは自分で守るということを学び、委員会活動の中でシェイクアウト訓練を企画したり、被災地だからこそ伝えられることをオンラインで他の地区の中学生に発信したりすることもできた。次年度からは地域の防災訓練を中学生が主体となって、地域ごとに行いたいと考えている。そのためにも、もっと地域のことを知り、地域の方から話を聞きそれを自分たちの言葉で伝えていく活動をしていく必要がある。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

東日本大震災で大きな被害を受けた北上地区に住んでいても、震災から12年が経過した現在ではその当時のことをあまり聞いたり話したりすることがない。そのような実態を受け、震災遺構を見学させていただいたことで、生徒たちの意識に変化が見られた。今後は、地元のことをさらによく知り、これから自分たちが地域で何ができるかを考えていくことが必要である。さらに自分たちが考えたことを自分たちの言葉で伝え、震災の記憶を地域だけでなく、他の地域に住む同年代の仲間たちにも広めていく語り部の役割を担っていくことも大切である。

7) その他 (※特にあれば記述)

①震災遺構見学 (門脇小学校) ※全学年対象



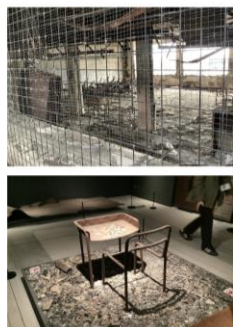
②生徒が交流授業に向けて作成したスライド資料 ※一部抜粋

命を守る取り組みとして

- ・ 率先して避難することが大切
- ・ あわてない
- ・ 非常用持ち出しバッグを用意する
- ・ 食料や飲料の備蓄をする
- ・ 家具の固定や配置の工夫などをする



石巻市について②



石巻市について②

- ・ 死者は約4000人
- ・ 津波の高さは8.6メートル以上
- ・ 震度6弱を観測された
- ・ 地震発生時から約5分で津波が到達
- ・ 約6分間揺れが続いた
- ・ 震災後復興の取り組みを行なっている (防波堤の整備や避難ビルの建設など)
- ・ 死者、行方不明者が一番多い



↑
震災当時の写真

→各グループで、ICT機材を用いて発表資料を作成した。授業では、4つの班に分かれ、それぞれの班で東日本大震災当時の石巻市内の被災状況や門脇小学校の状況、命を守る取り組みとして考えたことをまとめ、発表した。また、交流授業の相手校も、関東大震災についてのプレゼンテーションを行い、関東大震災の概要や調べていく上で学んだことを発表してもらった。互いの発表をふまえた上で、先人たちがこれまでに築き上げてきた生活・文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく私達に何ができるかを考察し、意見交流を行った。自ら震災のことを知ることで、改めて命の大切さについて学び、深め合う時間となった。

③石巻市総合防災訓練での様子



交流授業 指導案

社会科学習指導案

日 時 令和6年1月19日 5校時
場 所 2年1組教室
授業者 教諭 XXXXXXXXXX

1 単元名

「東北地方―伝統的な生活・文化を受けつぐ人々の暮らし―」

(東京書籍 新しい社会 地理 P246～P255)

2 単元について

(1) 単元観

本単元は、学習指導要領解説の地理的分野目標(2)地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養うことに基づいて、内容 C日本の様々な地域 (3)日本の諸地域にあたる。日本を7つの地域に区分しそれぞれの地域について、自然環境、人口や都市・村落、産業、交通や通信、その他の事象を中核とした考察の仕方を基にして、空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、地域的特色や課題についての知識を身につけさせ、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現できるようにさせることをねらいとしている。

豊かな自然に恵まれている東北地方ではあるが、時として大雪や冷害、風水害等の自然災害に見舞われることも少なくない。そうした自然と辛抱強く向き合いながら、東北地方を日本有数の穀倉地帯としてきた人々の努力に目を向けさせたい。また、東北各地の伝統産業や生活・文化を取り上げ、自然環境に応じてはぐくまれた先人の知恵や思いを汲み取らせたい。

近年は、交通網の発達や国際化の進展により、東北自動車道に沿った地域を中心に新しい産業が進出してきており、地域に根ざした伝統的な産業や生活・文化にも変容が見られることに着目させながら、東日本大震災からの復興途中にある身近な地域の将来像について、生徒たちに想起させることができる単元の学習にしていきたいと考え、設定した。

(2) 生徒観

授業に対して意欲的に取り組むことができる生徒が多い学級である。これまでの課題に対しても粘り強く考える生徒が多く、自己解決が難しいときには、お互いに教えながら取り組むことができる。

実態把握のアンケートでは、東北地方と聞いてもつイメージに対しては、米やトマトなどの農産物の栽培がさかんであること、海産物がたくさんとれること、海に面している地域といった自分たちが暮らす地域に着目した回答が目立った。また、東北地方と言われて東北6県の名称は出てくるが、宮城県以外のことはあまり知らず、自分たちの住む宮城県を中心に東北地方をとらえているようである。東日本大震災のことについては、生まれて間もないということもあり、本人達の記憶としてはないに等しい。保護者や地域の人から震災時の話を聞いたり、写真や映像などの資料を見て知ったりといった経験のみである。

(3) 指導観

上記の生徒の実態を受け、東北地方全体を地形・気候を中心におさえさせながら、自然環境に応じた東北各地の生活・文化がどのようなものであるのか取り上げ理解させていきたい。そのために本単元の学習では、伝統的な生活・文化に関する事例を写真や映像、雨温図などの資料で提示し、各地域の特徴をとらえさせるようにする。

さらに、東北地方の伝統的な生活・文化に関する特色ある事象に着目し、東日本大震災などの過去の災害からの教訓をどのように引き継いでいるのか震災遺構の見学や講話を通じて、どのように生かしていけばよいかということ、未来を生きる人たちにどのように伝えていくかということについて考察させていきたい。

また、この学んできたことを多くの人に知ってもらうために、他県の中学生との交流を通じて、互いに先人たちが築き上げてきた生活文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく自分達に何ができるか追究し、今後震災の記憶を地域だけでなく、他の地区に住む同年代の仲間たちにも広めていく語り部の役割を担っていくことを目標としていきたい。

3 単元の目標と指導計画及び評価規準

(1) 単元の目標

- ・東北地方の地域的特色や地域の課題について理解する。
- ・東北地方に古くから伝わる生活や文化、伝統産業が成立した背景を理解した上で、その地域で暮らす人々の生活や文化における課題や変化について考察し、表現することができる。
- ・東北地方が過去の災害等の教訓をもとに行う取り組みについて調査し、追求しようとしている。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①東北地方について、その地域的特色や地域の課題を理解している。 ②その他（生活・文化）を中核とした考察の仕方に取り上げた特色ある事象と、それに関連する他の事象やそこで生じる課題を理解している。	東北地方に古くから伝わる生活や文化、伝統産業が成立した背景を理解した上で、その地域で暮らす人々の生活や文化における課題や変化について考察し、表現している。	東北地方の人々が過去の災害等の教訓をもとに行う取り組みについて調査し、追求しようとしている。

(3) 指導と評価の計画（5時間扱い）

時間	本時のねらい	学習活動	評価の観点			評価規準
			知技	思判表	態度	
1	東北地方の地形、気候について理解する。	・白地図や写真等の資料から東北地方の地形や気候を概観し、基礎・基本の知識を身につける。	○			山地が多く東西で大きく異なる気候、さかんな農業などの特徴を理解し、その知識を身につけている。【知・技①】[ワークシート]
2	東北地方の伝統的な生活・文化を理解する。	・東北地方の民俗行事、夏の六大祭りについて、気候と関連づけて調べてまとめる。	○	◎		・民俗行事や祭りの資料を通して、東北地方の生活・文化の特色を理解している。【知・技①】[ワークシート] ・民俗行事や祭りが成立した背景には、気候や農作物と関連していることを理解している。【思】[作成したスライド資料]
3	東北地方の伝統産業の変遷を理解する。	・東北地方の伝統産業や地場産業の特徴について、自然環境との結び付きから理解する。 ・伝統的な産業が、世界市場や社会の変化と結びつきながら変化し、発展していることを考察する。	○	◎		・東北地方の伝統産業や地場産業が発展した理由について、自然環境に関連付けて理解している。【知・技②】[ワークシート] ・東北地方の産業の課題や変化について、多面的に考察している。【思】[作成したスライド資料]
4	自然災害における教訓について理解する。	・東北地方で繰り返されてきた地震や津波の被害に着目し、被災した人々が残した教訓について調べてまとめる。 ・東日本大震災や過去の教訓をもとに、先人の思いや今後の社会の在り方について考察する。		◎		人々がどのような思いで災害の教訓を受けつぎ、未来へ生かそうとしているか考察しようとしている。【思】[作成したスライド資料]

5 本時	・よりよい社会の実現を視野に、東北地方の学習をふり返り、探究課題を主体的に追求する。	・これまでに学習してきた生活・文化を中核とした考察の仕方に取り上げた東北地方の地域的特色とそこで生ずる課題を「まとめの活動」を通して振り返る。 ・東北地方で繰り返されてきた地震や津波の被害に着目し、被災した人々が残した教訓について調べてまとめたことを発表し、意見交流を行う。			◎	・先人たちが築き上げてきた生活文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく自分達に何ができるか追究し、社会に関わろうとしている。【主】[発表、グループ活動]
---------	--	--	--	--	---	---

○指導に生かす評価 ◎記録に残す評価

4 本時の指導計画

(1) 題材名

「東北地方をふり返ろう」(東京書籍 新しい地理 P 2 5 4～P 2 5 5)

(2) 本時の目標

・先人たちが築き上げてきた生活文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく自分達に何ができるか追究し、社会に関わろうとする。(主体的に学習に取り組む態度)

(3) 本時における指導の手立て

前時では、東北地方の振り返り学習の一環として、震災遺構である、門脇小学校の施設見学を行った。その中で見て体験したことや講師の先生から話を聞いて感じたことなどを、グループごとに I C T 機材を用いてスライドでまとめあげた。これを基にして、本単元の目標でもある、震災の記憶を地域だけでなく、他の地区に住む同年代の仲間たちにも広めていく語り部の役割を担っていくために、オンラインによる他県の中学生との交流を行う。また、作成したスライドを用いて学んだことや、未来を生きていく自分達にできることを発表し合うことで、学んだことをどのように生かしていけばよいかということ、未来を生きる人たちにどのように伝えていくかということについて考察させていく。

(4) 指導過程 (別紙)

(5) 評価

	補充的な学習が必要な生徒への手立て	評価規準	発展的な学習が必要な生徒への手立て
主 主体的に学習に取り組む態度	・スライド作成時に用いたり、質疑応答で出てきたキーワードをもとに、自分の考えを簡潔に答えることができるように教師がヒントを提示する。	先人たちが築き上げてきた生活文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく自分達に何ができるか追究し、社会に関わろうとしている。	・学校生活や地域でのどのような場面において生かすことができるかを考えるよう促す。

(4) 指導過程

段階 時間	主な学習内容 □予想される生徒の反応、発言等 △発問 ▲指示	形態	◇教師の支援 ●補充的な学習が必要な生徒への手立て ○発展的な学習が必要な生徒への手立て 評価基準と方法【観点】[方法]
導入 3分	1 本時の課題を確認する。 東北地方の先人たちがこれまでに築き上げてきた生活・文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく私達ができることは何か考えよう。	一斉 ペア グループ	◇プリントやノート、ワークシート等で近くの人と確認するように促す。
展開 45分	2 交流する学校と Meet をつなぐ。 ▲各グループに分かれて、班長は、Meet の画面を開き、発表の準備をする。 3 交流授業における説明をし、北上中学校は各グループ発表を行う。 ▲発表する北上中学校の生徒は、自分たちが作成したスライドを画面共有して発表する。(発表時間 10分程度) ・A班～D班は、一斉に発表を行う。 ・北上中学校の発表内容の順番は、『石巻市について→震災当時の石巻市内の状況について→東日本大震災について→震災遺構・門脇小学校のことについて→命を守る取り組みとしてどのようなことが必要か→調べ学習を通じて分かったことのまとめ』とする。 ▲発表内容を聞いた東山田中学校の生徒は、北上中学校に質問・感想発表をする。(質疑応答、感想発表の時間 5分程度) 4 東山田中学校の生徒は、発表を行う。 ▲東山田中学校の生徒が、関東地方の災害対策についてまとめた発表をしてもらう。(発表時間 5分程度) ▲北上中学校は、質疑応答・感想発表する。(質疑応答の時間 5分程度) 5 お互いの発表を聞いて、考えたことを発表し合う。 △「東北地方は生活・文化を中心に焦点を	グループ グループ グループ 一斉 個人 →ペア →一斉	◇スライド発表が終わり次第、各班の司会者は、東山田中学校の生徒数名に、質疑や感想発表を発表するよう促す。 ◇質問等が出た場合、その内容について分かりやすく伝えることを意識するよう促す。 ●質問された内容に対してどう応えればよいか分からない場合は、教師がキーワードを提示し、簡潔に答えられるよう促す。 ◇事前に考えさせた、想定される質問とその回答を書いたプリントを活用するように促す。 ※キーワードの例…避難訓練、家族との話し合いなど ◇これまでの学習を振り返りながら、今の自分達にできることを考えるよう促す。

	あててきましたが、先人たちがこれまでに築き上げてきた生活・文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく私達に何ができると考えたでしょうか。」 ☐ 自助、共助など ☐ 備蓄食品の確保 ☐ 家族と話し合う ・北上中学校、東山田中学校から数名ずつ意見を発表してもらう。 ▲互いに発表で挙げた内容を、ワークシートに記入する。 ▲挙げた意見をもとに、意見交流を行う。		先人たちが築き上げてきた生活文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく自分達に何ができるか追究し、社会に関わろうとしている。【主】[発表、振り返りシート] ◇互いに挙げた意見について、それぞれどのような場面で行えるかを考えるように促す。 ○学校生活や地域でのどのような場面において生かすことができるかを考えるよう促す。
終結 2分	6 まとめを行う。 ▲Classroomに送付したアンケートに、これまでの振り返りを打ち込んで送る。	個人	

交流授業で使 用した ワークシート

東北地方まとめ

2年 _____ 組 _____ 番 氏名 _____

☆東北地方をふり返り、学んだことを発表し、意見を共有しよう。

Q.東北地方の先人たちがこれまでに築き上げてきた生活・文化や過去の教訓をもとに、未来を生きていく私達ができることは何だろうか？

<自分の考え>

<グループや周りの考え>

<東山田中学校の考え>

学校名	気仙沼市立鹿折中学校
-----	------------

活動のテーマ	聞く・学ぶ・共有する ～未来の命を守る『あの日の鹿折・大島』の伝え手として～
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） ☐ 地域連携 ☐ 避難訓練・避難所運営 ☐ 専門家の活用 ☐ 体験学習 ☐ 学校間・地域間交流 ☐ 教科連携 ☐ 地域発信 ☐ カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全 学年 143 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 19 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（約300）人 ☐ 保護者 ☐ 地域住民 ☐ その他（東北大学，消防署，市危機管理課，自主防等 ） ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 5 月 10 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 22 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 ☐ 地震 ☐ 津波 ☐ 台風 ☐ 洪水 ☐ 河川氾濫 ☐ 土砂 ☐ その他（ 豪雨災害 ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

立地する地域特性から、今後も地震や津波による被害，近年頻発している豪雨による災害が危惧される地域であることから，在学時のみならず，通学時や在宅時における非常災害時における正しい判断や対応ができる力の育成が必須である。また，震災から12年が経過し，震災を知らない世代が就学期を迎え，震災の記憶の風化が進む現状をふまえ，震災伝承と防災・減災への正しい理解と実践力の育成を目指す必要がある。総合的な学習の時間を中心に，防災学習と持続可能な未来の創り手を育む学習を軸に，地域社会や人とのつながりを大切にした体験的・探究的な学習に取り組む。学習を通して，生命の重さや尊さ，生き方について考えさせ，防災・減災への正しい理解と必要な能力や資質の向上を図り，地域のよさや課題を理解し，よりよい未来を創造し，地域に貢献しようとする主体的な態度を育成する。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

I 探究的な学習（震災伝承学習）

1	主な学習内容・活動
(1)	ガイダンス（総合全般〔4月〕，震災伝承学習〔9月〕）
(2)	① 震災・海を知る学習 ・海洋環境保全調査活動〔1年：7月〕 ・リアスアーク美術館研修（震災の記憶展，講話）〔1年：10月〕 ・震災遺構伝承館研修〔2年：3月〕，陸前高田市〔3年：8月〕 ② 避難行動詳細調査〔探究学習〕〔9～12月〕 ・被災者（地域住民）からの聞き取り調査（避難行動，避難所運営，避難所生活，復興への取組） ・課題の提起，探求テーマの設定，避難行動の整理・分析 ・発表・発信方法の検討，活動計画立案，発表に向けた準備 ・証言記録集の作成
(3)	①中間発表（グループ毎の情報交換，修正） ②発表会（参観日）ポスターセッション形式 ③小学校への伝承活動，他校との交流活動，けせんぬま伝承防災文化祭参加（予定） ④証言記録集（一部英語版有り）の作成，HPでの発信



上写真：ガイダンス
右写真：伝承館研修（3年）



左・下写真：聞き取り調査

II 体験的な学習（命を守る学習）

(1)	救急救命講習〔2年：5月〕
(2)	避難所初期設営訓練，地域合同防災訓練【地域（まちづくり協議会，各自治会，自主防災組織）行政，小学校，消防，公民館等】〔全学年：6月，11月〕
(3)	避難訓練（火災，地震，津波）〔全学年：4・6・11・2月〕

下写真：救急救命講習



下写真：避難所設営訓練



3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会や各校の実践例、被災地の生徒の平時の学びが災害時の実践力につながるということから、平時での学びをいかに充実させ、より実践的に、ストーリー性を持たせた内容をプロデュースしていくのか、改めて全体計画を見直した。本校の防災学習は、探究的な学習と体験的な学習の2つの柱から構成されており、内容は上記の表の通りである。中でも、特に変更・改善した点は年に2度行っている地域合同の防災訓練のうち、11月の地域合同防災訓練では、地域の関係団体と協議し、よりリアルな状況を仮定した合同訓練（別紙資料①参照）を行った。

助成金をいただいたことで、防災学習アドバイザーとして東北大学災害科学国際研究所准教授、助教を招聘し、指導、助言をいただきながら学習を継続的に進めることができた。さらに、昨年度からの課題であったルーブリック評価を東北大と連携して作成、導入することができた。また、年度末にはこれまでの生徒の取組、アンケート結果の経年比較、分析結果を詳細に提示していただくことができた。客観的なデータから詳細な分析・考察をふまえた結果から、本校の防災学習による学びの成果や生徒の変容を共有することができたとともに、次年度に向けた新たな課題や方向性と整理することに大いに役立った。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・震災伝承学習を通して、東日本大震災についての知識や震災の事実知り、教訓を語り継ぐことの大切さを理解すると共に、命の大切さや自他を尊重する態度を高めている。
- ・年2回の、地域合同防災訓練において、今年度はよりリアルな状況を想定した訓練を行った。大人の方たちとともに避難所運営の補助を行うとともに、中学生が実際に様々な状況下の避難者役として訓練に参加した。これにより、避難者側の視点に立った運営サイドの課題や問題点を考える契機になり、より現実的な避難所のあり方や、中学生ができることについて、多様な角度から考えた生徒も多く見られた。あげられた感想や課題は、地域の自主防災組織とも共有し、今後のよりよい避難所設営・運営に生かしていきたい。
- ・生徒は学習を通して学んだことを、実生活に生かしたり、自分事としてとらえ、主体的に活動したりする姿が見られた。令和6年1月に発生した能登半島地震に対する支援への自発的な取組からもうかがえた。
- ・地域住民や関係諸機関と連携して学習を進めることで、よりよい生徒の学びや成長を促し、地域社会の一員としての意識や地域の課題に関わろうとする意識を向上させた。
- ・様々な国籍、世代や立場の方々などと交流を図ることで、多様な人と協働しながらよりよい地域を形成しようとする使命感や連帯感が一層高まった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・震災伝承学習では、被災者の証言内容をもとに教訓を考察するだけでなく、自分たちでテーマを掘り下げ、調査・実験・実践や提案を行うなど、さらに一歩進んだ取組が見られた。
- ・探究的な学び（震災伝承学習）に体験的な学び（地域合同防災訓練）の経験を加えて多角的に課題を追求するなど、より深い学びを展開するなど、主体的な取組や姿勢が見られた。
- ・上学年がこれまでの経験を生かし、よきリーダーシップを発揮し、探究内容だけでなく学習姿勢でも手本となり、よき学びのスパイラルが構築されている。
- ・問いを見付け、グループで意見を出し合い話し合いを重ねながら、課題を解決する力が向上した。
- ・防災における知識・技能、情報の分析力、発表、表現力が向上した。特に、今年度の発表会では、タブレットだけでなく、寸劇、紙芝居、クイズなど多様な表現で聴衆者に伝わりやすい表現方法を工夫し、本校防災学習アドバイザーの東北大学佐藤翔輔准教授からも内容、質ともに高い評価をいただいた。



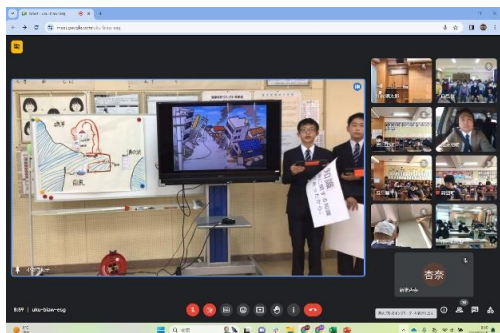
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・ルーブリック評価を導入したことで、教員と生徒が事前に「何が評価されるのか」「達成すべきレベルはどこか」という認識をすり合わせが可能になるとともに、評価規準が明確となり、教員間でも経験年数にかかわらず、共通の視点で授業の指導、評価がしやすくなった。

- ・地域防災の中に学校防災が位置づけられており、関係機関との話し合いが定期的に行われている。防災学習全般を通して関係諸機関からの協力を得て、活動に継続して取り組んでいることから、地域の理解や協力が一層進んでいる。今後も持続可能な地域づくりを目指した、地域防災・減災活動の組織化、連携体制が期待できる。
- ・中学生の活動、活躍は、地域防災力の一助となっており、防災・減災意識の高揚やまちの活性化の一翼となっている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・4年目となる震災伝承学習では、調査対象を「復興・復旧に携わる人たち」にも広げたことにより、避難行動に加え、避難所運営、避難所生活、事業再建、地域復興と多岐にわたるテーマから課題を追求し、様々な角度から震災の実態や教訓を考えることができた。
- ・東北大学と連携してルーブリック評価を作成・活用し、メタ認知力を高めながら主体的な学びを図った。生徒は何のために学ぶのか（目的意識）を明確にし「すべきこと」「したいこと」「できること」を考えさせ自己目標を設定させたことで、生徒は見通しをもって課題解決に取り組んだり、自己の達成度を客観的に振り返ったりすることができるようになった。
- ・学びの成果を防災学習発表会、近隣の小学校へのオンラインによる伝承活動、けせんぬま伝承・防災文化祭で発表した。また、学んだ事実と教訓をもとに証言記録集として、ホームページを通して内外に発信した。
- ・今年度の取組がTV局に取り上げられ、県内外（YouTube含む）に紹介された。



6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・継続的な学習により、災害への知識や関心・態度、災害への対応力は向上している。
- ・批判的に考える力や質問力の向上を目指し、他者との学び合いや交流の場面を意図的に設定した。一程度の成果はみられたものの、まだ十分とは言えず、次年度も継続的な指導が必要である。
- ・個人の取組に差があることは否めないが、学年、学校全体でとらえると、取組への意識や内容、質は大きく向上している。今後は、グループ探究に個人探究の要素を取り入れる等、個の取組へのさらなる充実化や実態、興味・関心に応じた指導・支援の工夫が求められる。
- ・学びに向かう力は、他者との関わり合いや協働によって成長が促されるため、次年度も定期的な自己評価による自己の課題の明確化を図っていく。
- ・活動内容（総合的な学習の時間）が多岐にわたり、十分な探究時間の確保が課題である。全体計画の見直しと内容の精選、また、ルーブリック評価の効果的な活用を図っていききたい。

7) その他

令和2年度から生徒の防災意識の高揚の一環として、鹿折中防災イメージキャラクターを生徒から公募し、防災ポスターや各種資料、お便りなどで掲載・活用している。4代目は初のグループキャラクターが採用された。



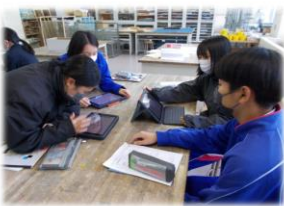
避難所初期設営訓練

(6月, 11月)

地域の方や行政の方々と協働で実施



【震災伝承学習】



整理・分析・考察・発表準備...



発表 (防災学習発表会の様子)

(別紙資料①)

R5 地域合同防災訓練（市総合津波防災訓練） タイムテーブル							
全体の動き （前半）	1 2 : 5 0 生徒各教室で今後の予定について確認 1 3 : 0 0 訓練地震発生（三陸沖を震源とするマグニチュード9、0） 余震の恐れがあるため、生徒及び避難経路の安全を確認後、校庭へ1次避難 1 3 : 0 3 大津波警報発令（最大クラスの津波浸水想定による浸水区域及び浸水深） 1 3 : 1 0 避難所設営訓練開始（校長指示） 避難者が続々と鹿折中体育館へ避難 避難所運営訓練開始（同時進行） * 指示は、本部から出す（共通） * 生徒は、避難所設営を優先。自主防の方が到着したら、設営と一緒にいき、運営（本部）は引き継ぐ。本部から応援要請があった場合には、指示に従い、補助活動に取り組む。				〔自主防の動き〕 1 2 : 5 0 鹿中体育館集合 開会行事（打ち合わせ） * 雨天の場合は、避難者は体育館へすぐに入れる。 * 小学生は避難者役として参加。		
	各班						
	担当（委員会）	本部（執行部）	受付班（学級・防災）	テント班（放送・防災・図書）	掲示・伝達班（広報）	救護班（保健）	支援班（ボランティア）
	生徒人数	8（3）	16（学12、防4）	57（放20、図20、防17）	21	21	20
	委員長名						
執行部担当							
担当教師（生徒掌握）							
委員会打ち合わせ場所							
地域担当							
主な仕事内容 ・準備物	* R3度避難所初期設営マニュアル参照（*特別スペースは、要請があった時のみ設営） * 途中から、自主防スタッフ、避難者の方々と一緒に設営を行います。						
留意点	ステージ上に本部設営。 ・マイク準備 ・アナウンス ・情報の集約 ・全体、各班への指示 ・運営組織への引き継ぎ	・全スペース設営 ・設営しながら、受付運営をすることも想定しておく。 （名簿への記入orカード配布） * 受付方法について、後日、市から連絡予定。	・体育館半分（ステージ側）にテント40張りを設置（後片付け含む） * ギャラリーから全体調整・指示をする人が必要。	・全部準備 * sosシートは、本部からの情報（避難者数、傷病者数など）指示を受けてから、提示。	・全スペース設営。 〔設営後要請：数名〕 ・テントの巡回 ・体調確認	・トイレ・水道点検、ゴミ袋設置のみ行う。 ・備蓄庫の物資準備については、本部（自主防）の指示を聞いてから活動する。	
設営完了後の動き	* 委員長（or責任者）は、設営完了したことを本部に連絡すること。他の委員への指示（待機場所の指示等）忘れずに行う。 ○執行部（8名オレンジビブス着用：本部待機）、アルカス隊員（約14名ピンクビブス、腕章装着：ステージ下待機）は本部・運営補助などの手伝いを行う。 * アルカス隊員は、設営途中に招集がかかることもある。〔担当：〕 ○BFC隊員（32名）は、第2部の準備のため、校庭に移動（防寒着、軍手、バンダナ・パッチ装着）する。〔担当：〕 ○震災伝承学習Eグループ（12名）は避難所運営記録（*小学校への聞き取り含む）をとる。〔担当：〕 ○図書・保健委員生徒（10・5名）は、避難者役（けが人、病人、要介護者、妊婦役等あり）として運営訓練に参加し避難所での滞在、体験記録をとる。 ○上記以外の生徒は体育館後ろのスペースに委員会毎に待機する。* 何も仕事がない時の動きや過ごし方が、大変重要。 ・本部から要請があった時も含め、周囲をよく見て、自主的・自発的に行動する。（要請例：物資配布、発電機準備、側溝掃除、炊き出し準備、等） * さまざまな、事態が想定されるので、臨機応変な対応が求められる。 * 要請があった場合の委員会内での指示系統を全員が理解・確認しておくこと。						
全体の動き（後半）	1 4 : 2 0 訓練終了、後片付け（休憩含む） * 終わっていないところを手伝う 1 4 : 4 0 各班ごとに振り返り（司会進行：まち協所属員，記録：各委員会書記） 1 4 : 5 0 校庭に移動 * 小学生はここで下校 1 5 : 0 0 BFC活動見学（バケツリレー訓練、小型ポンプを使用した実放水訓練） 1 5 : 1 5 閉会行事（校庭、マイク準備） ・感想発表（代表：中学生、新浜2、自主防） ・講評（自治連会長） ・挨拶（自主防会長） 1 5 : 3 0 終了（*訓練終了後、自主防による振り返り 体育館）				* 作業状況により、運営訓練の時間が繰り上がることもある。		
中学生の動き	1 5 : 4 0 教室へ移動・休憩（帰りの準備、振り返りカード記入） 1 5 : 4 5 帰りの会 1 6 : 0 0 下校 1 6 : 1 0 スクールバス発（16：10）						

学校名	埼玉県三郷市立早稲田中学校
活動のテーマ	生徒が主体的に調べ、発信する防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 ☒ 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 ☒ 地域発信 ☒ カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 2 学年 155 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 33 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 40 ）人 ☒ 保護者・ ☒ 地域住民・その他（ ） ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 11 月 16 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 ☒ 地震 ☒ 津波 台風 ☒ 洪水 土砂 その他（ ）
活動報告	
1）活動の目的・ねらい	
・災害発生リスクのある地域に生活していることを生徒一人ひとりが自覚する。	
・災害・防災・減災についての知識を深める。	
・地域住民や保護者にむけて災害・防災・減災について発信することで、地域での防災・減災意識を高める。	
・防災・減災についてのカリキュラムマネジメント。	
・早稲田中の防災・減災教育のプログラムを作成し、年間指導計画に組み込む。	
2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）	
①	河川氾濫を想定した避難訓練の実施。
②	防災・減災の新聞記事を活用したコミュニケーショントレーニングの実施。
③	地震を想定した避難訓練の実施。
④	防災・減災に関する調べ学習（2学年で実施、計7時間）の実施。
⑤	地域や保護者の方々にむけた防災・減災に関するプレゼンテーション発表。
⑥	教職員向けの校内研修の実施。
⑦	三郷市スピーチコンテストにて、防災・減災について今年学習したこと、生徒一人ひとりが地域の防災・減災のために自ら行動できることについて発表する。
⑧	早稲田中の防災・減災教育のプログラムを作成し、令和6年度からの年間指導計画に組み込む。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

- 昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
- ・災害の発生メカニズムから地域復興までをESDの視点から授業実践で生かした。
 - ・地域や保護者へむけての発表を通じて、地域とのつながりを創るとともに、被災リスクのある地域で生活しているという意識を持つことができた。
 - ・教材と指導計画を作成したことで、担当職員が異動しても、毎年防災・減災教育を実践できるようにした。
 - ・助成金で先生方のヘルメットを購入したことで、リアルな避難訓練を行うことができるようになり、避難訓練に対する意識を教員も生徒も高めることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・社会や理科の授業や避難訓練で防災・減災に関する学習はするが、それらの時間以外で防災や減災について考える時間を作ることができた。防災・減災に関して総合的な学習の時間でまとまって時数を確保したことで、社会や理科の授業や防災訓練だけではできない、より実生活に近い実践的な活動を行うことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本校は河川の氾濫による洪水や竜巻などの自然災害が発生する危険性があるが、生徒の災害に対する意識は必ずしも高いとは言えなかった。三郷市の過去の災害を調べる学習活動や、様々な自然災害に関する調べ学習、調べた内容を発表する活動を通して、当事者意識を持たせることができた。さらに、自分の家の中や地域の危険な箇所などを調べ、改善するためにはどうすればいいか、というような主体的に防災・減災に向き合う態度を育成することができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

生徒と同様に教職員も災害に対する意識は必ずしも高いとは言えなかった。しかし、教職員向けの構内研修や学級での防災・減災に関する総合的な学習の時間の指導を通して、教職員も生徒とともに学ぶことができ、当事者意識を持つことができた。さらに、地域と保護者の方々へ向けた発表を行ったことで、学校と家庭、地域で災害に向き合うことができた。今後は校内の避難訓練に地域の方々にも参加をお願いして、防災・減災に学校と地域で取り組んでいきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・改めて自分たちが住んでいる地元を見直したこと。
- ・地元で発生リスクのある災害リストアップさせ、その中から何を調べるのか生徒に自由に選ばせたこと。
- ・現状の課題を生徒に考えさせ、防災・減災への市や県の取り組みを批判的にとらえさせたこと。
- ・当事者意識を持たせるため、実際の避難方法や避難経路、被害を最小限度にするための工夫を考えさせたこと。
- ・教員が毎時間担当する学級を変え、多様な視点から生徒の学習指導を行ったこと。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

課題① 発表のためのスライドの内容や、発表原稿の指導が細かくできなかった点。

改善① スライドの作り方や発表の仕方など、プレゼンテーションに関する指導を行う。

課題② 生徒からの一方的な発表になり、地域や保護者の方々の意見を聞くことができなかった点。

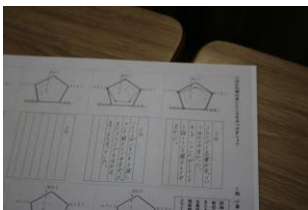
改善② 意見交換の時間を確保し、双方向のやりとりができるようにする。

課題③ 他学年へ波及させることができなかった点。

改善③ 相互的な学習の年間計画に防災教育を位置づけ、3年間の見通しを持った指導が行えるようにする。

次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望 ESD やSDGs などの視点、社会・理科・特別活動などに関連させ、教科横断的な学習を図る。

7) その他（※特にあれば記述）



学校名	石川県 珠洲市立緑丘中学校
-----	---------------

活動のテーマ	防災・減災に向けて～地域のために中学生ができること～
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間、特別活動 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1, 2, 3 学年 147 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 22 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 120 ）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 6 月 5 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 5 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

過疎化・高齢化が進む地域において、頻発する地震に備えるための防災・減災に向けて、中学生が主体的に考えて、地域の課題を発見すること、その課題を解決するための方法考えること、そして、地域の担い手として行動する意識を醸成して実践力を身につけることの3点である。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 「防災に関する講話」を全校で聞き、災害の際には「自分の命は自分で守ること」を学ぶとともに避難先で中学生ができることを実際の取組から学ぶことを通して「防災・減災」学習への意識を高めた。（全学年 6月30日）
- 電気や水道、ガスが止まった災害時にも調理できる「震災時の食事」を調理することや、緊急時に、電気等が使えなくても子どもたちが遊べるようなレクリエーションを生徒主体で考え、実践することで「非常時に備える」意識を高めた。（3学年 8月25日）
- 珠洲市総合防災訓練に地域や保護者とともに中学生が参加して、地域の防災・減災について訓練を行い、「地域の一員として守る立場」で行動できるようにすることを目指した。
- 本校の校舎裏で建設している砂防ダムについて、建設会社の方によるデジタル教材を活用した講義を行った。（1・2学年10月初旬）
- 防災バックを準備するにあたって必要なものを日本で過ごす外国人向けに分かりやすく伝わるよう英語で表現する大切さを学び、本校生徒に啓発した。（3学年 10月～11月）
- 珠洲消防署の方を招いて、救命救急講習を実施した。（全学年 11月9日）
- 「能登半島を震源とする地震について～地震のメカニズムを知ろう～」と題して、金沢大学の平松良浩教授による防災減災学習講演会を行った。様々なデータをもとに、珠洲市の現状について学んだ。地震がどのように起きているのかを具体的に学ぶことで、防災への取り組みへの意識を高めた。（全学年 12月1日）
- 3コースにわかれて、コース別学習を行う。（2学年 10月～2月）

【A コース：防災マップ作り】

- ・珠洲市危機管理室の方より、「防災マップの作り方・役割」などについて講話をいただき、防災マップ作りに生かす。（10月24日）
- ・校区のタウンウォッチングを危機管理室の方と行い、地域の安全や避難経路について現状を把握し、オリジナル防災マップ作りに生かす。（11月10日）
- ・オリジナル防災マップを作成する。（11月～1月）
- ・地域の方にオリジナル防災マップについて助言をいただき、改善を図る。（1月予定）

【B コース：避難所運営】

- ・5月5日震災後、避難所として運営していた公民館を訪問し、当時の様子や教訓等を学ぶ。（10月24日）
- ・段ボールベッドや簡易トイレ設営、テント設営などを行うことで、その作業の重要性や大変さを学ぶとともに、「自分が守られる立場」から「地域の一員として守る立場」への意識の変容を図る。（11月10日）

学校名	島根県出雲市立河南中学校
-----	--------------

活動のテーマ	防災・減災意識を高め、地域に発信できる人になろう ～宮古市立河南中学校との交流を通して～
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 355人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 26 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 5 ）人 【保護者・地域住民・その他（2・3）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023年 4月 8日 ～ 西暦 2023年 12月 22日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

東日本大震災で被災した宮古市立河南中学校との交流をきっかけに始まった防災・減災学習を総合的な学習の時間の柱とし、各学年での最適な学びの方法、体験を模索すると同時に、3年間の見通しを持った系統的なカリキュラムを構築するため。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 前年度の各学年の「防災・減災教育」の実施状況把握。（研究主任）
- 今年度の「防災・減災教育」の実施方法を検討（研究主任提案 → 研究部 → 企画会 → 職員会）
※「防災・減災教育」を総合的な学習の時間の柱にすることを提案。
- 系統的な学びにするための手段として“命を守る防災学習ノート”（㊦）を全生徒、教員が購入。
- ㊦を元に「防災・減災教育」の全体計画を作成。
- 各学年の学びを深めるために防災・減災カードゲーム（㊧）を購入。
- ㊦をもとに各学年で学習を始める。㊧も学習の導入、まとめとして実施。
- 各学年で内容に応じた講演会や体験活動等を実施する。
- 学んだことをもとに一人ひとりが探究課題を決め、調べ学習をする。発表形態は各学年で異なる。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○研修を受けて実践したこと

- 実際に見た被災地の様子、被災者からの体験談、震災遺構を見た感想、中学生による語り部活動などについて職員会で伝達→全校発表。
文化祭で生徒会の生徒が東日本大震災を機に交流を始めた宮古市立河南中学校のことを発表し、2年生が修学旅行で訪れた神戸の「人と未来防災センター」での学びを発表した後に実施。災害を自分事として捉えてほしいという思いで、現地の写真を盛り込みながら伝達を行った。
- 「自助・共助・公助」を学ぶ2年生を対象に「N助」の視点もあることを教えた。
- 階上小・中学校の防災・減災教育と小中連携、多賀城高校の伝災学習の視点を各学年の来年度のカリキュラムに盛り込む。

○変更点・改善点

- 年度当初に立てていたカリキュラムは座学が多かったため、各学年で、学習に応じた体験や講演会、フィールドワークなどを取り入れるようにした。
◇1年…松江気象台 ◇2年…市の防災安全課、消防署 ◇3年…自衛隊、消防署
特に「防災・減災学習」の集大成である3年生では、被災地に赴いた自衛隊員の方からの話に加え、応急処置のやり方や毛布を使って人を運ぶ体験などを行った。また起震車を全員が体験した。
- 「防災・減災学習」で学んだことを復習したうえで避難訓練を実施した。

○昨年度までとの変化

- ・ 3年間の系統性を持たせるうえで、㊦を全教員分購入し、カリキュラムに沿って学習を進められたことは大きかった。
- ・ 減災アクションゲーム、災害対応ゲームなどのカードゲームを実施。それらは生徒が「防災・減災学習」を行う上での取っ掛かりとなったり、まとめの活動として使用できたりしたので、大変有効であった。
- ・ 班の意見を発表したり、各学年での学習の成果を模造紙にまとめたりする際に必要な物を潤沢に準備することができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・ 実際にこのプログラムに参加したことで、「防災・減災教育」への意識が大きく変わった。この教育を一人でも多くの生徒、そして教職員に伝えなければという思いを強くもつことができた。これまでの、ただ知識を教授するだけの教育から、生徒がより「自分事」として考えられるような取組ができなかったかを考えた。そのために専門家を呼んでの講演会、体験活動、地域へ発信していく活動などを取り入れた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・ 系統立てたカリキュラムを組み、様々な角度から「防災・減災」について考えたことで、多くの知識を身につけた。また、その知識をカードゲーム等を通して実際の行動として考えてみたり、避難訓練を通して行動してみたりする中で、災害を「自分事」として考えられるようになった。
- ・ 一人ひとりが、探究課題を見つけ、それについて深く考え、自分にできることを考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

- ・ 年度当初に「防災・減災教育」を総合的な学習の時間の柱にし、各学年でカリキュラムに沿って学習を進めることを伝えたが、今年度からの本格始動だったため、手探り状態だった。しかし、このプログラムに参加後、職員会で伝達したり、文化祭で発表したりしたこと、また減災アクションゲームを職員間で実施したことで、徐々に教員の意識も高まっていったように感じた。
- ・ 「防災・減災教育」での学びや活動を本校のブログで保護者に発信したり、交流を続ける宮古市立河南中学校から送られてくるひまわりの種を地域の公共施設に植えたりする活動を行った。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・ 管理職、学年主任の協力を得る。
- ・ 全学年、学校を挙げて「防災・減災教育」を進めることを謳い、ブログや校報で保護者や地域に発信したことで気象予報士の保護者からの協力があったり、地域の公共施設に依頼しやすかったりした。
- ・ 教科横断的な取組ができた。特に社会(東日本大震災、「自助・共助・公助」)、英語(災害時の外国人支援)、理科(地震・地層)、保健体育(応急処置)、道徳(避難所、ボランティア等)で、関連する題材、テーマを扱った際、より深い学びとなった。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・ 「防災・減災教育」を進める上で、“核”となる教員が必要である。
- ・ 年度途中の研修参加だったため、その学びの全てを今年度還元することはできなかった。講演会や体験活動の効果的な時期、修学旅行での学びにいかにか効果的につなげるか、3年生で、どのように地域に発信していくかなどの計画をしっかりと立てたい。

7) その他(※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。

令和5年度 総合的な学習の時間 実施計画

○進路学習 ◇防災・減災学習 ☆ふるさと学習

	1 年生 (50)	2 年生(70)	3 年生(70)
探究課題	○どんな職業があるのだろう？ ◇防災についての知識を深める（過去の教訓から学ぶ）	○人々が学び、働く理由とは？ ◇災害時に命を守るために必要なこととは（減災について）？	○働く人々の夢や願いとは？ ◇東日本大震災を忘れないために自分たちが地域にできることとは？
学習活動	☆松江自主研修 ○職業調べ ◇自分たちの地域で過去に起きた災害について調べ、災害への意識を高める	☆修学旅行 ◇災害時に命を守るための取組を調べる（減災） ○人々が学び、働く意義について考える	○☆職場体験学習 ◇ひまわりの植栽 東日本大震災について改めて学び、自分、地域の防災意識を高めるために発信する内容を考える
学習内容	☆松江自主研修の計画を立てる ☆現地に行き、職場見学や施設見学、体験を行い、松江の歴史や文化に対する理解を深める → 新聞またはレポートにまとめ ○様々な職業、生き方について調べ、個人でまとめ発表 ◇身近で起きた災害について調べ、日ごろから何ができるか考える。	◇「自助・共助・公助・N 助」の取組を調べる。 ◇修学旅行で「人と防災未来センター」を訪れ、事前学習で調べたことを深める。 →新聞またはレポートにまとめる ☆ふるさと出雲の良さについて調べ、発信する。 （修学旅行） ○上級学校について調べ、個人でまとめ発表	○上級学校説明会、接遇講話などを通して、自分の生き方について考える ○職場体験学習では自己の探究課題を設定し、働くことの意義や大切さを学ぶ ◇東日本大震災について調べる ◇宮古市立河南中学校との交流し、震災を風化させない取組を行う。 →自分たちができることを考え、まとめる、発信する
観点 （要録）	○いろいろな職業の概要を知り、理解することができたか。 ◇過去に起きた災害を知り、日ごろから自分にできることについて、情報を集め、まとめ、発表することができたか。 ○学習に主体的・協動的に取り組む、自分の生き方について考えを持つことができたか	◇防災・減災についての理解を深め、命を守る行動や事故の生き方について積極的に考えることができたか。 ○人々が学び、働く意義について仮説を立てて、情報を収集し、まとめ、発表することができたか	○☆実際に働くことを通して、自らの課題解決において、必要なことを理解し、情報をまとめ発表し、学習や生活の在り方を考えようとしていたか。 ◇防災について深く理解し、震災を風化させないために自らができることについて考え、まとめ、発表することができたか

○進路学習 ◇防災学習 ☆ふるさと学習

1 年(50)	10	15	25
2 年(70)	10	20	40
3 年(70)	50	20	(50)

◇防災教育に関して

・県防災危機管理課または砂防課、市暴威安全課、消防署、自衛隊、気象台等の出前講座利用可。

出雲市立河南中学校 防災・減災教育全体計画

【地域の実態】

- 校庭から徒歩 5 分の場所に高台のある公園があり、地震・津波等の災害時には避難することができる。また、本校体育館は避難場所に指定されている。
- 県中部の飯南町から出雲市までを南北に流れる神戸川が近くを流れており、過去に集中豪雨で堤防が決壊寸前となったことがある。

学校教育目標

**進んで学び 心豊かに たくましく生きる生徒の育成
～地域とともに新しい時代を生きる力を育む～**

防災・減災教育の目的

- (1) 災害から命を守るために必要な能力や資質の向上を図る。
- (2) 地震や津波、土砂災害などの自然災害についての知識を習得し、地域の自然環境や防災・減災についての基礎的・基本的な事項が理解できるようにする。
- (3) 宮古市立河南中学校との交流を通して、震災の恐ろしさ、災害に備えることの大切さを家族、地域、後世に伝えていく素地・発信力を養う。

【生徒の実態】

- 全体的に素直な生徒が多く、授業や与えられた課題に対して真面目に取り組む。
- 学校行事等で、一人ひとりが自分の役割に責任をもち、協力しなら意欲的に取り組む。
- 家庭学習の習慣を基盤とした学力のさらなる定着が望まれる。
- 自らの思いや考えを相手に伝えたり、新たな人間関係を築いたりする力の育成が課題。

推進の視点

防災体制の整備・充実	防災教育の推進	指導力・実践力の向上
・ 防災教育担当者を中心に、教職員の役割の明確化と家庭及び関係機関との連携 ・ 日常的な危機管理意識の向上と日常の安全管理と避難経路の点検	・ 教育活動全体を通した防災・減災教育の推進 ・ 効果的な防災訓練の実施と改善 ・ 総合的な学習の時間における防災学習の充実と地域との連携	・ 教職員の防災に関する知識や技術向上 ・ 防災カリキュラムの工夫・改善 ・ 地域とともに防災について考える場の確保と実際の演習

各学年の目標

1 年	2 年	3 年
・ 自然災害発生のメカニズムや様々な災害についての学びを深め、現象と被害の大きさなどについて調べ、発表する。 ・ 宮古市立河南中学校との交流の経緯について知り、かけがえのない命を与えられていることに喜びと感謝の気持ちをもち、人としてどう生きていくかを考える。	・ 河南中学校の立地状況を知るとともに、過去に地域で起きた災害を学び、災害の備えについて考え、防災・減災意識の向上を図る。 ・ 「自助・共助・公助・N 助」を考える。災害発生時、発生後の自らの命を守るための行動を考える。また周囲の人と協働して行う防災活動について考える。 ・ 修学旅行で「人と防災未来センター」を訪れ、事前学習で学んだことと実際に起きた災害の状況とを照らし合わせ、防災・減災意識を高める。	・ 宮古市立河南中学校との交流を通して、東日本大震災を自分事としてとらえ、巨大地震等災害発生時における学校が果たす役割や自分たちができる行動について考える。 ・ 被災地の「防災・減災」への姿勢、取組から学ぶ。自分たちの町に災害や被害が及ぶことを想定し、安全で快適な町づくりをするために自分ができること、必要な環境整備について関心をもち、学習したことを家族や地域に発信する。

各教科・領域との関連

【各教科】	【道徳】	【特別活動】	【総合的な学習の時間】
・ 科学的思考力、判断力の育成 ・ 災害のメカニズム、地域の特性、防災体制等の知識、理解 ・ 防災意識の高揚 ・ 応急処置の体得	・ 生命の尊重、共生等人権尊重の精神を育成 ・ ボランティア精神及び優しさや思いやりの心の育成 ・ 感謝の心の育成 ・ 仲間づくり	・ 日常的な備え、災害時の安全確保、的確な判断や行動等実践的能力の育成 ・ 互いに協力し合い、自ら困難を克服する態度や実践的能力の育成 ・ 避難訓練の実施 ・ 自主性やボランティア精神の育成	・ 防災・減災意識の向上 ・ 地域の災害について学び、今後の防災体制について考える態度の育成 ・ 宮古市立河南中学校との交流を通して、震災について学び、風化させない態度の育成 ・ 防災・減災学習、宮古市立河南中学校との交流を地域に発信

【地域との連携】

- ・ しまね花の郷 交流を続ける宮古市立河南中学校から送られてきたひまわりの種の植栽
- ・ 神西・神門コミュニティーセンター 学習したことを地域に発信するための拠点
- ・ 島根県防災危機管理課・砂防課 防災に関する情報提供などを行う出前講座の利用

○1 年生

松江気象台の方の講演会

①



様々な災害について調べ、グループ毎に発表している様子 (②③)

②



③



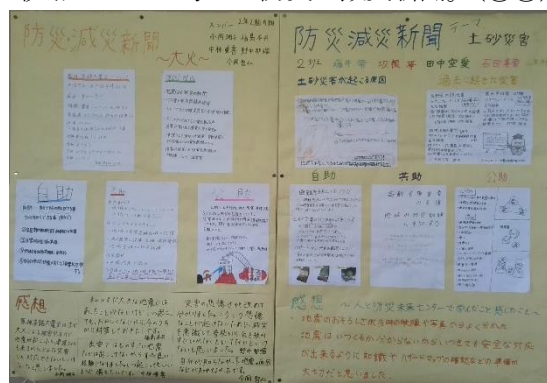
○2 年生

「地震+〇〇」について起こりうる災害、「自助・共助・公助・N助」の視点について考えた防災・減災新聞。(①②)

①



②



○3 年生

消防署の起震車体験 (①②)

①



②



全学年で取り組んだ減災アクションゲーム (③)

③



自衛隊員から毛布を使った担架の説明を受ける様子 (④)

④

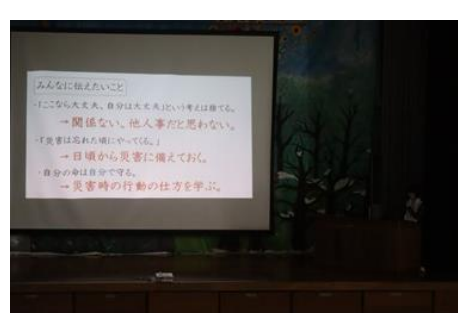


⑤



本研修について文化祭で発表 (⑤⑥)

⑥



学校名	松山市立旭中学校
-----	----------

活動のテーマ	地域での逃げ遅れ0を目指して、私たちができること
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 ☐ 避難訓練・避難所運営 ☐ 専門家の活用 ☐ 体験学習 ☐ 学校間・地域間交流 ☐ 教科連携 ☐ 地域発信 ☐ カリキュラム開発 ☐
活動に参加した児童生徒数	（ 1 学年 6 4 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 5 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 4 0 ）人 ☐ 【保護者】・ ☐ 地域住民・その他（ ☐ ） ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 10 月 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 25 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 ☐ 地震 ☐ 津波 ☐ 台風 ☐ 洪水 ☐ 河川氾濫 ☐ 土砂 その他（ ☐ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

目的

- ① 災害が起こったときに、生徒自身が自分の命や周りの人の命を守るように備えや行動できる。
② 災害が起こったときに、逃げ遅れ0の旭地区にする。

ねらい

- ① 災害に対して、様々な状況を予測し、それに対する対策を考える過程で、生徒が多角的多面的な考え方ができるようになる。
② 自分の命や周りの人の命を守るためという活動する中で、生徒の責任感を育む。
③ 周囲と協力して目標達成に向けて取り組む活動を通して、コミュニケーション力や協力して物事に取り組む態度を育てる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- 10 月 地域の災害危険箇所に行き、実際の様子を知る。
11 月 地域の自主防災訓練に参加
中学生だけで、避難所設営を体験
12 月 マイタイムラインを自分たちで作ってみる
1 月 マイタイムライン講座（対学年生徒）の運営方法を自分たちで企画、練習する。
各自が家庭でマイタイムラインを共有する
2 月 学年の他のグループの生徒にマイタイムラインのつくり方を教える
公民館でのマイタイムライン講座の運営方法を自分たちで練習する。
家族に学んだことなどを手紙にして伝える
3 月 半年間の活動を保護者に発表する。

3) 9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと

松山市防災アプリのマイタイムラインの普及を通して、地域の住民の逃げ遅れ0を目指していこうという活動を計画していた。しかし、気仙沼の中学生が避難所運営をしていることを知り、中学生でもそのようなことができるのかという衝撃を受けた。その内容を持ち帰って、冷静に分析するととても理にかなったことだということが分かり、生徒による避難所運営もできるようにすることを活動に加えた。

助成金の活用で可能になったこと

山間部で公共の交通機関もバスの廃線の影響でとても不便になっている。中学生が地域に出て行って活動するには、タクシー等の移動手段が必要になってくるが、本市の総合的な学習の時間の予算では、交通費を出せないことになっており、助成金により、生徒の活動範囲が広がった。

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の観点から

本校の防災教育は、年間3回の避難訓練と昨年度から始まったマイタイムラインの作成を1年生が行う程度で、その他の活動は行われていなかった。それに加え、地域の防災訓練等は中心で活動されている方は本当に熱心に活動されているが、コロナ禍の影響もあり、多くの住民は積極的な活動が見られない状況である。本活動を通して、そのような課題が浮き彫りになってきた。以下にも記述するが、中学生は地域を良くしていきたいという熱量が大きくなっている。中学生の活動をきっかけに、地域の防災・減災に対する活動の活性化を進めていく流れができつつある。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

様々な角度から物事を考えられるようになった。例えば避難所に関することでは、備蓄品の不足や備蓄食料に関してアレルギー対応にどうすべきか、ペットの避難、冬季の寒さ対策や夏季の熱中症対策、車いすの避難者の対応など、様々な課題を考えることができた。

また、活動により積極的に、より真剣に取り組むようになった。いつ起こるかわからない災害に対して、今できる最大限の準備をしようとする姿が見られるようになってきた。本校は未災地域である。まだまだ、大丈夫だろうというバイアスが働いていた生徒が自分事として考え、真剣に真摯に防災・減災の活動に取り組んでおり、少しでも被害を少なくしていこうとする心情が育ち、それが行動にも表れている。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の観点から

防災・減災に関しては、地域のごく一部の人たちが訓練しているものであった。中心となって活動している人たちも、今のままではいけないことに気付いていながら、現状を打開できていない状況であった。それが、中学生が地域に出て行って活動することで、変化の兆しが見え始めた状態である。また、生徒が学んだことを保護者に伝えることで、以前より災害に備えるようになった家庭も増えてきている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒たちに現地に出向き自分の目で確認し、実際に身体を動かかして自ら体験し、直接他の人と会い自分たちの学んだことや防災に関する情報を伝えるなど、実際の活動をメインに行い、その活動によって地域が少しでもより良くなるようにしようと取り組んだ。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

地域へのマイタイムラインの普及活動は、諸事情により実施できなかった。しかし、普及活動のための準備や練習を行い、自分たちの力で地域を良くしていこうとする姿勢が見られた。次年度は、まず今年度できなかったマイタイムラインの普及活動を行いたい。また、避難所運営は、まだまだ力不足なので、避難所運営訓練や避難所キャンプなどを行いながら、運営のスキルを上げるとともに、ハード面の拡充を高校生と協力して行っていきたい。

7) その他(活動風景)

10月 地域の災害危険箇所調査



11月 地域の自主防災訓練



11月 避難所設営体験



12月 マイタイムライン作成



3月 活動報告会



県と市のマイタイムライン



学校名	延岡市立 延岡中学校
-----	------------

活動のテーマ	持続可能な地域社会の担い手として、防災・減災について真剣に探究する生徒の育成 ～コミュニティ・スクールの機能を生かした取組をととして～
主な教科領域等	教科領域（各学年の総合的な学習の時間、学級活動、特別活動〔生徒会活動〕）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1,2,3 学年 283 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 25 ） 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 250 ） 人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

ねらい①：講話をととして、災害を生き抜くために必要な知識と技能の習得を図る。

ねらい②：地域の方々と一緒に防災マップをつくったり、地域避難所を巡るバスツアーを実施したりして、地域の方々と交流を深め、災害発生時には協働できる関係を構築する。

ねらい③：防災マップを地域の公民館等に掲示したり、身に付けた知識・技能を生徒会地域防災 BOOK として、地域回覧板で回覧したり、学習発表会で研究発表したりする活動をととして、地域の防災・減災活動に参画・貢献しようとする意欲を高める。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【総合的な学習の時間】

（1年）「災害について、地域の課題を調査しよう」

- 防災・減災講話（講師：延岡市危機管理課）
- 地域の方から防災に関する課題収集（講師：延岡中学校運営協議会委員）
- 聞いた課題を調査し、課題解決策を発表（文化発表会で地域・保護者に発表）

（2年）「地域の方々と防災マップをつくろう」

- 防災・減災講話（講師：延岡市危機管理課）
- フィールドワーク（2年生全員が自分の住んでいる地域を地域の方々と歩いて調査）
- 延岡中学校作成「地域防災マップ」を公民館に届ける

（3年）「避難所運営について調べて見よう」

- 防災・減災講話（講師：延岡市危機管理課）
- 避難所運営について学級討議

【生徒会活動】

- 避難所を巡るミステリーバスツアー〔生徒会企画・運営〕（地域の方々と生徒で津波避難施設をバスで巡る）
- 延岡中生徒会「地域防災 BOOK」発行
- 本校校舎を避難所とする地区避難訓練に安全見守り等ボランティアとして参加

【学校行事】

- 考えさせる避難訓練の実施（生徒も教職員も）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- 防災講話だけでなく、考えさせる体験活動を計画的に実施（これまでは講話のみで終わっていた）
- アウトプット〔発表会の実施、通信の発行、安全マップ配付等〕を考えた取組に変化
- 避難訓練の工夫（生徒も職員も自分ごととして考えさせる避難訓練を実施）

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

すべての活動において、地域と連携した取組を意識した。防災・減災活動において、主体的に行動し、地域の担い手となる意識を高めるきっかけづくりとなった。また、コミュニティ・スクールとして、地域の防災意識の不足という課題解決につながりつつある。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- a アウトプット(調べたことを伝える活動)を各学年のゴールにすることで、意欲的な活動が見られた。また、知識・技能として、生徒自身に身に付けさせることにつながっている。
- b 活動のゴールを事前に示すことで、主体的な工夫された取組につながっている。
- c 避難訓練の工夫で、生徒のみならず職員も危機意識を高めることにつながっている。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

各活動を学校のHPで紹介したり、マスコミ(テレビ・新聞)等で紹介されたりすることで、教師自身のモチベーションを高め、保護者や地域の防災・減災への感心を高めることにつながりつつある。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- 教育課程内(総合的な学習の時間・学校行事)と教育課程外(生徒会活動等)で取り組んだ点
- 地域と連携した活動を多く取り入れた点(校務分掌に地域連携部を新設し地域との連絡調整を実施)
- アウトプットを意識した活動にした点
- 行政等(延岡市危機管理課・消防署・消防団)と連携した点
- 各取組を積極的に保護者・地域に広報した点
- アクサ減災教育プログラムと延岡市教育委員会事業(学校のドリームプランサポート事業)の予算を有効に活用した点

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- 単年度で終わらずに、継続的な取組にしていくこと
- 防災・減災教育と各教科との関連を整理すること
- 防災・減災活動を自分ごととして考え、生徒に内発的動機付けすること

7) その他(※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。

【総合的な学習の時間】

(1年: 地域の方から地域防災の課題を聞き取る活動)



(1年: 地域防災課題等について調べたことを地域の方々、保護者、生徒に発表[文化発表会])



(2年: フィールドワーク[地域の方々と一緒に安全マップづくり])



【生徒会活動】

(地域の避難所を巡るバスツアーを生徒会で企画・運営、バスの中では防災クイズを地域の方々と考える)



(地域の避難訓練にボランティアを募って参加・協力 [避難誘導・運営・安全管理等])



(防災・減災に向けての取組を市内中学校の生徒会に報告 [延岡市中学校生徒会サミット])



(学校運営協議会で防災・減災について調査してきた内容を報告) ※テレビ・新聞社の取材



(延岡中学校生徒がつくる「地域安全マップ」編集作業「完成したマップは、地域の公民館に寄贈」)



学校名	静岡市立大河内小中学校
-----	-------------

活動のテーマ	もしもの時に自ら判断し、行動するための防災学習
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 教科連携 地域発信 カリキュラム開発 学校間・地域間交流
活動に参加した児童生徒数	（ 中1～中3 学年 5 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 7 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 4 ）人 【保護者・地域住民・その他（静岡市地域総務課職員、静岡県中部基地域局危機管理課職員）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校の学区は土砂災害の危険性が高く、この2年間に二度の土砂災害に見舞われ、一時的に孤立してしまった。また、高齢化の進んだ過疎地域であることから、特に中学生は万が一の時の戦力として地域からも期待されている。本校の学校教育目標である「自ら判断し、行動できる子ども」にあるように、被災した時に指示を待ち、動くのではなく自ら判断し、行動できるだけの知識や経験を積むことが今回の活動のねらいである。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

4月 第1回避難訓練

6月 ふじのくにジュニア防災士養成講座①

8月 静岡市役所地域総務課の講話 ふじのくにジュニア防災士養成講座② HUG（避難所運営ゲーム）

9月 第2回避難訓練 地域訪問活動

10月 大河内文化発表会での発表

11月 オクシズマルシェ（地域主催の行事）参加（防災食とレシピ配布）

12月 静岡県下一斉防災訓練参加

1月 第3回避難訓練

2月 ハザードマップを地域に配布

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○9月の研修会から実践に生かしたこと・変更・改善点

9月の研修会を受け、共に考え伝え合うことの重要性を再認識し、1月の第3回避難訓練をそれまで行っていた通常の「地震と土砂災害」の避難訓練から、「予告なし」の避難訓練に一部変更して行うこととした。本校では予告なしの避難訓練を行ったことがないので、訓練終了後の防災学習の場面では、個々人の避難の仕方や行動を振り返り、どうすればよかったか考え、アドバイスをを行うこととした。

また、生徒が作るハザードマップ上に危険箇所ばかりではなく、災害時に役に立つポイントや設備、避難時の注意などを追加し、見た人の命を守ることにつながるような情報を載せるようにした。

○昨年までの実践と今年度の実践で変わったこと

昨年までの実践は、基本的に避難訓練とそのあとに防災学習を行う程度であった。昨年は校内の防災備品や備蓄を探したり、地域の避難所や避難場所の確認をしたりしていた。しかし、あくまでも自助の範囲の学習であった。それを今年度は自分だけでなく、学校の仲間や家族、地域の人を助ける共助の視点を意識するようにした。

○助成金の活用で可能になったこと

今回の学習の中心の活動となるハザードマップ作りを行うときの諸費用として使用した。本校は山間地にあり、学区が広く、移動手段が限られているため、学区を実際に見て危険個所を探す活動を行うにあたってタクシーの使用が必要であった。そのための交通費として使用した。そして、作成したハザードマップを地域の方に配るための印刷代としても活用した。

さらに、生徒の家庭では食料備蓄の意識が少なく、防災用の食料を備蓄していない家庭が多かった。そこで、10月の文化発表会や11月に行われた地域主催の行事にて、生徒の考えたアルファ米のアレンジレシピを試食として配布し、食料備蓄の呼びかけを行った。その材料代や配布用の器の購入費用としても助成金を活用した。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

学校と家庭だけで完結させないように静岡市役所地域総務課や静岡県中部地域局、地域の自治会など様々な組織や専門家と連携を取りながら学習を進めることができた。また、実践を行ったことだけで満足せず、関わってくれた専門家の方や地域に発信し、評価をもらうことで学校と地域との連携を生徒たちにも意識させることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

12月に行われた県下一斉防災訓練に中学生の参加率が100%になった。昨年度まではコロナ禍の中、しばらく実施できていなかったのが昨年度との比較は難しいが、指定学区の変更で本校に通っている生徒も自分の居住地ではなく、学区の防災訓練に参加し、地域の方と交流をしながら防災活動について学ぶ姿が見られた。自分の居住地域ではなく学区の防災訓練に参加したことは、今年の活動の中で地域を守る、地域に貢献することを意識してきた効果だったのではないかと感じた。

また、1月に行った避難訓練では初めての予告なしの訓練ということで、うまくいかないこともあったが、中学生が中心となり、どのような行動をすることでもっと安全に避難できたのかを議論し、改善点をあげることができた。昨年までの避難訓練はあくまでも教師側の指示で避難していたものを自分たちの判断で行動し、改善しようという姿が見られた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

保護者や地域の方には、中学生の防災への意識の高まりを感じていただけたように感じる。また、中学生の作るハザードマップへの期待値が非常に高く、配布することを楽しみにしてくださっているようだった。高齢化が進んでいる地域なので「もしもの時に中学生に期待することが多い」と言われている地域ではあるが、中学生の実情を伝えられてはなかった。今回の活動を通して、どのくらいの知識を持っていて、どんなことを考えているのかを地域に伝えることができた。今後は児童・生徒だけで行ったHUGを地域の大人と一緒にいき、いずれ地域と学校が一緒に避難所設置訓練を行うことにつながる第一歩になったように感じる。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

教員側の用意するカリキュラムをこなしていくのではなく、生徒が自分たちでできることから始めるという視点を持って教員側の準備や打ち合わせを行った。学校司書や図書担当の教員の協力のもと、防災関係のコーナーを作ってもらい、関係書籍が目につきやすいようにした。その本の中から見つけた料理を参考にアレンジレシピを考えたり、水の重要性に気づき、ろ過装置や水が少なくても調理できる料理の提案をしたりすることにつながった。

生徒たちが手に入れた知識や情報を地域に還元することを意識して実践を行った。例えば、災害時であっても簡単にできる調理方法の提案の場面では耐熱式のビニール袋を使った調理法を知識として身につけた。その知識から地域への提案として、非常用持ち出し袋の中に耐熱式のビニール袋を加えることを提案事項としてあげていた。地域総務課などの防災の専門家からの危険箇所の情報などをハザードマップの形にして地域に伝えることも行った。地域に貢献することを目指した今回の実践において、特筆すべき点であると思う。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

地域への『貢献を意識して活動する中で、地域への発信はある程度できた。しかし、地域と共同する場面はほとんどなかった。来年度以降の課題として、地域と共同することを意識したい。特に、避難所設置訓練のように実際の災害の場面で必要となる活動に向けた取り組みは積極的に行っていく必要があると感じた。また、令和6年能登半島地震を受けて、孤立した環境下での避難生活をもう一度確認し、自分や学校、そして地域に何が必要なのかを再考することが必要であると思う。現在の防災学習に東日本大震災から学んだことが多く生かされているように、今後の防災学習には令和6年能登

半島地震から学ぶことを生かしていく必要があると強く感じる。今年の防災学習は、生徒も教員もある一定の成果や手応えを感じることはできた。しかし、そこで満足せず、「現状維持は衰退の始まり」という気仙沼の中学生の言葉を忘れず、更なる進化をさせていく必要があると考える。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



地域訪問活動

静岡市役所地域総務課の方と生徒が家族や地域の方から聞いた危険箇所や以前に災害があった場所を中心にハザードマップアプリと見比べながら確認を行った。見晴らしの良い場所から砂防堰堤を確認し、集落が砂防堰堤によって守られていることを視覚的に確認することができた。



DIG（災害時図上訓練）

地域訪問活動で見てきた危険箇所などの情報を地図上に落とし込む活動を行った。この地図をもとにハザードマップ作成を行った。



防災食アレンジレシピづくり

ローリングストックの意識を高めるために備蓄されているアルファ米をおいしく食べる方法を探ることを目的として行った。野菜ピラフのアルファ米にトマトジュースを混ぜることで、チキンライス風にアレンジした。



文化発表会での展示

DIG で作った地図を展示し、危険箇所を来校した保護者の方を中心に見ていただいた。活動に協力していただいた静岡市役所地域総務課の方にも来ていただき、発表やここまでの活動の評価をもらった。右の写真は「自分たちで作ることのできる防災グッズ」というテーマで作ったソーラークッカーと簡易ろ過器。タイムラプスの動画を使い、水の温まる様子やろ過によって泥水がきれいになる様子を撮影し、効果を確認できるようにした。



オクシズマルシェでの啓発活動

地域の行事に参加し、自分たちの考えたアレンジレシピとその試食を配布し、地域の方や来場した方にローリングストックや食料の備蓄について呼びかけを行った。用意した試食やレシピはすべて受け取ってもらうことができた。

学校名	福山市立鞆の浦学園
-----	-----------

活動のテーマ	避難所生活の体験により自助・共助への意識を高め、力を養う。
主な教科領域等	教科領域（ 鞆学, 国語科, 理科, 社会科 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 4 学年 25 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 7 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 535 ）人 【 ☐ 保護者・ ☐ 地域住民・ ☐ その他（ 観光客 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 12 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ 高潮, 火災 ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

防災に関する探究学習を通して、鞆地区を災害に強い町にするために、災害に関する知識を身につけるとともに、防災バッグの作成や避難所生活の体験の中で自助・共助の意識を高めることを目指す。さらに、地域が一体となって災害に備えられるように学びを地域住民へ広めていく。また、このような学習や活動を通して、適切に情報を収集する力や相手や目的に合わせて情報を活用して表現する力を身に付け、ふるさと鞆、福山に対する郷土愛を深めていくことを目指す。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 4 月・・・主な災害について調べ、課題を見出した。
- 5～6 月・・・実際に鞆地区で起こった災害や起こる可能性の高い災害、鞆地区に建てられている対策施設を調べた。土砂災害の VR 体験や、大学教授の出前授業も利用した。
- 7 月・・・これまでに調べたことを新聞にまとめ、校内・地域に発表した。
- 8 月・・・防災バッグで必要なものを各家庭で考えて用意した。
- 9 月・・・防災バッグを持ち寄り、様々な場面を想定して中身を検討し、各家庭の状況に応じて改善した。鞆地区で建設中のトンネル工事を見学し、災害との関連を調べた。
- 1 0 月・・・災害が起こった時の避難所の運営について調べ、避難所の設営準備や受付名簿の作成を行った。
- 1 1 月・・・全校での避難訓練項目に、避難所への避難も追加し、実際に児童が設営した避難所へ全校児童生徒が避難した。実施後、ふり返りと改善を行った上で、1 日避難所生活を体験した。保護者も参加し、豚汁の炊き出しを行った。さらに、避難所の運営や防災バッグの中身を再度検討した。
- 1 2 月・・・校内・地域に発表するために、グループごとに学んだことをスライドにまとめた。
- 1 月・・・スライドを用いて、他県の防災・減災に取り組む学校と交流を行った。
- 2 月・・・児童生徒主催の「こども商店街」に防災コーナーを設けた。新聞の掲示、クイズや土砂災害の仕組みの実験、段ボールベッドの体験などを行った。また、大学教授の助言を受け、改善を行った。
- 3 月・・・地域のふれあい祭りに防災新聞を掲示した。また、防災について調べるために防災ウィークを設け、改善したクイズや実験セットを使って防災について楽しく学べる BOSAI フェスティバルを行った。1 年間のふり返りをした上で、最後に BOSAI パーティーを行って非常食の試食を行った。

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会での学びを生かし、減災の取組が学校全体のものとなるように、活動に他の児童生徒、教員にも参加してもらうよう変更した。その結果、教員も児童生徒も災害を身近に起こりうるものとして捉え、自分や全体の動きをふり返ることができた。減災についての実践は、昨年度までは非常用持ち出し袋の作成のみであったが、今年度は助成金も活用し、段ボールベッドを購入し、実際に組み立てて使用した。炊き出し体験などの実践も行うことができた。また、こども商店街での防災コーナーの設置により、地域全体へ防災について働きかけることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

児童が災害や防災・減災について自分事として考え、普段の生活や災害時に自分にできることについて考えることができた。本物の段ボールベッドを用いた体験を通して、非常用持ち出し袋や自分たちの計画について何度も検討し直すことで、防災・減災への意識を高めることができた。また、学校全体の取組として避難所（体育館）への避難を訓練に取り入れたこと、4 学年主催の BOSAI フェスティバルを開いたことで、防災・減災の学習をした4 学年だけでなく、全ての児童生徒・教員へ向けた減災教育ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

初めはあまり身近なものと思っていなかった災害について、自分の住む町でも起きる可能性があることを知り、国や自治体の行っている対策を学ぶ中で、「自分にもできることをしたい」という思いをもつことができた。また、一時避難や避難所の生活について学び、実際に体験することで、災害時の行動や避難所の運営について適切な情報を収集し、実践・改善するなどの課題発見・解決的な学びを得た。特に、「命も心も守る」という課題のもと、避難所の区分けや整備、受付について調べ、準備して実践する活動では、全校での避難訓練を通して実際に体験するまで分らなかった課題が見つかり、改善して再実践するなど、探究的に学ぶことができた。また、「学校や地域の人の命や心を守りたい」という思いをもとに、保護者や地域の人、観光客とも交流を行うことで、相手や目的に合わせて情報を活用して表現する力が身につき、さらに、ふるさと納税、福山に対する郷土愛が深まったと言える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教員に対しては、全校での避難訓練が、体育館が避難所になった場合の様子や動きなどについて考える機会になり、児童生徒の避難経路や教員の動きについて考え直す機会となった。後日、災害時の動きについて具体的な相談をしたいと申し出た教員も数名おり、防災・減災に対する意識が高まったと言える。また、保護者も避難の仕方や避難所の生活など、災害時の行動について家族で話し合う機会ができ、児童だけでなく家族で非常用持ち出し袋を準備した家庭もあった。地域に対しても、町でなされている防災・減災の取組や、危険な場所について、児童の作成した壁新聞をもとに知らせたり、災害や避難所生活について体験的に知らせることができ、好評であった。地域が一体となって災害に備えるための一助となった。さらに、横浜国立大学の防災を専門とする教授や防災支援団体に所属する大学生にも支援や助言をいただき、一緒に活動する中で、大人だけでなく子どもにもできることが多くあることについて可能性を感じたと評価を得た。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

この活動では、自分たちで避難所を運営するという体験を通して、課題発見・解決的な探究学習を進めるとともに、防災・減災に対する意識を高めた。段ボールベッドの組み立てや炊き出しなどを体験して終わりではなく、全校での避難訓練で実際に避難を行い、避難所の設営や受付などの避難所生活において必要不可欠な仕事を自分たちで担うことで、自分の役割や、有事の際の行動について深く考えることができた。また、これらを通して得た学びを主体的に学校や地域へ発信していくことにより、防災への理解が深まるとともに、広めていくことができたと考える。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

より本物に近い体験をすることで、児童生徒や教員は防災・災害に対する意識が高まり、学校全体や地域で防災・減災に取り組んでいくことができた。一方、実際に災害が起こった際には一つの学年の児童のみで運営をすることはないため、今後の取組として、全校児童生徒での役割分担や地域の自主防災組織との連携が必要であると考えられる。また、地域での一斉防災訓練を利用して、本学園の取組を知らせたり、地域住民との連携した避難訓練を行ったりすることが効果的であると考えられる。今後も、継続して学園全体・地域全体で防災・減災教育に取り組んでいきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



学校名	東京都立大島高等学校
-----	------------

活動のテーマ	島嶼地区の防災・減災リーダーの育成 ～火山噴火から安全に避難するために～
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 114人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 16 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 20 ）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ 竜巻、火山噴火 ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

- ・生徒の防災リーダーを育成する。
- ・火山島である伊豆大島の地形を理解し、火山噴火から安全に避難できるようにする。
- ・伊豆大島の災害リスク（地震・津波、土砂災害、竜巻、火山噴火）の発生原理、過去の被害状況、対策を学ぶ。
- ・水難事故の未然防止と救助の技能向上に取り組む。
- ・関係機関（町役場、消防本部、消防団、教育委員会、専門家、地域住民）との持続的な繋がりを形成する。
- ・島嶼の学校と交流を深める。
- ・災害時に避難所の役割を果たせるようにする。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

各月に、防災委員会を開催した。また、防災活動支援隊15名を5チーム(救命、地震、火山、竜巻、避難所)に分け、各チームが主体となって、避難訓練や防災教室、講演会を企画運営した。

●スケジュール

- 4月
防災委員会①（防災活動支援隊発足）
- 5月
防災委員会②（避難所スタッフジャンパー製作）、避難訓練（火災）、消火・搬送訓練
- 6月
防災委員会③（チーム分け、上級救命講習事前学習）、ウォーターセーフティ教室
- 7月
防災委員会④（学校祭ポスター発表準備）、上級救命講習、赤十字による防災教室
- 8月
防災士資格取得講座参加、HUG(避難所運営ゲーム)講習受講、ライフセービング活動
- 9月
防災委員会⑤（都立神津高校との合同防災訓練）、避難訓練（地震）、
- 10月
防災委員会⑥（HUG(避難所運営ゲーム)、避難訓練発表準備(火山噴火))
- 11月
防災委員会⑦（学校祭ポスター発表）、避難訓練（火山噴火）、災害救助講演会（自衛隊）
- 12月
防災委員会⑧（避難所設営訓練、HUG）、講演会（災害ボランティア、防災対策室）
- 1～3月
防災委員会⑨（まとめ）、火山学習フィールドワーク、避難所設営マニュアル完成

●実践内容

<火山噴火からの避難方法について>

- ・専門家の講演会を企画し、火山噴火の原理、伊豆大島の地形、避難方法について学習
- ・火山噴火の避難方法について、生徒が町の公式情報をスライドにまとめ発表
- ・火山噴火避難時の装備（ヘルメット・ゴーグル・マスク）の着用について説明
- ・火山噴火跡フィールドワークに参加し、学んだことを発表

<避難訓練>

- ・生徒主体での避難訓練の企画、運営
- ・火災、地震、火山噴火、竜巻の避難訓練を関係機関（役場、消防、消防団、専門家）の監修を受けて実施
- ・生徒が専門家の監修のもと、安全な避難方法をスライド資料にまとめて全校で発表

<避難所開設>

- ・避難所運営ジャンパー作成
- ・赤十字と連携した防災教室受講（避難所生活・応急手当）
- ・町役場と連携して HUG（避難所運営ゲーム）を実施
- ・町役場と連携した避難所設営訓練の実施
- ・10 年前に土砂災害を経験した卒業生と当時在籍していた教員による講演会を開催「災害時に島校生にできること」
- ・避難所開設マニュアルの改訂

<救命活動>

- ・上級救命講習を開催し、参加生徒 114 名が資格取得
- ・ウォーターセーフティ教室を開催し、参加生徒 6 名がライフセービングの資格取得
- ・地域のライフセービング団体の活動に参加

<島嶼連携>

- ・神津高校との合同防災研修を実施
- ・学んだ成果をまとめ、校内外で発表（校内掲示板、公式 HP、SNS）

<その他>

- ・生徒 3 名が防災士の資格を取得
- ・1986 年火山地形フィールドワークに参加
- ・学校祭で各チームによるポスター発表（救命・地震・火山・竜巻・避難所）

3) 9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

●9 月研修会で学んだこと

<生徒の防災リーダーの育成>

- ・中学生の語り部の活躍
- ・小学校への出前授業

<災害を風化させないこと>

- ・語り部のお話の伝承
- ・資料館による災害時の様子の保存

<たてのつながりとよこの繋がり>

- ・たて（学年間）
- ・よこ（学校、地域、関係機関）

●研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

- ・防災士 3 名を中心とした防災活動支援隊による防災行事の企画・運営
- ・10 年前に災害を経験した卒業生と当時在籍していた教員による講演会を開催
- ・関係機関（町役場、消防本部、消防団、教育委員会、専門家、地域住民）と連携した防災行事の実施

●昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

<神津高校との合同防災研修の実施>

大島高校の生徒会と防災活動支援隊の生徒が神津島を訪れ、神津高校の生徒と合同防災研修を実施した。生徒同士の交流を深めるとともに、島嶼地区の防災課題を共有し、解決に向けて行動する意欲が高まった。また、この関わりは緊急時の助け合いにも繋がることが期待できる。

<若手教員の防災研修>

採用 1、2 年目の教員 2 名が大島高校の生徒を引率し、神津高校との合同防災研修に参加した。両校の発表をみると、島嶼の防災課題を把握するとともに、防災リーダー育成への意欲が高まった。また、この研修がきっかけで教員同志の繋がりができ、互いの防災教育や生徒会活動について情報交換ができるようになった。

＜火山噴火跡フィールドワークへの参加＞

地域のジオパーク研究会の企画に参加した。伊豆大島の地形図を持って、地域ガイドの解説を聞きながら、1986年の火山噴火跡を歩くことで、伊豆大島の地形について理解を深めた。また、実際に火山噴火が起きた際のマグマの進路も学ぶことができ、火山噴火からの避難意識が一層高まった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- 生徒のリーダーシップ育成
- 関係機関、島嶼校との連携強化（町役場、消防本部、消防団、教育委員会、専門家、地域住民、神津高校）
- 防災・救助の技能習得（消火・搬送・応急手当・避難所設営、運営・ライフセービング・上級救命・避難方法と経路）
- 災害の伝承（火山噴火・竜巻・土砂災害）

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

＜リーダー性＞

- ・代表生徒が防災委員会を定期的に開催し、防災行事を企画し、運営することでリーダー性が身についた。
- ・代表生徒が全校集会の場で防災発表をしたり、長期休業中の水難事故防止について呼びかけた。
- ・東京都の防災研修で生徒代表のパネルディスカッションに参加した。

＜技能・実践力＞

- ・防災委員の補助により、上級救命講習資格を参加生徒114名全員が取得し、救助の意欲を高め、技能を身につけた。
- ・ウォーターセーフティ教室を受講し、ライフセービング活動に参加することで、水辺の事故防止についての理解を深めるとともに、救助の技能を身につけた。
- ・HUG 訓練と避難所設営訓練をすることで、避難所運営の方法について学び、緊急時の各避難所での運営に協力しようとする意欲と実践力を高めた。
- ・町のジオパーク研究会の火山地形フィールドワークに参加することで、伊豆大島の地形について理解を深めるとともに、噴火時の避難経路について、状況判断して行動する力がついた。

＜発信力＞

- ・防災リーダーが避難訓練の発表で、災害の発生原理や避難方法について、自ら調べてまとめて発表することで、探求力と発信力を身につけた。
- ・学校祭で防災委員会の各チームがポスター発表を行った。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

＜平時の繋がりを緊急時の共助に＞

- ・全ての避難訓練を関連機関（消防、町役場、専門家）に監修を受けることで繋がりを強めることが出来た。
- ・地域のライフセービング団体の活動に参加し、繋がりを強めた。
- ・大島高校生徒が地域の津波避難訓練に参加した。
- ・防災教育推進委員会（管理職・防災担当・警察・消防・PTA 会長・役場防災対策室・火山調査官）を開催した。

＜災害の伝承＞

- ・1986年当時の火山噴火による大島全島避難時の体験談をレポートにまとめた。
- ・2000年に大島高校を直撃した竜巻による被害の様子を展示発表した。
- ・2013年の土砂災害を経験した卒業生と教員による講演会を開催した。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

＜防災リーダーの育成＞

防災委員会を定期開催し、生徒主体で防災行事を企画・運営した。

＜島嶼校との交流推進＞

神津高校との合同防災研修を開催し、島嶼間の交流を深めるとともに、島嶼の課題について学び合った。

<関係機関との連携>

全ての避難訓練・防災行事で関係機関の監修を受け、実際の生徒の活動の様子を見てもらい、助言をいただいた。

<ライフセービング活動>

ライフセービングの資格を取得し、長期休業中に地元の団体の活動に参加した。

<語り部の育成>

当時の災害を経験した卒業生と先生方による講演会を実施した。「災害時に島校生にできること」これを聞いた今の生徒が次の世代へと災害の体験を語り継いでいく。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

<災害経験を記憶に留め続け、持続可能な防災教育体制の確立>

- ・小中高の防災担当と役場と関係機関による連絡協議会を定期的に開催する。(横のつながり)
- ・高校生の語り部を育成し、小中学校で出前授業を行う(縦のつながり)
- ・島嶼の学校間の交流促進

7) その他(※特にあれば記述)

<大島・神津合同防災研修>



<火山噴火避難訓練>



<HUG 訓練>



<上級救命講習>



<避難所運営ジャンパー作成>



<卒業生による講演会>



<被災当時の先生と生徒の話>



<ウォーターセーフティ教室>



<フィールドワーク>



<搬送訓練>



<避難所設営訓練>



<ライフセービング活動>



学校名	東京都立山崎高等学校
-----	------------

活動のテーマ	学校と地域が連携した防災・減災に向けた取り組みの促進
主な教科領域等	教科領域 総合的な探究の時間、理科（物理・物理基礎）、社会（地理総合）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	2 学年 1 8 0 人（複数可）
活動に携わった教員数	5 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	1 0 人 【保護者 ☒ 地域住民 ☒ その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2 0 2 3 年 4 月 ～ 西暦 2 0 2 4 年 3 月
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・実際に起こりえる災害を想定し、災害への備えについて考えることで、生徒の防災・減災意識を高める。
- ・災害発生時に起こりえる危険や、取るべき行動、備えをについて考えることで、生徒の思考力・判断力等を育成する。
- ・学校と地域住民が一丸となり防災・減災に向けた活動を行うことで、学校と地域の連携を促進する。
- ・地域住民とともに教育活動を行うことで、学校と地域が一体となって防災・減災に対する取り組みを行う重要性を地域に発信し、SDG s 1 1 番目の理解につなげる活動を推進する。

2) 実践内容実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- ・ 9 月：山崎団地でのフィールドワーク
生徒が学校近くの山崎団地に訪問し、山崎団地で行われている防災・減災への対応や、対応を実施する上での課題等をヒアリングした。さらに団地内に設置された防災倉庫を見学し、災害時に使用する手動の発電機や防災ライトに触れた。
- ・ 1 2 月：山崎サミットにて生徒の活動報告および地域住民への防災・減災への取り組みを提案
災害発生時に本校が広域避難所となるにあたり、学校周辺の暗さや避難所としての目立たなさが課題として挙げた。よって、防災用の夜間照明や誘導灯を学校が購入・設置し、災害発生時、地域住民が避難する際に、安全に避難できる備えをすることを提案した。また、学校と山崎団地が連携し、団地内もしくは学校敷地内で防災グッズの販売会を行うことを発案し、地域住民と共有した。
- ・ 3 月：まとめ発表会の実施
1 2 月に実施した山崎サミットにおいて、地域住民からいただいた意見・要望等を踏まえ、企画・提案の内容を精査したものを再度、発表した。夜間照明・誘導灯については、当初購入を検討していたものの光度が低かったことから、光度がより高いものに変更し、購入の手続きを進める。防災グッズの販売会については、学校と地域だけでなく、販売店との連携や集金などの課題が見え、今後の実施に向けた綿密な計画を再度作り直すこととなる。

3) 9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月の研修会を受け、生徒が当事者意識を持ち、周囲を活動に巻き込んでいく力の育成を重要視した。そのために、9 月のフィールドワークから 1 2 月の山崎サミットまでの間に、本校 2 学年の代表生徒と山崎団地自治会長・防災担当者による座談会を実施し、団地の防災・減災への取り組み上の課題や、生徒が考える提案・企画等について議論する場を設けた。その結果、災害発生時に若い人たちの力が必要になることはもちろんのこと、災害が発生する前にできる取り組みを進めていくことの重要性を共有することができた。昨年度までは、生徒が提案したものを、実際に購入することはなかったため、提案の内容について具体性が欠けるものがあった。今年度は生徒が提案したものを、実際に助成金で購入することが可能となったため、生徒の提案内容も具体的になった。提案している商品と他社の製品を比較し、具体的な設置方法、設置場所などについて議論を深めることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

生徒は、日ごろ通っている学校周辺の地域で実際に起こりうる自然災害の想定をし、そこから自分たちが取るべき災害時の対応や自然災害への備えや工夫について十分に考えを深めることができた。また、地域住民や外部探究支援員を交えたサミットと報告会を年度中2度開催したことで、地域と連携して防災・減災に向けた取り組みを行うことができる体制の構築につながった。減災教育プログラムの狙いに即して、教員と生徒が対話を重ね、思考をめぐらしながら防災・減災について深く考えることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

活動を始めたころ、学校周辺の地域や団地のことに対して関心を示す生徒は少なかった。山崎団地の防災・減災についても何が課題で、年間通してどのような取り組みを行えばいいのかが分からず不安を持っていた。しかし、フィールドワークや座談会を行う中で、多くの生徒に当事者意識が芽生えた。災害発生時に、山崎高校に通う者として、山崎団地のために何ができるかを真剣に議論していた。生徒は自ら考え、それを実現するための道筋を立て、提案(発表)するという思考力・判断力、表現力に加え、行動力が身に付いた。

活動を進める中で、生徒自身が暮らしている地域における防災・減災の取り組みについても知りたい、考えたいという声もあった。当事者意識が芽生えたことで、自身が関わっている地域への愛着が沸いた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

地域住民(山崎団地)からは、団地の高齢化にともない、防災委員会が行える活動内容にも制限が出ており、対応に苦慮しているという話があった。そのため、団地の中にある本校生徒が協力して防災・減災への取り組みについて考えることには大きな意義があるという意見をいただいた。また、生徒の示す提案や提案の仕方についても、分かりやすく、実現すれば団地の防災・減災活動が活発になるものであるという評価もいただいた。

活動に携わる外部探究支援員からは、活動開始時に比べ、団地や地域の防災・減災について他人事ではなく、自分事として考えている生徒が増え、活動や議論が活発になったと評価をいただいた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

夜間照明・誘導灯の提案については、山崎サミットに出席される団地の方や外部探究支援員にも、具体性をもって示すことができるよう図や写真とともに、設置場所等の共有を行った。さらに他社製品との比較についても、比較図を用いて一枚のスライドで端的に分かりやすく伝える工夫が施された。

照明の選定については、グループの代表生徒と担当教員による会議を開き、商品の選定し直しが必要な理由を共有し、防災用の照明として適したライトの条件を改めて確認しあうなど、生徒と教員が足並みを揃え、生徒が自主性・自発性をもって活動できるよう、計画的な授業実践を行った。

また、学校と団地が連携した避難訓練の実施を計画・提案したクラスについては、避難経路の設定や避難訓練の実施方法などについて、資料を配布した上で、同じものをスライドに掲載するなどの工夫を行った。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年度の授業実践から、生徒が防災・減災に関わる上でいくつかの課題があることが浮き彫りになった。まず、生徒はさまざまな地域から来ているため、実際に災害が発生した際に、どれほどの生徒が山崎団地に駆け付けられるかの想定が困難であった。夜間照明や誘導灯については、購入し設置したのち、維持・管理のための具体的な方策を考える必要があるなど、新たな課題も発見された。また、当事者意識をどのように各学年の生徒に持たせるかという重要な課題もある。

次年度以降に向けては、本校に防災委員会を立ち上げ、生徒が日ごろから地域の防災・減災のために活動し、定期的な活動報告・活動方針の見直しを図ることで、生徒に当事者意識を持たせ、持続可能な防災・減災活動を行っていく。また、山崎団地との連携が途切れないよう、次年度以降もフィールドワークや座談会・サミットを継続して実施していく。

7) その他(※特にあれば記述)

特記事項なし

合同避難訓練で 想定している 避難経路

各棟から時間をずらして
広域避難所に避難を
行います(混雑防止)。



《合同避難訓練》

合同避難訓練実施時の避難経路の提示

山崎高校の敷地（日中の写真）



《夜間照明・誘導灯》

写真をもとに設置場所を提案

山崎高校の敷地（日没後の写真）



《夜間照明・誘導灯》

日中と日没後の比較

学校名	長野県伊那北高等学校
-----	------------

活動のテーマ	避難場所としての学校～高校生が現状を知り、考え、発信する
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な探究の時間、特別活動等）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全 学年 720人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 70 ）人 うち中心になって携わった教員は3人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 約350 ）人 【保護者50人・地域住民180人・その他（中学生100人、伊那市議会議員21人）】
実践期間	西暦2023年4月14日 ～ 西暦2024年3月31日 次年度も継続
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本年度スタートした普通科学際コースの探究活動のテーマとして防災・減災を据えた。災害についての確かな知識を身につけ、指定避難場所に定められている学校の現状を知り、課題をまとめて全校に発信することを目的とし、また当事者意識を持って、防災・減災について考え行動できる生徒を増やすことを目指して活動に取り組んだ。専門家の力も借りながら、全校や地域住民への働きかけは初年度としてはよくできたものと思われる。来年度以降も今年度の取り組みをベースにさらに発展させていきたい。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

今年度の取り組みは2年普通科学際コースの活動が中心である。

- 4月 学際探究「防災・減災」スタート。伊那市危機管理課の職員を招き講義・ワークショップ開催
- 5月 伊那市危機管理課の職員による講義・ワークショップ開催（2回）、グループ探究（調べ学習）
- 6月 グループ探究（調べ学習、防災脱出ゲーム考案・作成）
- 7月 文化祭でポスターセッション開催、防災脱出ゲーム体験コーナー（2日間で生徒・教職員・保護者を中心に地域住民も含め約200人来場）
- 8月 UTパレット（地域のサードプレイス）にて、防災脱出ゲーム体験会実施（地域住民約80人来場）
伊那市議会議員との懇談会にて、防災脱出ゲーム体験会と議員との懇談実施（伊那市議会議員21人）
- 9月 伊那市立伊那中学校探究マインクエストにて、防災脱出ゲーム体験会実施（中学生約100人）
- 10月 学校にて避難所開設体験（生徒7名）、来年度避難訓練について情報収集開始（地元消防署に問い合わせ）
- 11月 名古屋大学減災館にて、研修（生徒27名）
- 12月 中川村公民館主催の防災講座で防災脱出ゲーム体験会実施（地域住民約70人来場）
来年度避難訓練計画開始（日本赤十字社関係者と打ち合わせ）、防災脱出ゲーム改良のために出版社と打ち合わせ
- 1月 総合的な探究の時間発表会（伊那北高校避難所計画、防災脱出ゲーム、来年度避難訓練についてプレゼンテーション実施）
- 2月 防災脱出ゲームをより手軽に多くの場所で多くの人にやってもらえるよう、ボードゲーム化に着手
- 3月 パイロット版制作のために、ボード、カードのデザインを進め、印刷発注

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
これまで学校としては年2回の避難訓練を行うのみで、しかも内容は毎年同じでマンネリ化していたため、緊張感もないものだった。しかし、研修会の中で他校の取り組みを知り、また気仙沼の小中学生が当事者として学び、考え、行動している姿に触れたことで、改めてこのままではダメだと痛感し、普通科学際コースの生徒とともに来年度以降の避難訓練の変革に向けて、研修会で知り合った先生の学校の実践を参考にしたり、地域の専門家である消防署や日本赤十字社に協力を仰いだりしながら計画を進めている。また、助成金のおかげで高額のカラープリンターインクを購入することができ、自作の防災脱出ゲームのカード類を大量に印刷することが可能になり、多くの方に自作の「防災脱出ゲーム」を楽しんで

もらうことにつながった。年度末ギリギリになってしまったが、学校では印刷が難しいボードゲームやそこで使用するカード類の印刷の外注も助成金で可能になった。来年度はこれらの資材を校内の避難訓練や地域の防災イベント等で活用しながら改良を重ねて、より多くの方に防災減災について考えるきっかけを作っていきたいと考えている。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災・減災に係る教育活動は今年度スタートしたばかりであるが、初年度の取り組みが比較的順調に進んでいるため、構内の理解を得ることができ、来年度以降も「防災・減災」を普通科学際コースの探究のテーマに据えることが決定した。3月に今年度の学際コースのメンバーが下の学年の学際コースのメンバーに防災・減災について考える重要性や意義を伝えることができ、これまで見られなかった校内での縦の連携が本格的に始まった。新年度の避難訓練は現2年生が計画したものを、新2・3年生の学際コースで協力して運営する予定である。また今年度の活動の中で地域の方々とのつながりもできてきたので、それを活かしつつ、協働探究に取り組む生徒たちの学習活動を核にして、全校生徒や教職員、また他校や地域へと横の取り組みを広げていくことを目指し、来年へとつなげていきたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

今年度は2学年普通科学際コース27名が活動の核となった。初めは防災・減災に関しては消極的で興味のない生徒が多かったが、専門家のワークショップを受講し、調べ学習を行い、その内容を「防災脱出ゲーム」という自作のゲームに落とし込み、7月の文化祭でポスターセッションとともに発表する頃には問題意識が高まり、多くの方に伝えたいという意欲が驚くほど向上した。多くの生徒や保護者にゲームを通して防災について学んでもらうことで自信をつけ、8月には地域住民を対象にゲーム体験会を企画し、また伊那市議会の議員研修会に講師として招かれ、ゲーム体験会と議員との意見交換を行った。9月には地元の中学校、12月には地域の防災講座に招かれ、それぞれの場所で多くの方にゲームを通して防災・減災について学んでもらうことができた。

生徒たちはこの1年の学びを通し、防災・減災を「自分ごと」としてとらえるように意識が明らかに変容してきた。また調べ学習やゲーム体験会の企画・運営を通して、リーダーシップやチームワーク、調整力や対応力が著しく向上した。今年度の充実した学びの成果や意義を下の学年にも伝えたいという気持ちが強く、3月の新2年の学際コース立ち上げイベントは強制参加ではなかったにも関わらずほぼ全員が参加し、短時間で分担を決めて準備を進め、当日の運営を協力して見事に行った。これらの力は今後の学びにおいて、また将来大学や社会においても活かしていけるものと思われる。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

教科横断的な学びを目指す学際コースの初年度のテーマとして、「防災・減災」を据えた。当初は生徒たちの中には「なぜそんなに地味なテーマ？」という疑問や疑念が明らかにあったが、取り組みが進むにつれて、「防災・減災」がすべての人にとって「自分ごと」として考える必要があり、極めて学際的なテーマであるということが納得できたようであった。どんな分野からもアプローチが可能で、また将来どんな分野に進んでも「防災・減災」の視点というのは有用であることは、今後担当者が変わっても伝えていきたいし、このテーマは地域連携にも有効であるということも教職員全体で毎年確認していきたいと考えている。教員のそれぞれの専門性を活かして、学際探究のみならずさまざまな教科学習の中で多面的なアプローチをしていくことができるかもしれない。本校は4年後に近隣の学校と統合することが決まっており、これまでに以上に地域に根差した学校として地域連携の試みや異年齢交流の教育活動に取り組むことが必要になると思われるが、防災・減災についての学びを深めることはこのニーズにも合致している。また近年は近くにある信州大学農学部との連携が盛んになっているが、大学の防災・減災の研究者からも今後の教育活動への協力が得られそうである。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

ほぼ知識がない状態からのスタートだったため、この問題について考える必要性を体感できるような講義とワークショップからスタートした。講師をお願いした伊那市役所危機管理課の職員の方は長く防災・減災に関わっていて知識も豊富で、本校の卒業生でもあり大変協力的であったため、充実した内容のワークショップを行っていただけた。その後の調べ学習を経て、文化祭で「楽しみながら防災・減災を学べることをやろう」と投げかけた後は、できるだけ教員は口を挟まずに生徒たちを信頼して任せた。その結果、生徒たちは学んだ内容を駆使し、工夫に工夫を重ねてクイズと実際に身体を動かす体験を組み合わせた「防災脱出ゲーム」を考案した。文化祭で大好評を博したことで、生徒たちも自信を深め、市議会や中学校からも声をかけていただくことができたことはありがたかった。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

1 年は短くあつという間で計画はしっかり練っていく必要がある。また防災・減災に係る教育活動は単発的なものではなく、長期計画の中で、担当者が変わっても都度意義を再確認し、続けていけるものにしていかないと意味がないと考えている。学校の現在のカリキュラム上、来年度も2年普通科学際コースを中心にした取り組みにならざるを得ないが、一部の生徒を核として全体や地域へと取り組みを広げていける可能性を感じることができた。今年度は、「学校の避難所化」、「生徒主体で進める避難訓練の改善」、「災害時のトイレや性被害の問題」など、協働研究をきっかけにして個人の課題研究でも防災・減災について継続して取り組んだ生徒たちが何人もおり、探究内容の発表を通して学年を超えて問題意識を共有する機会を設けたことで、次年度の生徒たちは3月のうちから意欲を見せている。継続的な取り組みと生徒どうしの縦のつながりの重要性を実感している。まずは今年の取り組みを活かして、来年度の避難訓練の計画を今できる最高のものにしていきたい。

7) その他 (※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ (JPEG) もご提供ください。



↑ 文化祭の発表



↑ 文化祭でのポスターセッションの様子



↑ 脱出ゲーム① グループでクイズに解答



↑ 脱出ゲーム② 生徒手作りのアイテムカード



↑ 伊那市議会でプレゼン



↑ 伊那市議会 脱出ゲーム①カード選び



↑伊那市議会 脱出ゲーム②段ボールで仕切り作り



↑学校に電気・水道を使わずに宿泊

避難所生活 START

電気が使えないため
避難所の夜はとても暗い
「懐中電灯」「ランタン」
のどちらかを使おう
→なければ 快進速-40

避難所の夜はとても暑い
汗をたくさんかいてしまい
気持ち悪い
「タオル」「扇風機」
のどちらかを使おう
→なければ 快進速-20

避難所のゴミ箱が
いっぱいになってきたが
ゴミをいかに処理するか
が重要
「ゴミ袋」「新聞紙」
のどちらかを使おう
→なければ 快進速-30

懐中電灯が
つかなくなってきた
「乾電池」を使おう
→なければ 快進速-10

サイコロを
振って
1-3なら
→1マス進む
4-6なら
→3マス戻る

避難所のトイレの数が
少なくても入っている
さらに不衛生で
できれば避難所のトイレは
使いたくない
「簡易トイレ」を使おう
→なければ 快進速-20

避難所の生活はとても退屈だ
何か楽しいことをしたい
「トランプ」「人生ゲーム」
のどちらかを使おう
→あれば快進速+20
(※なくても快進速は変化なし)

避難所にトイレの数が
少なくても入っている
さらに不衛生で
できれば避難所のトイレは
使いたくない
「簡易トイレ」を使おう
→なければ 快進速-20

避難所の生活はとても退屈だ
何か楽しいことをしたい
「トランプ」「人生ゲーム」
のどちらかを使おう
→あれば快進速+20
(※なくても快進速は変化なし)

避難所にトイレの数が
少なくても入っている
さらに不衛生で
できれば避難所のトイレは
使いたくない
「簡易トイレ」を使おう
→なければ 快進速-20

避難所生活 GOAL

カップ麺 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、カップ麺は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	アルファ米 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、アルファ米は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	缶詰 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、缶詰は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	乾菜類 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、乾菜類は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	フリーズドライ食品 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、フリーズドライ食品は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	缶詰パン 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、缶詰パンは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+20
レトルトカレー 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、レトルトカレーは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	即席スープ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、即席スープは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	ようかん 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、ようかんは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	缶詰のおかず 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、缶詰のおかずは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+20	ゼリー 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、ゼリーは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	スイーツ類 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、スイーツ類は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+20

ジュース 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、ジュースは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	調味料 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、調味料は非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	チョコレート 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、チョコレートは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	ビスケット 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、ビスケットは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10		
--	--	--	--	--	--

現在パイロット版を制作中の
「防災脱出ゲーム」ボードゲーム
の一部

トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10
トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	トランプ 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、トランプは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10	人生ゲーム 避難所生活で最も重要な食糧の一つ。食料が不足しているときに、人生ゲームは非常に役立つ。ただし、食べ過ぎると体調不良の原因になる。快進速+10

学校名	日本福祉大学附属高等学校
-----	--------------

活動のテーマ	避難所運営支援を通して、高校生を地域の支援力に変える				
主な教科領域等	教科領域（総合的な探究の時間（GFSⅡ）、地理総合、地学基礎、保健 ）				
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発				
活動に参加した児童生徒数	（ 2 学年 156 人）（複数可）				
活動に携わった教員数	（ 10 ）人				
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 28 ）人 【保護者・地域住民・その他（ 大学職員 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）				
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日				
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）				

活動報告

1）活動の目的・ねらい

高校生は、災害時において、被災者であるとともに、支援者にもなる存在である。そのため、非常時に活動できる人材となるため、年間を通して知識とスキルを身につけながら、減災に向けて想像する力、行動する力を身につける。

2023 年度の防災教育の目標:「災害の知識・理解を深め、福祉マインドをもったリーダーの育成」

※本校が生徒に身につけたい7つの力との関係

- ①災害に関する必要な知識を身につけ、減災に向けて想像する力を身につける（構想する力、分析する力、探究する力）
- ②日常生活および避難所におけるリーダーシップ力を身につける（発信する力、実行する力）
- ③答えのない問いに対して、お互いの価値観を乗り越え、合意形成を行う力を身につける（協働する力、認め合う力）

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

日時	内容	ゲスト講師
6月22日	美浜町役場からの課題提示	
7月6日	防災ゲーム「CROSSROAD」	
9月14日	避難所運営ゲーム「HUG」の実施	
10月5日	南海トラフ大地震について(DVD)	
10月19日	「学園防災の日」避難情報について・避難訓練	
10月19日	南海トラフ大地震への備えについて	(あいち防災リーダー会)
10月26日	美浜町の避難所運営について(講義・実技)	(美浜町防災課)
11月2日	公開授業「災間を生きる子どもたちへ」	(齋藤幸男先生)
11月9日	赤十字防災セミナー「炊き出し体験」	(赤十字奉仕団)
11月16日	赤十字防災セミナー「災害への備え」	(日本赤十字社)
1月18日	避難所のトイレについて	(あいち防災リーダー会)
2月8日	新聞記事から能登半島地震から課題を見つける	
2月15日	美浜町役場への課題解決策発表	

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

災害時に生徒が「支援者側」となれるように、気づきと意識付けを各活動にて行うこと。9月の研修においては、児童・生徒たちが、防災・減災の活動意義をきちんと引き継ぎ、活動していることを目の当たりにし、日常の教育活動中に取り入れていくことの大切さ、校種間を超えた連携の大切さを理解できた。継続的なプログラムが実施できるように、原案の作成に活かしていきたい。

また、今年度は助成金を活用して、石巻西高校の元校長齋藤幸男先生にお越しいただき、東日本大震災で実際に起こったこと、避難所運営において大切なことを学ぶことができた。その中で、実際に高校生たちがどのように活躍をしたか、高校生が避難所で担った役割を生徒たちに具体的にお話しいただいたことは、生徒たちの当事者意識を高めることにつながったと考える。今回の取り組みで、校内で取り組むコアなリーダーを作り、活動対象を全校へ広げていきたい。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

これまでの、教員側が内容を考え、講演を聴くことで、災害に関わる知識を増やすこと、避難訓練で自分たちの身を守ることのみ、となっていた。今年度は、2年生の総合的な探究の時間において、一定の時間をとることができたため、美浜町からいただいた課題も踏まえ、プログラムを災害後に主眼を置き、体験的な活動を増やして、活動のイメージが持てるようにした。またそれぞれの取り組みの講師と意見交換を行い、災害が起こったときに、こういったところで、高校生の力が必要になるか、その点の確認を行った。避難所運営においては、高校生自身がある程度避難所の全体像を理解できていることが重要であること、そしてそれぞれの役割を繋いでいく役割が適していることが理解できたため、それらの点を踏まえて、高校生が身につけるべき知識、技能を地元美浜町の防災課と確認をし、高校生向けのプログラムを作成していく予定である。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

生徒たちにとっては、初めて体験することが多かったようであるが、意外と手際よく取り組むことができた。日常から手順を理解しておけば、避難所設営においても十分にサポートに入ることができる。活動においても、お互いが声を掛け合いながら役割を分担したり、できていないところのサポートに入るなど、相手を見ながら行動できる力については、基本的に身につけていると考える。非常時には、こういった力が必要になると思うので、今後とも伸ばしていきたい。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

本校は、町内に一校の高校である。また大学と併設であるため、長い間大学生の方が頼りにされるケースが多かった。しかし、大学の下宿生の現象により、これまで大学と地域とでつながっていた関係が、コロナを境にいろいろなところで途絶えていることがわかった。そうしたところに、高校側が地域とのつながりを求めたため、地域からはいろいろなところで声をかけられることが多かった。また、高校生にとっても、多くの生徒が電車通学であるため、帰宅困難となり、学校にとどまることになる。そうした中で顔が見える関係を深めることができたことは、非常時につながりやすい関係ができたと考える。また、地域の方々も、高校でプログラムを行うことで、実際の避難所となる場所で、シミュレーションができてことで、大変喜ばれた。この取り組みをきっかけとして、防災以外のところでも地域とのつながりが広がりつつある。地域の力を借りながら、災害時に力を発揮できる生徒を育成していきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ①地元の避難所運営への協力体制を作るため、地元市町村との協力体制をとったこと。
- ②多くの講師を地元の方をお願いをしたこと。
- ③東日本大震災の教訓から学ぶため、学校を避難所として運営した講師に公開授業およびワークショップを行ってもらったこと。
- ④生徒と役場、地域の防災リーダーとが顔の見える関係になったこと。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回の取り組みを通して、地域と高校との間でつながりを作る事ができた。実際には、大学も含めた学園が災害時に避難所となっているため、現実的には、学園内の非常時の連携においても確認が必要である。また、学園の取り決めでは、高校は避難所にならないことになっているが、今回の取り組みを通して、地域の方々のニーズも別途あることがわかってきた。それらの問題をクリアにするためにも、地域と連携をした本格的な災害訓練に取り組む必要がある。

また、今回の取り組みを精選して、高校生が避難所運営に必要な知識やスキルを身につける講習会を、地元自治体、大学の減災教育センターとともに開発していきたいと考える。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



【町の防災倉庫から資材を出す】



【避難所ワークショップの様子】



【避難所設営のための資材組み立て体験】

【炊き出し体験は、地元の赤十字奉仕団の方にご協力いただいた。】



【ハイゼックス・マイラップを活用した炊き出し体験】

学校名	京都府立東稜高等学校
-----	------------

活動のテーマ	地域とつながる東稜防災博覧会、出前授業の実施
主な教科領域等	教科領域（地歴公民科、理科、マネジメント科）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 第 2、第 3 学年 77 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 4 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 約 500 ）人 【保護者・地域住民・その他（小・中学校・特別支援学校生徒）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 9 日 ～ 西暦 2024 年 1 月 18 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（大雪、火災、落雷など）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校では、2年次に防災の知識をインプットさせ、3年次には学びをアウトプットさせる活動に力を入れている。今年度は、地域住民のより多くの方に防災について興味・関心をもってもらえるよう「東稜防災博覧会」というイベントを地域のショッピングセンターで主催するとともに、生徒自らの学びを活用し伝える機会として、小・中学校および特別支援学校に向けての「防災出前授業」を実施した。これらの活動のなかで、生徒たちが災害等を我が事としてとらえ、仲間と協働しながら防災について創造性のある提案ができるようになることをねらいとしている。また、前述のような地域に向けての生徒の発信が防災の輪づくりにつながると考えており、地域の防災力を高める一助として実施した。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

4 月	防災ジャーナル【マネ知識】作成（2年） 防災博覧会段ボール制作、ワークショップ企画 小・中学校・特別支援学校出前授業企画（3年）	9 月	中学校出前授業（ポスター発表の講評、防災クイズ） 特別支援学校出前授業（ダイレクトロード、校内の「危ない」を探す探検）（3年） 文化祭防災博覧会展示（2、3年）
5 月	防災ジャーナル【マネ知識】作成（2年） 防災博覧会段ボール制作、ワークショップ企画 小・中学校・特別支援学校出前授業企画（3年）	10 月 11 月	中学校出前授業（防災クイズ、簡易担架づくり） 防災博覧会のチラシを中学校に配布する活動 防災博覧会実施・災害支援の募金活動実施 北醍醐地区総合防災訓練への参加・本校の取り組み紹介（2、3年）
6 月	防災カルタ制作（2年） 小・中学校・特別支援学校模擬授業会（3年） 防災博覧会災害伝承ポスター制作（3年）		
7 月 8 月	出前授業連携先教員と生徒による打ち合わせ 児童館夏休み出前授業実施（防災紙芝居クイズ、新聞紙スリッパづくり）（3年）	12 月 1 月	伏見区総合防災訓練（取り組み紹介） 小学校出前授業（交通安全と防災の街歩きウォークラリー）（3年）

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

災害への適切な理解には客観的データが重要と指導してきたが、東日本大震災の津波高の記録に関して、「事実であるが真実ではない」という説明を受け、当事者の体験談と併せて学ぶことの重要性が伝わるよう意識して授業を行うようにした。記録に残らなかった部分を知らずにいることが次の災害時の想定外の範囲を拡げることや、犠牲を無駄にしまうことを生徒も理解し、「学校現場の想定外」というテーマ学習における主体性が向上したように思われる。また、防災博覧会では来場者に対する説明を積極的に行ったり、災害支援金を募ったりする姿からも、生徒の、我が事としてとらえ、考えて行動する力が育ってきたと感じられた。いただいた助成金を活用し、段ボールなどの資材を購入して、生徒の創作活動に注力することができた。これにより生徒が大きな展示物を作成し、搬入することができたことに加え、連携企業および組織との共同展示が可能になった。また、地域住民に向けた案内など、生徒の外部への発信手段の充実を図ることができ、生徒が地域住民へ積極的にアプローチするきっかけが得られた点がよかった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

被災地での研修を通して、災害伝承の重要性を強く認識することができた。被災地を実際に訪問した教員が災害を語り継ぐことの意義を生徒へ伝えられたことは、生徒の我が事意識の向上につながったと考えている。また、教員自身が防災教育担当者として現地で学んだ事も防災に関する探究心を深めることにつながり、貴重な経験となった。また、生徒のみならず本校の教職員にもプログラムで学んだ事を伝えられたことも学校全体の防災意識向上の一助になったと考える。今後も、東北などの被災経験のある地域での学びは実践していく必要があると感じている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

生徒たちには、計画・運営に関して上手くできず心配な部分があったが、6月にクラスメイトに対して実施した模擬授業で自身の至らぬ点を自覚し、改善しようと担当教員とのコミュニケーションを密にとるようになった。また、生徒は連携先の学校の教員との打ち合わせにも参加し、責任感を強く持って取り組むことができるようになった。「防災博覧会」における、地域の方へ向けた生徒の熱のこもった案内や説明をしていた姿が印象に残っている。1月に実施した「交通安全と防災の街歩きウォークラリー」では、対象の小学生に対して交通安全や防災について口頭で説明するだけでなく、自らが見本となるように行動していた。また、生徒たちは準備段階から対象の児童の習熟度を考慮したクイズ作成をしていたが、現場ではさらに状況に応じた補足説明を行うなど児童の学びをサポートしていた。以上のことは自分たちの学びや取り組みを多くの人に伝えたいと思うようになったからこそであり、また、学ぶ側から教える側に成長したことの表れであると考えられる。校内での学びにとどまることなく、外部の多くの人と関わりをもつことができたため、防災の輪づくりに貢献できたのではないかと思われる。フィードバックで生徒は「防災の学習が楽しくなった」、「責任感や達成感が大きかった」など主体的に学ぶ意識に関して自身の変容を感じていた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

担当教員から見て、自主性や積極的に学びに向かう態度を育むことができたと感じている。連携先の企業や組織の方も生徒たちの取り組みを見て、「何か協力したい」とのお声をかけてくださった。その結果、「防災博覧会」では、関係機関の展示なども実施することができた。また、生徒の保護者や地域の方も足を運んでくださり、生徒がやりがいを持って取り組んでいることを知っていただくことができた。地域の方の労いの声かけは生徒たちの自己肯定感の向上にもつながったと思われる。「交通安全と防災の街歩きウォークラリー」は、多くの小学校の教員および保護者の方のサポートのもとに実施されたが、クイズの難易度や街歩きの際の小学生の目線についてなど、こちらが気づけなかったことについての数々の指摘や提案をいただくことができた。このように、他校種や保護者とともに作りあげていく体制ができたことは本校のみならず地域にとっても大きな成果であると思われた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

「防災博覧会」については、出来る限り多くの方に取り組みを知っていただくことに力を注いだ。生徒たちは自分の卒業した中学校にアポイントメントをとり、教員に活動紹介をする取り組みを行った。その取り組みは本校の公式Instagramでも行った。また、今年度の防災博覧会の企画展「災害伝承」のポスター発表は新たな取り組みであったが、貴プログラムの研修会での学びとマッチした内容になったことも大変意義があった。出前授業についても、連携先の教員には実践終了後、感想や改善点などを指摘していただき、次年度に向けての改善策を練ることに努めた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

「防災博覧会」は来場者数をどのように増やしていくかが課題として残った。実際に、本校の公式Instagramやホームページ、さらには中学校への啓発活動に加えて、ショッピングセンターの連絡通路で募金活動を行うなど、工夫を凝らしたが、思うように来場者数は増えなかった。そのため、今後は本校だけの取り組みにせず、地域全体に及ぶ町おこしイベント等への参加を試みるなどの工夫が必要と考える。ほかには、防災学習を生徒が京都で学ぶ意義を理解・アウトプットしていけるよう京都の歴史や古典文化にも目を向けた防災学習を展開していきたいと考えている。

また、成果報告会にて、「交通安全と防災の街歩きウォークラリー」について、小学校およびその児童との年間の交流の機会を増やし、ともに防災学習のしくみや教材作成ができるようにするのはどうかという提案をいただいたので検討していきたい。

7) その他(※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。

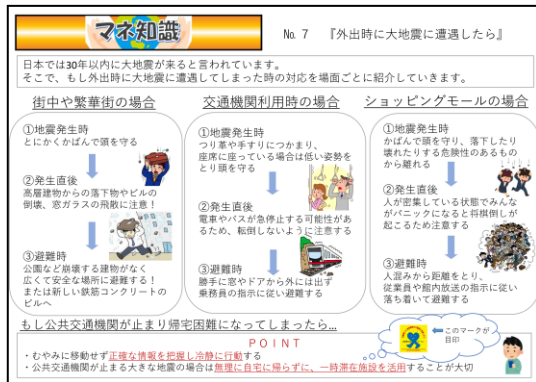


写真1 防災ジャーナル「マネ知識」



写真2 出前授業



写真3 避難訓練



写真4 自衛隊による特別授業



写真5 防災博覧会



写真6 防災博覧会



写真7 募金活動



写真8 マンホール設置体験



写真9 街歩きウォークラリー

写真1…生徒作成の防災ジャーナル

写真3…避難訓練は生徒が企画・運営を行った。

写真5…小学生に災害や避難所について説明した。

写真7…災害支援の周知と募金活動を行った。

写真9…小学生と街を歩きながらクイズを通して、防災の意識向上を図った。

写真2…小学生にクイズ形式で防災について説明する生徒

写真4…自衛隊による災害支援や応急処置について学んだ。

写真6…生徒が段ボールで作製した簡易トイレ

写真8…上下水道局監修の下、マンホール設置体験をした。

学校名	学校法人福井学園 福井南高等学校
-----	------------------

活動のテーマ	福井南高校が避難所になったら～高校生の人たちにできること～
主な教科領域等	教科領域（ 福祉、家庭科、総合的な探究の時間 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 ☐ 避難訓練・避難所運営 ☐ 専門家の活用 ☐ 体験学習 ☐ 学校間・地域間交流 ☐ 教科連携 ☐ 地域発信 ☐ カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 2、3 学年 55 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 7 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 6 ）人 【保護者・地域住民・その他（ 行政、NPO等 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 8 月 7 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 15 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 ☐ 津波 ☐ 台風 ☐ 洪水 ☐ 河川氾濫 ☐ 土砂 ☐ その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校は県内広範囲から生徒が登校し学校生活を送る。2022 年 8 月に福井県南越前町を中心に大雨の影響があり、生徒の交通手段が使用できず、登校に影響があった。また授業中に災害が発生した場合、生徒が学校周辺の環境に関して理解をしておくことは被害を減らすことにもつながると考え、テーマを設定した。学校周辺の環境を知っておくことで被災した場合の地域住民と高校生が共助できるようにするのねらいである。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

日付	活動内容
2022 年 10 月～	【授業】 私たちにできる自助・共助について考えてみよう（地域福祉の単元）
2023 年 4 月～（通年）	【授業】 ライフサポート系列 福祉：地域福祉 家庭科：災害時の「食」を中心に 総合的な探究の時間 「支援が必要な方々への防災に関して」
2023 年 6 月	【研修】 NPO 法人の災害担当と福井市の地域交流に関して現状アドバイス
2023 年 8 月	【研修】 浜松防災学習センター見学（教員）
2023 年 8 月	【授業】 大学教員から災害ソーシャルワーク授業受講「災害時要援護者と福祉」
2023 年 9 月	【研修】 アクサ減災教育プログラム参加
2023 年 9 月	【研修】 教職員全体研修・教職員防災点検
2023 年 10 月	【授業】 第 1 回 体育館 避難所設営
2023 年 10 月	【発表】 第 33 回全国産業教育フェア福井大会 研究発表部門 発表
2023 年 11 月	【授業】 福井市出前講座 災害対策について
2023 年 12 月	【授業】 第 2 回 体育館 避難所設営
2024 年 1 月	【授業】 福祉 グループワーク発表

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○避難経路の確認をするにあたり通路の活用方法に関して

○備蓄品の再確認、生徒の防災グッズ所持に関する検討

研修会を受講後、後日校内の避難経路の確認をしたところボトルネックが発生する可能性が何ヵ所か見受けられたため、改善検討。教員間での連携確認。また今回の避難訓練から後日検討用と記録用で PC やカメラで動画、写真を残すようにしている。

避難食を実際に学校で食べてみることで、ライフラインの確保の大切さを改めて生徒と確認する。ガスコンロ等備蓄に追加することで、食・住の一時的確保につなげる。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

9月の仙台研修後、すぐに防災に関する教職員研修を実施することができた。特に情報伝達については、日頃 ICT を活用しており、どのタイミングで、何の情報を流すのかがとても重要になることを再確認することができた。また、「伝承」の姿勢を自分自身大切にするようになり、異学年交流の回数を増やし、生徒（先輩）と生徒（後輩）、あるいは同学年生徒同士で学ぶことで、説明のために自らの考えを言語化しようとする姿勢が増えたことを実感できたので、今後も取り入れていきたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

「自助」・・・「どこか他人事であった災害対策が自分事になった」という意見が多くあり、自分の家での防災対策に関して家族と会話をする傾向が増加した。また身体的・精神的な健康に関して、介護の勉強をしている系列では、どうしても相手のケア優先に考えがちではあるが、ケアをする側も被災者であるとなるとどのような問題が起こるか、どのような対策が必要かを考えるようになった。

「共助」・・・学校生活を送る中で被災した時にどう行動できるかを考えたことで、高校周辺の地域理解にもつながった。特に情報発信に関しては、生徒も福井市の防災アプリなどの活用方法を知らなかった部分が多く、情報を発信する、受信するタイミングに関して確認することができたのは今後にいかせると実感した。2回目の避難所設営では、1回目よりも自主的に動ける生徒が増えて、体育館を最大限に有効活用することができた。高校生だからできる活動を自身の住まいの地域においても期待したい。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

継続して関係者と連携を行う大切さと大変さが浮き彫りになった。学校生活においては、授業時間帯に被害を受けるとは限らず、休み時間等、生徒や教職員が離れた時にこそ、避難の時の行動確認が必要になる。また、保護者に関しても緊急連絡の確認は必要であり、また保護者を対象とした学校の災害発生後の対応を日々確認しておくことで生徒の安全につながると実感した。地域や行政に関しても本校と連携が始まったばかりだが、さらにどのような連携がとれるのかを次年度以降も模索していきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒が自分事として防災対策を考えるにはどうしたらよいかを教員間で検討した時に、訓練回数を増やし、そのときの気づきや改善点をまた次回の訓練につなげるというように、教員側は環境を作ることに意識を向けた。主体的に動く生徒が回数を重ねることに増えたのは評価としてよかったといえる。一方で、情報の取捨選択に関しては、一つの情報だけで行動することのないようにと繰り返し伝えた。膨大な情報が被災者に降りかかるときに、どのように選択していくかは高校生も早い段階から学ぶ必要がある。SNS の活用ができる高校生だからこそ、正しい情報を受け取り、伝える立場に立つためにはどのようにしたらいいか情報リテラシーの部分もさらに授業で展開していきたい。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

ライフラインが確保できないときの避難の方法は何度実践しても気づきがある。特に冬場の避難所設営に関しては、自分たちの想像以上の寒さとの闘い、また感染対策等も徹底する必要が改めてあった。避難所での生活が長期化すればさらに二次被害が起こる可能性が高い。季節に応じて対応できるよう、改めて備蓄の毎年見直しが必要だと改めて実感した。

また、防災に関する教職員の研修も今後も継続する予定である。防災士の資格を持つ教員や、医療の知識がある教員等、様々な連携をもとに、学校での対応を確認していく。今回の研修をきっかけにして、授業はもちろんのこと、年間を通して、防災対策を「忘れない」ことを意識した訓練ができるようにしていきたい。

今回は防災教育の土台作りがメインになった1年間で、生徒主催の防災訓練までは結びつけることができなかった。今年度の学習や経験を踏まえて、次年度は防災が主に生徒の主体的な活動となるように計画をしていきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



様々な場所でのパーソナルスペースづくり。プライバシーの確保、寝返りできるかなどを体感してみた。



段ボールベッドや非常食を水・お湯等様々な環境を想定して作った。



防災の取り組みをする機会を作り、プレゼンテーションの能力の向上を意識した。

活動のテーマ	災害から身を守る～その時自分は何ができるのか～		
主な教科領域等	教科領域（ 課題研究 ）		
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練 避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発		
活動に参加した児童生徒数	（ 1 学年 3 0 人 ）（複数可）		
活動に携わった教員数	（ 2 ）人		
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 0 ）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）		
実践期間	西暦 2 0 2 3 年 1 1 月 1 日 ～ 西暦 2 0 2 4 年 2 月 1 4 日		
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（火事）		
活動報告			
1) <u>活動の目的・ねらい</u> 本校は鳥取城跡に位置しており、背後には久松山の急峻な斜面が迫っている。校地は土石流特別警戒区域に指定され、背後の斜面は急傾斜地特別警戒区域に指定されている。普段は安心して勉学に勤しむことのできる本校が特別警戒区域に位置しているということを自覚することが必要である。いづどこで何が起こるか分からない今、大きな災害を経験していない生徒が多い中で、どうしたら自分事として防災・減災に向き合うことができるのかが課題である。そこで、避難訓練等の特別活動だけではなく、学校設定科目「課題研究」を活用して、主体的に様々な角度から防災・減災について考え、「自分事として考えていけるにはどうしたらよいか」を活動の目的とした。			
2) <u>実践内容・実践の流れ・スケジュール</u> （※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）			
実施日及び実施内容			
1 1 / 1	ミニ課題研究開始（ゼミ単位）		
1 1 / 1 5	ゼミ活動 ※鳥大教授による授業	1 8 名参加	
1 1 / 2 9	ゼミ活動		
1 2 / 1 0	※神戸「人と防災未来センター」見学	1 4 名参加	
1 2 / 1 3	ゼミ活動		
1 / 1 7	ポスター準備		
1 / 3 1	リハーサル		
2 / 2	AOS ポスターセッション		
2 / 1 4	振り返り		
※当初は3月に1時間予定してあったが、内容変更に伴い前倒しとなった。			
テーマ ○地震と水害に負けない建物づくり ○田んぼダムとは ○ハザードマップの認知率・利用率を上げるには ○鳥取で大きな氾濫が起きにくいのはなぜか ○避難袋の利用の現状とそれらの用意を人々に喚起する方法 ○避難意識を高めるためには ○ハザードマップのパワー ○過去の災害から考える発生時の対応 ○防砂に対する意識の現状と改善方法 ○地震に強い建物とは			
今年度は、学校設定科目「課題研究Ⅰ防災分野」において、防災に関する探究型学習に30名が取り組んでいる。大まかなテーマを提示した後、小グループに分かれ活動を開始した。まずは地震や水害が専門の鳥取大学教員から学校周辺の減災（防災）等についての現状を報告してもらい、知見を広めた。この活動において生徒たちが探究していく課題を提示していただいた。また、昨年の先輩の活動の様子等も見聞きして探究活動を進めていった。活動を行う中で課題に対する提言をまとめるために、「人と未来防災センター」へ出向き情報収集を行った。最終的な成果は、本校生徒や県内教育関係者、地域を対象にした成果発表会で広く共有し、普及啓発につなげた。			



人と未来防災センターでのフィールドワーク

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

「自助」「公助」「共助」「N 助」のうち、自分たちの活動はどこに重点を置いたものなのかを振り返る機会や、また、研究内容を発信してフィードバックをもらい、次年度以降の改善に活かすこと等を考える時間を設けた。昨年国事業（学校安全総合支援事業）を採択され、数多くの被災地等を見学することができ、多くの学びを得た。その経験を後輩に伝える場も設けることが出来た。今年度も助成金を活用したことで、県外の施設を訪れ、心に刻まれる体験ができたことが、今の生徒の学びに結びついている。体験がないからこそ、身近に感じにくいからこそ、現地に赴いた時間は貴重であった。

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校の課題研究のプログラムには、もともと減災（防災）教育のテーマは入っておらず、これらのテーマに基づいた研究プログラムの構築は急務であった。ここ近年のスタイルは、1 年次の後半に教員が立てたテーマに食いついてくる生徒（年によってまばら）とともに進めている。次年度も継続して研究している生徒は少ない中でも、昨年現地に連れて行った生徒は、授業だけではなく、市内で開催されている防災フェスタに出向いたり引き続き研究している姿を見ると頼もしい限りである。継続して取り組めるプログラムの構築が急務であると感じている。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

★私は大きな地震など経験したことがないし、最近では情報通信技術の発展により災害の情報などすぐ入ってくるから自然災害というものに対して全く準備していなかった。でも、シアターを見たり体験型のものをやってみたりして **どれだけ防災というのが大切なのか深く心に刻まれた**。阪神淡路大震災の当時のものが展示されている場所に子供が書いたであろう手紙があった。私はそれを読んで、**実際に自分の家族を想像してしまった。とてもつらくなり一緒に周っていた友達と涙を流した**。それぐらい今回の経験で私の心に深く刺さるものがあり、行動に移したいと強く思った。

★実際に体験したことによって、**もしこれが本当に自分の身に起きたら死んでしまいそうだなと地震の恐怖をすごく感じた**。

★自分は逃げる時に持っていくリュック等は準備しているけど**他にも考えないといけないことがたくさんあると知った**。

★自分が旅行や一人暮らしを始めた時に、**地震などの災害が起こったらどうするかを事前にハザードマップやネットなどで調べたい**と思った。

★地震発生直後の行動のとり方を知ることなどが大切だということを実感して、**普段からの備えが自分の命に関わる重要なことだと気づき、以前よりももっと「地震について学ぼう」と思えた**。

★**早めに逃げる勇気ということを学んだ**。

全員が、地震のすさまじさを疑似体験したことで、想像では計り知れなかった威力を目の当たりにしたようだ。消して他人事ではない、自分事として捉えることが出来た事はできた。自分の命は自分で守る姿勢を身につけ、自ら率先して安全を確保する力、さらには自分に何が出来るのかを考え、これからどう周りの人にも伝えていけるか、普及啓発力をさらに身につけさせたい。

（全体の学びの感想の抜粋）

□人と防災未来センターにはたくさんの資料が集まっているけれど、これも被災者の方々が「過去の悲劇から学ぼう」という姿勢がなかったら成り立たなかったものではないかと考えた。未来に起こることはだれにも分からないので、常にもしものことを考えて行動することが大切だということが分かった。

□少しでも災害に対して意識を持って普段から行動している人とそうでない人とは、実際に地震が起こった時に大きな差が生まれると感じた。

□私は今まで大きな地震にあったことがなく、地震を「自分の身にも起こりうること」として捉えきれていなかったけれど、今回の見学で日本に住んでいる限り、地震と付き合っていくことはどうしても必要で、恐れるだけではなく、地震を知ろうとすることが大切だとわかりました。

□今回学んだことを家族や友達に教えたいと思いました。震災はいつ来るかわからないからこそ防災をすることが大切だということ

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本校の企画部が中心となって課題研究メソッドを提案してくれる体制や、防災については、研究を進める上でのポイントや流れを文章化して共有することができるなどして、担当教員への引継ぎがスムーズに出来るようになった。地域との連携事業は一旦出来ていないものの、昨年のように研究経過発表を見に来ていただき、アドバイスをいただく事は出来た事は生徒にとってもプラスとなっていたが、課題研究の内容変更につき実施することが出来なかった。高校生の活動を広く地域住民に還元することで見える課題があったのだが、実施できず残念であった。



5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校実践の大きな特徴は、テーマを明確にし、高校生が「自分たちが主体となった行動が求められている」と意識できるプログラムにしていることである。①リサーチクエスチョン設定②調査③改めてリサーチクエスチョン設定④提言となるように進めている。が、研究時間が非常に少ない。研究しようにも圧倒的に時間が足りない。実質4時間のゼミ活動の授業内では他校の取組のように全校・または地域を巻き込んだの活動が出来なかった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・継続的なプログラムの実施と各年度の研究内容の蓄積
- ・連携可能な外部機関の検討
- ・外部への実践の報告と共有

やはり他人事と捉えている生徒が多く、防災減災意識は低いことが、課題研究発表会の参観人数に表れていた。次年度の課題研究は個人でのテーマ設定から始まり調査期間も1年近く出来るので、防災意識の高い生徒が引き続き研究し、継続的に取り組めたら良い。新入生には継続的の防災減災のテーマを設定し考察させることを継続していきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

学校名	済美高校
-----	------

活動のテーマ	主体的・実践的な減災教育
主な教科領域等	教科領域（ 家庭科、理科、社会、総合探究、特別活動 ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 ☐ 避難訓練・避難所運営 ☐ 専門家の活用 ☐ 体験学習 ☐ 学校間・地域間交流 ☐ ☐ 教科連携 ☐ 地域発信 ☐ カリキュラム開発 ☐
活動に参加した児童生徒数	（ 全 学年 180 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 15 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 9 ）人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 4 月 21 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 27 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 ☐ 地震 ☐ 津波 ☐ 台風 ☐ 洪水 ☐ 河川氾濫 ☐ 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

南海トラフ巨大地震に備え、災害を自分事として捉え、生徒の自己防災力を向上させるため、主体的・実践的な減災教育を展開する。これまでの避難訓練や災害に対する認識の薄さ（避難訓練への形式的参加、地域の避難訓練への参加なし、避難生活は誰かが助けていると思っているのではなく、そもそも災害が起こらないと思っている生徒が多い）から生じる課題に対処し、生徒たちが災害を直視し、主体的に考え、行動できる能力を養う。そのためには、教科との連携を強化し、大学や行政など専門機関からの学びを取り入れ、地域社会との交流を通じて、自他の命を守る知識・技術・実践的行動力を効果的に育成する。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○1 学期 避難訓練（地震想定）

ジュニア防災リーダークラブ活動への参加（国土交通省松山河川国土事務所免震構造の見学、重信川で水量の計測）
防災食講習会（家庭クラブ主催、缶詰・乾物を使った調理実習「袋でご飯・サバ缶トマトカレー・ひじきサラダ」）

○夏休み ジュニア防災リーダークラブ活動への参加（学校が避難所になったら？ワークショップ参加、阪神淡路大震災から学ぶ 野島断層保存館、人と防災未来センター見学）

○2 学期 非常持ち出し袋保管庫点検（済美高校青雲館7階保管庫）

気仙沼報告会
災害カードゲーム「クロスロード」に挑戦（松山市防災・危機管理課）
西日本豪雨に学ぶ減災学習（野村町伝承展示室の見学、街歩き、ワークショップ「安全で安心な生活を続けるために」）
幼稚園児との減災学習（紙芝居の読み聞かせ、済美幼稚園）
学校内危険箇所点検
避難訓練（火災想定）
防災食勉強会（松山東雲短期大学「災害に備えるための防災食について」）

○冬休み 課題（各家庭の非常持ち出し袋、備蓄品の点検「写真撮影、クラスルームで提出」）

○3 学期 心肺蘇生法講習会（講師：松山市消防局、防災・危機管理課）

防災食講習会（食物科学コース「調理」冬休み課題の備蓄品を活かした調理実習。「ご飯・大豆と人参のサラダ・春雨とツナのチヂミ・高野豆腐のクリームパスタ」味の素HPより）
非常食試食会（本校非常持ち出し袋内の非常食の試食）
防災食実習（食物科学コース2年生対象。災害時、ライフラインが止まったと仮定し、限られた水、限られた食材で電気を使わない実習を体験する。献立：鯖缶カレー・キャベツと乾燥わかめ・塩昆布のサラダ・ナッツバー）
家庭クラブ防災食講習会（鯖缶パスタ・ちりめんおかかおにぎり・切り干し大根サラダ）
家庭クラブ防災食商品化に向けて（ちりめんおかかおにぎりの商品化）
非常持ち出し袋、持ち出し訓練（青雲館7階保管庫より、1回まで下ろす訓練）

○春休み 防災食勉強会（松山東雲女子大学「ちりめんおかかおにぎり」の試食会・石川での災害ボランティア報告会）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

<実践に活かしたこと>

研修会で、災害に対して当事者意識を持つこと、被災地を訪れたり、被災された方の体験談を聞いたりし、災害を五感で感じること、自分たちの命を守る防災・減災教育を学校と地域で行うことの大切さ、そして、平時の取り組みの重要性を教えていただいた。これらのことを、教員・生徒に伝えた。自ら見聞きしたことを伝えられたことは、教員・生徒の災害への意識を高めたり、主体的・実践的な減災教育を発展させたりすることに役立っている。また、階上小学校の授業視察で中学生が小学生に防災紙芝居の読み聞かせをしているところを見せて頂いた。この活動は代々受け継がれており、紙芝居を読んでいた中学生も小学生の時に、紙芝居を聞いたということであった。継続した取り組み、教えられる立場から教える立場になることの意義など学んだ。本校でも系列幼稚園児に対する防災紙芝居や交流を継続した活動にしたい。

助成金により、2018年7月に発生した西日本豪雨に学ぶと題し、被災地西予市野村町を訪れた。災害伝承展示室の見学や最高水位が表記された看板などを見ながらの街歩きで、災害の恐ろしさはもちろん、事実を知り、学び合うことの大切さを再認識した。そして、調理実習の材料費にも助成金を充てた。本校には、食物科学コースという食に特化したコースがある。日頃から調理実習を行っているが、3年間の実習の中で、非常時を意識した実習はなかった。そこで、ポリ袋で米を炊いたり、缶詰や乾物を取り入れた実習や各家庭の備蓄品を利用した実習を行ったりした。現在は、大学の勉強会で学んだ「被災時のたんぱく質不足の解消」のためのレシピ作りに励んでいる。松山東雲短期大学の先生より、備蓄品として、乾燥野菜や乾燥調味料の有効性をお話いただいた。来年度、乾燥野菜作りにも挑戦する予定である。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

被災地訪問や心肺蘇生法講習会など体験的に学ぶことによって、単なる調べ学習やイベント化した避難訓練といった受け身の学習からの転換が図れたと考える。

避難訓練の在り方や非常持ち出し袋の中身、備蓄品、保管場所について再考する契機となった。また、本校には、教員・生徒全員分の非常持ち出し袋が用意されている。しかし、多くの生徒は、その存在すら知らない。この危機的状況を打開するため、家庭科の授業の中で取り扱うこととした。また、年に一度の非常持ち出し袋を下す訓練に、より多くの生徒を参加させるようしたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

学校内外の活動への参加は、災害に対する当事者意識を高めるだけでなく、主体的にそして、協働的に課題解決に取り組む資質や能力を向上させた。講習会を企画し実施した生徒は、リーダーシップスキルやコミュニケーション能力も身に付いた。充実感もあったようだ。そして、活動への関わりを機に進路決定する生徒もいた。さらに、防災士の資格取得に挑戦する生徒も複数いる。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

松山市防災・危機管理課、松山東雲短期大学など専門家との連携により、最新の災害対策情報を統合し、生徒達により実践的で効果的な取り組みを提供できた。防災食講習会や非常持ち出し袋の中身の提案、心肺蘇生法講習会などは、ジュニア防災リーダークラブで減災への取り組みを学んだ生徒が、「自分たちが学校の防災リーダーになりたい」、「友達にも広めたい」という思いから実現したものである。今後は、非常持ち出しポーチ講習会や段ボールベッド体験会を実施予定である。生徒発案の防災・減災の取り組みが学校に広がりを見せている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

大学や行政、地域などと連携した活動を多く実施した。出会う人の数だけ、減災に対する学びを深めることができ、生徒の災害に対する当事者意識が高まった。

年に2回の避難訓練に加え、防災・減災に関する取り組みを定期的に行うことで、防災意識が薄れないようにした。また、災害を特別なことと捉えるのではなく、日常の生活の中でのことが非常時に役立つという、フェーズフリーの観点を家庭科の授業の中で取り入れるようにした。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

研修会への参加で教員の災害に対する意識が高くなった。そして、まずはやってみるものの大切さも痛感した。教師が熱い思いを持って生徒に接すると、生徒達にも伝播し、生徒の意識に変化が生じた。当然のことであるが、これまでの取り組みの継続、さらなる発展が必要となる。また、活動を経験したのは、一部の教員・生徒にすぎない。今後は、1年生全員が取り組む「総合探究」のテーマに、常に「災害」を取り入れたり、各教科が災害に関するテーマをカリキュラムに組み込んだりするなど、学校全体を挙げての取り組みが必要である。そして、地域社会との連携した防災・減災教育を充実させたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



済美高校非常持ち出し袋



学校内危険箇所点検



気仙沼報告会



西予市野村町街歩き



ワークショップ「安全で安心な生活を続けるため



松山市防災・危機管理課でお話を伺う



松山東雲短期大学での勉強会



心肺蘇生法講習会



防災食講習会



防災食商品化に向けて
「ちりめんおおかおにぎり」



防災食実習（ライフラインがストップ
したと仮定して）



防災食実習「鯖缶カレー・サラダ・ナ
ッツバー」

学校名	福岡雙葉中学校・高等学校		
活動のテーマ	福岡に防災・減災の芽(ふたば)を育てよう！		
主な教科領域等	教科領域（ 社会・理科・保健体育・総合的な学習の時間など ）		
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発		
活動に参加した児童生徒数	（ 1 学年 132 人）（複数可）		
活動に携わった教員数	（ 60 ）人		
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 20 ）人 【保護者・ 地域住民 ・ その他 （ 福岡市防災センター）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）		
実践期間	西暦 2023 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 19 日		
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他 （ 災害弱者(人災) ）		
活動報告			
1) 活動の目的・ねらい			
福岡県は、近年地方で水害や土砂災害が頻発しているが、県の中心地である福岡市は大きな災害もなく、多くの世代で防災・減災意識は非常に低くなっている。そこで、市の中心に位置する福岡雙葉では、減災教育「福岡に防災・減災の芽(ふたば)を育てよう！」を实践ことで、防災・減災に貢献できる人材を育成することを目的とする。 福岡雙葉中学校・高等学校 防災・減災プログラム 「福岡に防災・減災の芽(ふたば)を育てよう！」 			
以下の防災・減災教育により、生徒・教職員の自助・共助に必要な 資質・能力を育成する。 ① 総合学習での減災教育活動により、身の安全を確保するための知識や技能を身につける。 ② 教科教育 社会・理科での防災教育により、災害の種類や発生メカニズムなど基本的な知識を身につける。 ③ 教員の防災研修の実施により、教職員の危機管理能力の向上を図る。 ④ ICT や外国語の活用による啓蒙活動により、地域住民との連携を図る。			
背景と目的 福岡市は近年大きな災害もなく、多くの世代で防災・減災意識は非常に低くなっている。 福岡雙葉において、減災プログラムを通して、防災・減災に貢献できる人材を育成する。  2005年3月20日に発生した福岡県西方沖地震 			
2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）			
社会や理科、保健体育、家庭科などの防災・減災に関連する教科を中心に中学課程 3 年間での 防災・減災に関連する単元における授業を見直し、連携して、主体的な生徒の活動を実践し、体系的な生徒の防災知識や意識の醸成を図る。 <各教科の単元と実践例> 社会：中 1（地理 自然災害とその対策 防災マップ作り） 中 2（歴史 阪神大震災・中越地震・東日本大震災 災害の歴史調べ） 中 3（公民 家族と地域社会で支えあい） 理科：中 1（地学 火山活動と地震 災害模型作り） 中 2（地学 天気とその変化 災害の歴史調べ） 保健体育： 傷害の防止 応急手当・救命救急法（心肺蘇生法、AED、毛布担架など） 救命講習 家庭科： 災害に対する家屋の安全対策や備え 防災飯 道徳・宗教：生命の尊重・社会との連帯・郷土愛と人間愛 地域貢献活動 総合的な学習の時間： 防災・減災テーマ別ゼミでの学習 →本プログラムでの活動は、この総合的な学習の時間での活動を中心に実践・検証を行った。			

テーマ	担当教員
① 減災教材開発	国語科・家庭科
② 災害弱者(高齢者・子ども・外国人)対策	体育科・英語科
③ 避難訓練企画・立案	数学科・理科
④ 災害史・減災マップづくり	社会科・理科
⑤ 救命救急	英語科(ネイティブティーチャー※ライフガード経験者)

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

被災地での教員研修会を通して、被災地の復興の現状や、現地の人の思い、防災・減災に関する取り組みを実感した。そこで、校内での取り組みにおいて、以下の点の変更・改善を図った。

- ① 研修参加教員による講演：中学2年生対象に実施
- ② 教員の専門性を生かしたテーマの設定： 例 国語科・家庭科教員による減災教育教材の開発
保健体育科教員による災害弱者支援
社会科教員による 防災・減災マップ作り
ライフガードの資格を持った教員による救命救急講習
- ③ 学校の備蓄状況の把握： 中学2年生の総合学習の活動の一環で備蓄状況の調査を実施
→現状の課題を発見・共有
- ④ 避難訓練の改善： これまでの避難訓練は授業中の避難訓練のみ
→様々なシチュエーションや災害対策を想定した訓練へ改善

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今年度の防災・減災教育のメインのプログラムは、総合的な学習の時間での防災・減災に関するテーマ別ゼミで、生徒たちは希望のテーマに分かれ、各担当教員の指導の下、インプットを受けた後、課題発見と小テーマの設定、調べ学習・フィールドワーク・ディスカッションなどを行いながら、課題解決の方法を探究した。

活動成果は、「防災・減災アイデア・実践コンテスト」を実施し、分科会形式のプレゼンテーション大会で発表した。コンテストでは、減災教育教材開発のテーマでは、幼児や小学生に分かりやすい言葉や自作の絵を使って、クイズや紙芝居を作ったグループがあった。災害弱者のテーマでは、妊婦さんやペット防災などについて対策を提言するグループがあった。避難訓練企画・立案では、今までの避難訓練がいつも授業中を想定しているという課題を発見し、休み時間で実施してはどうかと提案するグループや、学校の備蓄状況を調査し、備蓄品や保管場所について学校側に提案するグループがあった。防災史・防災マップでは、沿岸地域について調べ、地域の消防署や避難経路、周辺の学校の対策状況を調査するグループがあった。救命救急では、ライフガードの資格を持つネイティブ教員が英語も交えながら、救命救急の基本をAEDや人体模型を使って指導を行い、筆記・実技試験などを行いました。

プログラムの立案段階では、テーマ別ゼミでは、昨年度の取り組みを参考に、活動成果のアウトプットを防災 防災CM・防災体験プログラム・防災グッズづくりに限定していた。しかし、各教科の教員の専門性にテーマを設定した結果、減災教育教材や避難訓練の提案など様々なアウトプットの形態が生まれた。

総合的な学習の時間 ～防災・減災テーマ別ゼミでの学習～

本プログラムでの活動は、この総合的な学習の時間での活動を中心に実践・検証を行った。

<テーマ>

- ①減災教材開発
- ②災害弱者(高齢者・子ども・外国人)対策
- ③避難訓練企画・立案
- ④災害史・減災マップづくり
- ⑤救命救急



<担当教員教科>

- 国語科・家庭科
体育科・英語科
数学科・理科
社会科・理科
英語科

(ネイティブティーチャー※ライフガード経験者)

総合学習～減災教育教材開発～

附属の幼児や小学生の避難を考えてインタビューして、
分かりやすい言葉や自作の絵を使って、クイズや紙芝居・動画を作ったグループがあった。



総合学習～災害弱者(高齢者・子ども・外国人)対策～

高齢者の避難時の支援方法や、妊婦さんやペット防災などについて対策を提案するグループがあった。



赤ちゃんがいる人

- 困ること
 - 避難所には授乳やおむつ替えできる場所がない。
 - 避難する時に、赤ちゃんを抱っこしないといけないため、荷物が増えていない。
- 私たちにできること
 - 授乳やおむつ替えできる場所を作ったり、案内したりする。
 - 荷物を持つを手伝う。



ペット防災



総合学習～避難訓練企画・立案～

今までの避難訓練がいつも授業中を想定しているという課題を発見し、休み時間で実施してはどうかと提案するグループや、学校の備蓄状況を調査し、備蓄品や保管場所について学校側に提案するグループがあった。

lll 双葉の現状と課題

非常食がビスコ30個しかない	非常食が少ない、足りない
備蓄品の場所が狭い	備蓄品が狭い、足りない
避難トイレが狭い	避難所にトイレがない、設置が必要
避難者が避難時に荷物を持っていない	避難者が荷物を持っていない



地震体験

今回は震度7を体験しました



総合学習～防災史・防災マップづくり～

沿岸地域について調べ、地域の消防署や避難経路、周辺の学校の対策状況を調査するグループがあった。

豊岡校区の特徴

- 東北の津に豊岡駅がある。
- 全国1位の地震発生頻度と、地震発生頻度が最も高いエリアの1つである。
- 津波や地震などの被害に多い。

新ハザードマップ

- 経=安全地帯
- 青い線=コンビニ→避難所の距離



半径1キロ圏内の避難場所一覧

豊岡市立豊岡小学校	豊岡市立豊岡中学校
豊岡市立豊岡小学校	豊岡市立豊岡中学校
豊岡市立豊岡小学校	豊岡市立豊岡中学校
豊岡市立豊岡小学校	豊岡市立豊岡中学校

総合学習～救命救急～

ライフガードの資格を持つネイティブ教員が英語も交えながら、救命救急の基本をAEDや人体模型を使って指導を行い、筆記・実技試験などを行った。



キーワードとは...DRS ABCD

D DANGER (危険を避ける)	A AIRWAY (気道確保)
R RESPONSE (反応を確認)	B BREATHING (呼吸を確認)
S SEND (救急を呼ぶ)	C CPR (心臓マッサージ)
	D DEFIBRILLATION (AED)

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

中学2年で実施した総合的な学習の時間では、福岡県でこれまで発生した災害の歴史を調べ、現在どのような災害が想定され、被害が生じるか課題発見力が高まった。特に、災害時は学校が避難所になるため、高齢者や子供、外国人など様々な災害弱者が想定され、そこで自分たちは助ける側になるということを実感することで、より主体的に取り組む態度が養われた。また、活動で制作した生徒の成果物は、ICTを駆使し、福岡県内でも屈指のフォロワーを持つ学校公式 Instagram や YouTube で発信し、情報活用力や発信力が身についた。

プログラム中には、2023年7月に発生した土砂災害で被災した福岡県内の東峰村の支援を学園祭の活動の一環で行った。東峰村のアンテナショップを企画し、東峰村の周知とともに、その売り上げの一部を復興支援のため寄付した。さらに、1月1日に発生した能登半島地震では、発生後すぐに生徒から「何か支援できることをしたい」という声があがった。そこで、生徒たちは自ら有志を募り40名の生徒を集め、校内での募金活動や校外での街頭募金活動を実施した。このようにすぐ行動に移れる生徒が現れたことは、本校の減災教育により着実に生徒の減災意識や行動力、企画力が向上していることを感じた。

プログラム中の生徒のアクション

7月に福岡県の東峰村の豪雨水害が発生した。学園祭で、被災地支援のためのアンテナショップを出店した。



中学2年生が自ら被災地の役場や企業と交渉し、現地商品を委託販売し、売上は東峰村へ寄付した。

プログラム後の生徒のアクション

1月1日の能登半島地震後、すぐに生徒から声が上がリ、校内・郊外において、復興支援募金活動を行った。



有志の中学1年～高校3年生の約40名が、福岡の中心地の天神で街頭募金を行った。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

中学2年生の総合的な学習の時間において、テーマ別にゼミを設定し、異なる教科の複数の教員が担当した。その結果、それぞれの担当教員が自ら担当するテーマについて学習することで、教員の減災知識や減災意識が高まった。また、生徒の減災マップ作りを通して、地域住民や防災センター職員と交流することで、地域との交流が深まった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

今回の取り組みでは、テーマ別ゼミを設定し、生徒が興味あるテーマを自ら選択する形を取った。その中で、課題発見を行い、解決策を見つけ提案していくことで、活動や結果に対して責任を持ち行動できる生徒の主体性が養われた。また、各ゼミは複数の教員が専門性を生かしたテーマを設定することで、教員の主体的な姿勢も引き出せた。活動成果は、分科会形式のコンテストで発表・報告することで、自らの活動により責任を持って意欲的に取り組むことができた。さらには、学校の現状に対して改善策を提言することで、今後の学校の防災・減災対策に反映させる場を設け、学校全体の防災・減災体制の改善を図る機会となった。

成果発表

活動成果発表の場として

「防災・減災アイデア・実践コンテスト」を開催！



コンテスト形式にすることで、
生徒のモチベーションや活動発表の質の向上を図った。

生徒アンケートの結果2

〇うまくいった点

- ・身近なところの危険な点に気づけた
- ・福岡や日本の災害への備えや現状を知ることができた

〇課題だった点

- ・学校でもっと防災・減災に取り組むべき
- ・インタビュー調査でうまく質問できなかった

〇新たに気づいた点

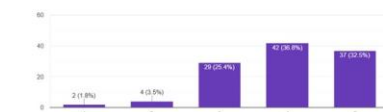
- ・AEDの使い方
- ・学校の備蓄状況
- ・災害弱者という言葉
- ・防災意識の薄れ



生徒アンケートの結果1

Q.6 総合的な学習の時間で取り組む前の自分自身は「防災」、「減災」に対してどれくらい理解していたか、5段階で評価して下さい。
114件の回答

実施前

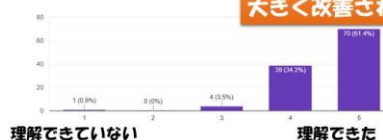


理解できていない

理解している

Q.7 防災・減災プログラムを通して、自分自身は「防災」、理解することができたか、5段階で評価して下さい。
114件の回答

実施後



理解できていない

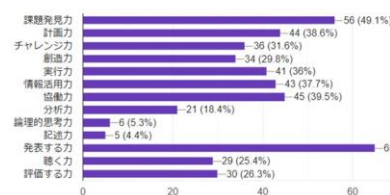
理解できた

防災・減災に対する理解が
大きく改善された！

生徒アンケートの結果3

〇身についた力

Q.11 総合的な学習の時間を通して、下記の13の力のうち、特に身についたあるいは向上した力を3つ選んで下さい。
114件の回答



上位

- 1 発表する力
- 2 課題発見力
- 3 協働力

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回の活動を通して、事前調査の段階で福岡はやはり地域特異的に中高生や教員の防災・減災に対する意識は、非常に低いと感じた。しかし、今年度の取り組みを行うことで、減災意識の向上が図れることが明らかとなった。本プログラムが終了する次年度以降は、一層改善を図り減災教育活動を続けることで、減災意識の高い生徒の学年が増えていき、最終的に高い防災・減災教育校を実現していきたい。

学校名	鹿児島県立徳之島高等学校
-----	--------------

活動のテーマ	デザインや参加型活動で変える減災意識 ～世界自然遺産の島で生き残るための減災教育～
主な教科領域等	教科領域（LHR，総合的な探究の時間，産業教育と人間，地理 他）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（1～3学年 240 人）（複数可）
活動に携わった教員数	（52）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（68）人 【保護者 52・地域住民・その他（町職員 6，NPO 職員 4，新聞記者 3，他校職員 1，大学教授 2）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 8 月 20 日 ～ 西暦 2024 年 12 月 12 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（危険生物対応）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

徳之島は、紺碧の海が広がる美しい島である。青々とした山は希少固有種の宝庫で、2021 年に生物多様性が認められ、奄美大島・沖縄島北部及び西表島と共に世界自然遺産に登録された。一方で、ハブ等の危険生物も生活圏に多く生息し、常に命の危険が暮らしの中に潜んでいる。気候は、沖縄諸島と同じく亜熱帯性気候に属する。雨はスコールとなる場合が多く、梅雨時期には土砂崩れが起きる。台風の曲がり角で、暴風域がまる 1 日以上続くことが多く、台風が直撃した後は停電になるなど被害が大きい。昨年は迷走型の台風 6 号が徳之島に折り返し 3 度接近し、海路は 7 月 31 日を最後に 2 週間余り欠航、商店の陳列棚は全て空となり、避難所の備蓄食料も全て配布し底をついた。交通、物流、医療等のインフラ整備に課題があり、島内部だけでは災害対応も困難である。

「台風が来たら我慢する」、「ハブに咬まれない為に道路の中央を歩く」など、島には、本土では考えられないような行動制限や苦労が日常的に山ほどあり、その多くは現状としては諦めるしかないもので、そのおかげで子供たちには「並外れた忍耐力や開き直る力」が自然と身に付いてしまっている。しかし、この一見すると「逞しい力」の影響により、残念ながら、本校の生徒たちには避難訓練等においても災害への危機意識がほとんど見られない。想定外の災害に対する想像力や危機感、瞬時に動こうとする力、思考力、判断力、対策や備え、つまり「自分事感」は全く見られない。

卒業後ほとんどの生徒は島外へ進学・就職する。未知の状況下で災害にあっても、何としてでも自分の身は自分で守る行動を取れるよう、災害を「自分の問題」として捉えられるよう変容させることを目的とした。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）



0 PTA大規模除草

8月20日(日)

生徒 教職員 保護者等

59人 30人 52人
合計 141人

生徒たちがハブ等の
危険がない環境で体
育大会等に臨めるよう
重機等も活用し、敷地
内の雑草地を除草



…… 気仙沼市での減災教員研修会 9月21日(木)から23日(土)まで ……

1 ハブに関する講座

10月06日(金)

40人 12人 6人
58人

日本蛇族学術研究所
の森口一先生、東海大
学生物学部竹中教
授を招き、ハブの生態
・避け方を学習



2 減災職員研修

10月23日(月)

40人
40人

気仙沼研修会で学ん
だことを、自校の全職
員へ伝達、今後の減災
教育・対応について
アイデアを検討

みんなで考えよう

減災研修

考えるべきこと。変えるべきこと。

第二島高等学校 令和5年10月23日

避難訓練で「Yes / No」質問に
生徒はなぜ手を上げられなかったのか？

協議 A 避難について

- 30m級の津波警報が発表されました。どう避難しますか？
- 学校で避難する際【避難前の準備・避難中・避難後】の課題・方法（登下校中・授業中・休み時間・放送不能・ルート遮断等）
- 避難訓練のアイデア【地震・火災等】

協議 B 減災教育について

- 生徒が優先して身に付けるべき力とは？
- 「自分事」として生徒が真剣に考えられる減災教育のアイデア【方法】
- 遠征先や島立ち先で、生き残るための減災教育のアイデア【内容】

3 減災啓発グッズデザイン

10月～12月

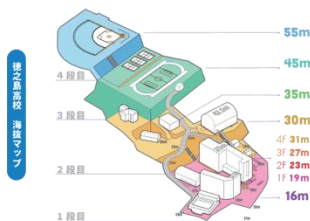
1人
1人

減災を自分事として常に意識させるため常に視認できる海拔マップ、ハザードマップ、缶バッジ等をデザイン

徳之島高校 キャラクター減災仕様



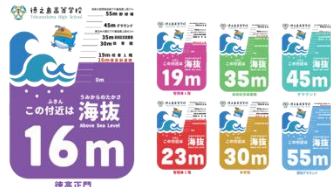
徳之島高校キャラクター
とくじのじら



徳之島高校 海拔マップ



徳之島高校 海拔プレート



減災デザイン 缶バッジ



4 避難所設営教室

12月05日(火)

82人 18人 7人
107人

武道館にて要配慮者ごとの部屋割りを班毎に思考しながら簡易 TENT を設置するなど参加型の避難所設営訓練を実施



あなたは災害に対して、どんな意識をもっていましたか？
元々、災害には興味があり、小さい頃から防災のことに興味があり、本を読むのは好きで、また、祖母、母が阪神、淡路大震災を経験していることから、防災に興味を持ちました。

あなたの災害に対する意識に変化がありましたか？
災害について、その後の暮らしについて意識がよくなりました。

今まで、実践的なことを学ぶことがなかったのに、このような機会ができてよかった。

あなたは災害に対して、どんな意識をもっていましたか？

軽い意識をもっていた。

あなたの災害に対する意識に変化がありましたか？

本当に災害が起きたら軽い気持ちじゃいられないと思った。

あなたは災害に対して、どんな意識をもっていましたか？

・るけんとか、それとほかの人と協力して、頑張った。

あなたの災害に対する意識に変化がありましたか？

自分もこの災害が起きたら大丈夫に準備して、頑張る。

あなたは災害に対して、どんな意識をもっていましたか？

読んでいたけど、今回のことを通して、もっと真剣に考えていこうと思った。

あなたの災害に対する意識に変化がありましたか？

いかに備えるか、という意識が、もっと強くなった。

あなたは災害に対して、どんな意識をもっていましたか？

他人と協力して、頑張る。

あなたの災害に対する意識に変化がありましたか？

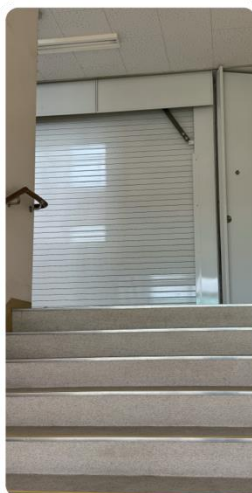
災害は、明日も来ることがある。

5 予告なし避難訓練

12月12日(火)

240人 52人 3人
295人

職員研修での検討を生かし、通常授業中集合場所のみ連絡・防火シャッター降下消火栓使用等、避難訓練を工夫



3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9月研修会で、本校生徒への減災教育では「災害を自分事として意識させる指導に課題がある」と学び得た。そこで、自校で職員研修を開き、デザインや参加型活動を取り入れるアイデアが検討され、以下のように改善した。

実践内容	前年度の実施状況	今年度の変更・改善点	助成金活用
1 ハブに関する講座	なし	NPOと連携し開催	
2 減災職員研修	なし	研修会還元・協議	
3 減災啓発グッズ デザイン	なし	ハザードマップ・海拔プレート・缶バッジの作成、掲示及び配布	●
4 避難所設営教室	なし	予告なし、ストーリー性追加、町総務課と連携し簡易テント・ベッド等設営、要配慮者検討、保存食の試食、オリジナル啓発グッズ配布	●
5 抜き打ち避難訓練	事前通知	課題発見・緊迫感付与目的、抜き打ち、通常授業時、防火シャッター降下、消火栓使用	

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ア 教師が課題意識を共有化できた。協議により課題解決・プログラム改善の方策を立案し、計画・実施できた。
- イ 町の防災計画や備蓄状況等を把握することができた。また避難所の備品借用等を通し連携することができた。
- ウ 常に視認できる海拔ボードや缶バッジ等の啓発グッズを形にし、掲示・配布することができた。
- エ 本校の減災教育活動に関する新聞やブログ記事を通じ、地域の方々と減災について語り合えるようになった。

② 生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか。

- ア 意識 「自分事」への意識変化、想像力や危機感、対策や備えへの意識
- イ 行動力 瞬時に動こうとする力、思考力、判断力
- ウ 対応力 協調性、他者への配慮、責任感

③ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ア 教師 「これまでの避難訓練は、教師のための訓練だった。」「生徒にとっては歩こう会的なもので、さらに他人事感を強めた。」との意見があがった。改善した避難訓練により教師・生徒全員が考え行動できた。
- イ 地域等 「他人事感」は「その通り」だとの意見を多数いただいた。「経験で培った台風等の困難への我慢力は、決して褒められた強さではなく、『考えることの放棄、諦めや慢心・過信』だ。」と。この島民の意識を減災教育で変えほしいとの願いをいただいている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

A 減災を常に意識させるための工夫【減災啓発グッズデザイン】

啓発デザインの掲示やアクセサリ配布を行い恒常視認化したことによる、顕在・潜在意識への働きかけ

B 災害を自分事として捉えさせるための工夫【ハブ講座】、【減災職員研修】、【避難所設営教室】、【予告なし避難訓練】

4つの工夫「参加型の活動の導入」、「ストーリーを語る」、「リアルな情報提供」、「共感を呼び起こす」

- ア 参加型 簡易テント等を使用し、生徒が要配慮者配置等の思考力を必要とするワークショップ型講義を実施。
- イ ストーリー 本校を現場とした避難所開設を、あなたが担う物語として伝えることで、当事者感を高めさせた。
- ウ リアル 「断水→トイレ問題」等、具体的な課題を挙げ、災害が起きた場合の影響や危険性を簡潔に伝えた。
- エ 共感 生徒の生活に密着した言葉で、普段の課題や苦勞に共感し、災害で一層困難になる可能性を伝えた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

島に住む生徒に自然と染み込んだ、台風やハブ、交通、物資等に絡む困難さへの慣れによる「並外れた忍耐力や開き直る力を過信し、考えることを止める思考癖」があったとしても、指導の工夫によって「自分事として自発的に思考・想定する意識へと変えることができる」との希望が得られた。課題としては、島での狭い生活圏に留まらず、移動時や卒業後での不慣れな土地での避難対応へ想定を拡大させることである。自ら未知の知識や情報を得る方法と、日常経験の応用について今後指導する必要がある。また、離島地域は標準勤務年数が短いため、職員の入れ替わりが早く、全教科横断型の題材設定や校務分掌での減災教育、さらには、小中学校や行政、地域や関連機関等との連携による一体型の減災教育を繋ぐ必要性を強く感じている。そのためにも、現物であるデザインを残すことに意義があると思う。

学校名	奈良女子高等学校
-----	----------

活動のテーマ	私たちが古都の命を守るなら
主な教科領域等	教科領域（1年生 探究・歴史総合、2年生 地理総合）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（1学年 104人 2年 102人）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 4 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 80 ）人 【保護者・地域住民・その他（奈良教育大ユネスコクラブ・奈良ユネスコ協会青年部・済美小学校区女性防災クラブ・地域の宮司・住職）幼稚園児（60人）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2023 年 10 月 15 日 ～ 西暦 2024 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

昨年GWに起きた石川能登地方の地震により、住民の命を守ることだけではなく、多くの観光客の命を守ることが喫緊の課題となった。文化財が残る古都奈良においても同様で、高校生がこの課題を自分事として捉えて行動を起こすことが奈良の減災意識の変革につながると考える。探究の時間では、ならまちの良さと防災において脆弱な町の二面性に向き合い、どう命を守っていくかを考え防災・減災の町づくりの取り組みに参画していく。この学習は「持続可能な社会の創り手」の育成の根幹となる学びに位置付くと考えます。

ESDを通して、歴史的に価値のあるならまちの良さとその反面で防災・減災の課題や、危機意識が自分事にならない大人たちへ、高校生独自のアプローチで「命を守る行動」を発信し、防災・減災の町づくりに参画していく。この学習を通して、国立教育政策研究所が例示したESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度である「批判的に考える力」「多面的・総合的に考える力」「進んで参画する態度」の育成を目指す。

元旦に起きた能登半島地震に生徒たちもショックを受けている。学習した生徒たちを中心にすぐに復興支援の募金活動がスタートしているが、生徒たちは「今自分たちに何ができるのか」を悩んでいる。そのようななかで、「今自分たちが奈良の命を守るためにできること」を行動していきたい。学習を通して奈良県民に昔から根付いている「ならは古都だから」「大仏がいるから大丈夫」「ならまちはいつも大丈夫だった」という誤ったバイアス（認識）を突き止めた。生徒の「このままでいけない」という気持ちを大事にし、奈良独特の誤ったバイアスを取り除く行動化を起こしていく。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

奈良教育大学及川幸彦氏が提唱する防災教育の4つのステップを援用し以下の実践をしてきた。

ステップ1について、校外学習を通じて阪神淡路大震災記念人と未来の防災センターと震災遺構を巡り、体験や出会いを通して本学習の興味を深事後学習として県の防災対策室の方を呼び、奈良盆地東縁断層帯地震への知識と理解を高めた。

ステップ2について、奈良で起こり得る地震やならまちの危機的な状況を、踏査を通じて発見し、被災を想定して地域の課題を考え、ならまちの災害への思考力・判断力を育てた。

ステップ3について、防災面で脆弱なならまちを受け入れ、地域の防災意識を高めたり、観光客や修学旅行生に「命を守る行動」の動画発信することで、減災につながる行動を起こすために活動している。

ステップ4について、減災に参画するだけではなく、被災後も、未来への町づくりの視点で行動を起こす意欲を育てることで、復旧・復興・命を守る町づくりに貢献していく。

今後のステップとして、学校間交流など同世代が実践成果を協議しながら、様々な地域の学校がパートナーシップを結び防災・減災の課題解決や持続可能な町づくりへの参画を目指そうと考えている。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修を受けて変更した点を大きく2つある。1つ目は、学び方である。気仙沼市では中学生と小学生が共に学び、若者から地域にアクションを起こしていく行動化に感銘を受けた。低い防災意識を変革していかなければならない奈良でも、

気仙沼のように若者が防災意識についてアクションを起こすことが大切と考えた。そこで、奈良教育大ユネスコクラブに継続して授業に参加してもらい、高校生と大学生と一緒に問いをもち、探究していく学び方に変更した。2つ目は、地域住民との連携である。認定特定非営利活動法人 SEEDS Asia 大津山先生の講演や研修後にアドバイスをいただき、地域に根付いた防災・減災教育の重要性に気づいた。本校ではフィールドとなる、ならまちの校区にある女性防災組織や、ならの観光案内をしているボランティアガイドさん、観光地のお寺さんとつながりに地域の課題に出会わせる学習に変えた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校のカリキュラムに防災・減災教育を位置づける動きをつくることができた。減災教育の授業を広く職員に公開し、研修や研究授業等で教師が減災教育の必要性を提案した。さらに実践を社会に発信することで、大学の実践発表会に参加できたり、企業連携の話もいただけるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

現状での成果として、生徒たちの災害に対しての見方・考えて方に変化が生まれた。まず生徒たちがほとんど知らなかった奈良盆地東縁断層帯地震が身近になった。生徒たちはこれまでに避難訓練や防災教育を受けてきましたが、自分事になっていないのでほとんど意識していない。次に、現在生徒たちは、地震の想定や、0.5%と確率が低くても地震は起こること言い聞かせ自分事になっている。「奈良は大丈夫だ」という間違った認識について疑問を持ち探究していく姿から、ESDで育てたい資質能力であるクリティカルシンキングが育っていると考ええる。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

地域の女性防災など組織が高齢化していることもあり、活動の輪を広げる取り組みや情報の発信が弱い面があるそうだ。本校の行動化が一助になれるだろうと期待されている。インバウンドの効果もあり、奈良ではたくさんの観光客がならまちを歩いているが、防災情報を知っている観光客はほとんどいない。そのような観光客の方に本校がショート動画で発信することで防災意識を高めることにつながると考える。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

特筆すべき点は、生徒たち高校生と奈良教育大ユネスコクラブの大学生、奈良ユネスコ青年部の若者が「古都奈良の何を守りたいか」を考えて、自分が守りたい命に向けて行動を起こしたことである。友達の命を守りたい生徒とたちは、SNSを通じて他校の仲間たちの命を守る投稿をした。子どもたちの命を守りたい生徒たちは、附属幼稚園に行き、奈良は大丈夫を取り除く絵本を読み聞かせをした。文化財を守りたい生徒たちは、お寺とコラボし災害時文化財を守る方法を発信した。地域の命を守る生徒は、女性防災さんと連携して防火用バケツの常備率を上げる取り組みに参画した。さらに崩壊家屋が気になった生徒は防災対策室にと、一人ひとりが「古都ならの命を守るなら」何が良いか考えて、奈良教育大ユネスコクラブを一緒に取り組みしていく姿が見られた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今期はプログラムの開発ということもあり、実践が途中で終わり、2年生からの地理総合に引き継ぐ形となった。今期の実践をしていくなかで、教員間のコミュニケーションが生まれ各教科での防災・減災教育の連携に繋がっている。今後はカリキュラムマネジメントを可視化していくことで、実践の質を高めていきたい。

大学生と青年と高校生が連携しユースから発信させることで、地域への波及効果が伺えた。次年度はこのユースの連携を強化し、地域の中学生に向けた防災イベントを強化していくことで県内の防災意識を高めていきたい。

7) その他(※特にあれば記述)

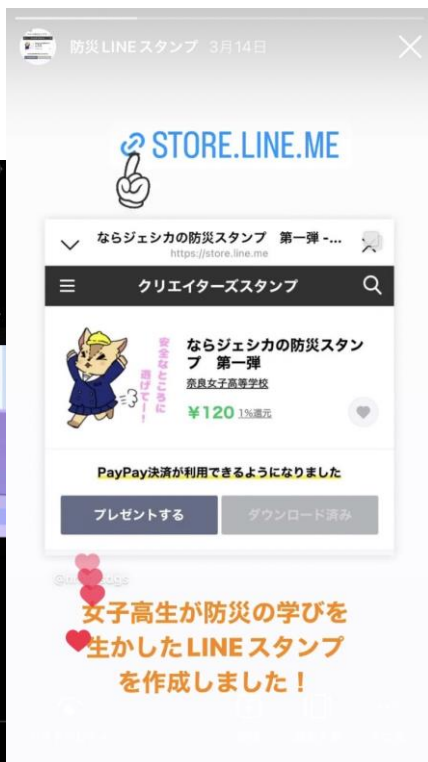
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。

①知事と対談する高校生に選ばれる

奈良女子高校から発信してきた減災の取り組みが、地域に認知されてきて、2024年5月16日関西文化首都フォーラム in 奈良のプログラム「はじまりの奈良～未来への提言」で本校生徒と奈良教育大ユネスコクラブが知事と特別セッションに登壇することが決まった。減災の視点も踏まえて古都奈良の文化遺産について意見を述べるだろうと考える。

②活動の写真

奈良教育大ユネスコクラブ×奈良女子高等学校共同インスタ 「奈良なら SDGs」



近隣ホテルに置いてもらう減災シール



奈良教育大ユネスコクラブの学生と探究する姿



ぼうさいバケツのアヒルのピョタ



幼稚園で防災教室を開く。デジタル紙芝居でならまちの減災を伝え、一緒に防災訓練を行った。

③ 本年度カリキュラムに位置付けることができた ESD 減災教育 単元構想図

奈良女子高等学校 ESD 防災・減災教育「私たちが古都の命をまもるなら」 単元構想図

神戸市街校外学習 問い「人と未来の防災センターかな何を学ぶことができたか？」

阪神・淡路大震災
の映像に驚いた

災害で町が一
変したんだ

復興した街を歩
を歩いてきた

大地震は断層が
関係している

奈良にも活断層が通っていた！
震災が起こるかもしれない！？

11. 10 「奈良に活断層があることで想定されるリスクは何か？」県防災対策室の方を GT に連携授業

予想を超える被害
がでそう

ならまちで火災
が起こる

NHK災害列島では和歌山市に
次ぎ奈良市で 62% 確率！

奈良は災害がなく安全な
地じゃないの？調べよう

11. 17 「被災とは何か？」 ユネスコクラブ大学生の被災地体験から考えよう。大津山先生・ユネスコクラブ

災害は当たり前の人・
もの・ことを失う

命を守ることが大
切なんだね

観光客の命を守る
ことも大切。

問い 大事なのはわかっているのに、
なぜ奈良の人は動かなかったのか？

11. 17 「奈良は大丈夫」とってしまうのはなぜなのか？ 大津山先生と地元の女性防災の方・ユネスコクラブ携

間違った思い込みが「バイア
ス」がはたらいているのか

過去に奈良でこれだ
け自身が起きている

奈良は大仏さまがいるから
大丈夫とってしまう

昔から残ってる大丈
夫とっと思ってしまう

1. 12 日 バイアスを取外して、ならまちで撮った写真や奈良市防災マップを見ると何が見えてくるか？同じメンバー

火災のリスク

危ないかも？

道路が狭い

避難所への道が難しい

ならまちは課題多い

1. 12 日 どうして防災面で危ないのに町を改修しないのか？ 脆弱な町でいいのか？

1 月 13 日 SDG s 学び旅「ならまちコース」奈良教育大中澤教授・ユネスコクラブ・地域ガイド・大津山先生

古都は地震が来
たらあぶないね

ならまちの価値がわかってきた。
街を受け継いでいくことが奈良の良さ

古都は文化財や街並みを伝承し続けながらも
災害から命を守るための準備が必要

1 月 19 日①私が古都の命を守るなら、奈良の何を守るために行動していきたいか？ 能登半島震災記事から

家族
1 班

友人
2 班

地域住民
3 班

子ども
4 班

観光客・街
5 班

鹿・動物
6 班

文化財
7 班

能登の人
8 班

1 月 19 日②〇〇を守るために自分たちができる行動は何か？地域の方・学生とグループで話し合い、プロジェクト立ち上げ

備え
動画

動画
写真

消火バケ
ツ

絵本

避難場所紹介
QR コード

鹿園アポ

称念寺・興
福寺話

幼稚園
募金

1 月 27 日 行動化に向けた情報収集や動画作成としての、ならまちフィールドワーク

奈良まち
ネタ家族
に h

撮影

増田家聞
き取り

バイア
ス

避難所動画作成
奈良市アボとり

鹿園取材
動画作成

文化財を
守る動画

2 月 2 日（金）動画・絵本作成、2 月 9 日（金）成果をまとめる 2 月 16 日 オンライン学校間交流（予定）

学校名	福岡県立三池工業高等学校
-----	--------------

活動のテーマ	防災・減災に関する知識を生徒や地域に普及させるための活動
主な教科領域等	教科領域（ 工業（工業化学） ）
アプローチ	※該当するものに□をつけてください（複数可） 地域連携 避難訓練・避難所運営 専門家の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1， 2， 3 学年 4 5 0 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	（ 3 0 ）人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	（ 3 0 0 ）人 【保護者・地域住民・その他（ 中学 1 年生 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に□をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2 0 2 3 年 7 月 1 日 ～ 西暦 2 0 2 4 年 2 月 2 8 日
想定した災害	※該当するものに□をつけてください（複数可）。 地震 津波 台風 洪水 河川氾濫 土砂 その他（ 火事 ）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

【活動の目的】

三池工業高校は、指定避難所となっており、災害が起きた際は避難所の開設及び避難所への誘導など高校生の若い力が必要不可欠となる。そのため、防災・減災に関する学習を通して知識・技術を身につけるとともに、地域へ災害時の対応等について発信し、防災・減災に向けた取り組みの重要性を伝えていくことを目的とした。

【活動のねらい】

大牟田市は、令和2年度大雨による甚大な被害を受けている。大牟田地方ユネスコ協会と協働して各種活動を行い、災害の恐ろしさを風化させないように発信するとともに、生徒個々で調べた防災や減災の内容について、地域や中学生に情報発信を行うことで、生徒に主体的に防災・減災に取り組む態度を育成していくことをねらいとした。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 7月12日 1年生生徒150名・職員20名を対象に防災・減災教育を実施。
- 7月28日 大牟田市内ユネスコスクール・SDGs/ESD交流会に職員4名参加。
- 7月28日 第1回「大牟田地方ユネスコ協会」学習会に職員2名参加。
- 9月 3日 荒尾市主催「あらお防災フェスタ」を見学。（生徒2名、職員2名）
- 9月 中旬 大牟田地方ユネスコ協会ユースチーム「WITH」と発表内容の打合せ。
(生徒5名、職員1名、協会5名)
- 9月30日 大牟田地方ユネスコ協会主催イベントにて、ステージ発表及びワークショップ実施。
(生徒8名、職員5名、来場者約200名)
- 10月29日 大牟田市総合防災訓練見学（生徒7名、職員2名）
- 11月28日 大牟田市立宮原中学校1年生へ「防災・減災教育」出前授業実施。
(生徒7名、職員3名、中学生89名)
- 12月16日 文化祭「三工祭」にて避難所を開設。保存食の試食会や防災グッズ展示、気仙沼市の津波被害・大牟田市の大雨被害の写真展示などを実施。大牟田市役所によるベッド組立体験実施。大牟田市消防本部より煙体験実施。
(避難所運営：職員5名、生徒20名、大牟田市職員2名、消防職員2名)
(体験活動参加者：試食体験・組立体験約150名、煙体験約50名)
- 1月25日 第2回「大牟田地方ユネスコ協会」学習会にて、取り組みの報告（職員1名）
- 2月 5日 全校生徒及び保護者参加の校内課題研究発表会にて、減災教育プログラムの活動報告の発表。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①当初本校生徒へ向けた防災・減災教育を実践しようと計画していたが、気仙沼市の職員研修会を受け、地域に発信することが大切だと学んだ。生徒に教えるではなく、生徒に考えさせる・調べさせる・体験させることを多く取り入れた活動を計画し、主体的に防災・減災に取り組む態度を育成することとした。宮原中学校「出前授業」では、本校生徒

- に気仙沼市での写真や防災学習シートなどの資料を見せ、生徒自ら発表プレゼンテーションや発表形態を考えさせた。
- ②見学した気仙沼市の震災伝承館の写真を避難所体験で展示することで、津波の恐ろしさも伝えるようにした。
- ③助成金を活用し、防災グッズや保存食（試食用）を多く購入することができ、避難所体験へ多くの人を呼ぶことができた。また、災害時のトイレ対応実験など体験的活動に繋げることができた。助成金で購入したレーザー加工機により防災グッズの紹介を人目に付きやすくすることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

【大牟田地方ユネスコ協会との協働】

9月30日の大牟田地方ユネスコ協会主催のイベントにて、ユネスコスクール活動報告やSDGsに関連した研究発表、生物分解性プラスチックを用いたキーホルダー製作ワークショップを実施した。会場に足を運んだ約200人の方々に本校の取り組みを伝えることができた。また、大牟田地方ユネスコ協会ユース「WITH」との協働発表では、災害時のトイレ対応について実験を交えながら進めることができ、生徒の自信に繋げることができた。



【災害時のトイレ対応の実験】



【海洋生物調査発表】



【ワークショップの紹介】



【ワークショップの様子】

【大牟田市立宮原中学校出前授業「防災・減災教育」】

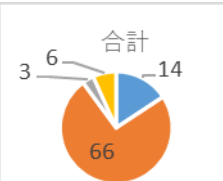
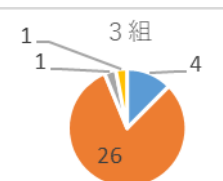
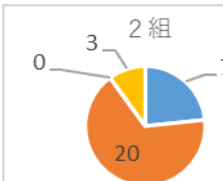
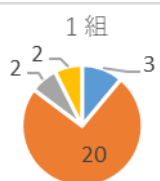
気仙沼市での職員研修会で見学した異校種連携を、大牟田市でも実践できないか大牟田地方ユネスコ協会と協議し、中高連携の出前授業を実践することとした。工業（工業化学科）の課題研究において、地域貢献班に依頼した。中学1年生に防災・減災の基礎を伝え、防災バッグ等の災害に備えた準備を中学生が家庭内で話すきっかけをつくることをテーマとした。参加型・体験型の展開を多く取り入れるよう伝え、プレゼンテーションは高校生に自ら作成させた。最終的に寸劇を入れるなどの工夫が見られ、本校生徒からは、機会があればもう一度してみたいと前向きな意欲を引き出すことができた。



【出前授業でのプレゼンテーションでの説明や寸劇、トイレ対応吸水実験の様子】

問 災害に備えて、ご家庭で準備しようと思いますか？（中学生へのアンケート結果）

	すぐに準備したい	家族に話す	何もしない	準備している
1組	3	20	2	2
2組	7	20	0	3
3組	4	26	1	1
合計	14	66	3	6



- Aすぐに準備したい
- B家族に話す
- C何もしない
- D準備している

【文化祭における避難所体験】

本校の文化祭を実施するにあたり、避難所体験を行いたい旨を大牟田地方ユネスコ協会に相談したところ、大牟田市役所防災危機管理室を紹介していただいた。大牟田市役所で段ボールベッドの組立体験や備蓄している実際の保存食等

の展示で協力いただくことができた。大牟田地方ユネスコ協会では防災グッズ等の展示、本校では、気仙沼市の津波伝承館の写真展示と保存食試食会を行った。また、大牟田市消防本部にもご協力いただき、火災時の煙体験を実施していただいた。文化祭の開会行事では、校長が災害直後の卒業式答辞や甲子園の選手宣誓など映像を交えながら震災からの復興や防災・減災の大切さを全校生徒に伝えた。体験では、災害時は500セットの段ボールベッド組み立てが必要なことや水の確保の困難さなど、本校で避難所が開設された際の大変さを伝えていただき、体験的な学びに繋げることができた。地域の方から実際見たことが無かったから防災グッズの必要性を感じることもできたなど多くの方々の意識の変化にも結びつけることができた。



〔校長講話〕



〔本校と協会の展示ブース〕



〔気仙沼市の写真展示〕



〔大牟田市役所展示ブース〕



〔火災煙体験ブース〕



〔避難所テント展示〕



〔段ボールベッド組立体験〕



〔保存食試食会の様子〕

③児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒は、熊本地震や大雨被害などを経験しているため災害の恐ろしさは感じていたが、避難した経験や本校の避難所開設の手伝いなどはしたことがなく、防災・減災への対応に関する知識はほとんど皆無であった。

主に活動に取り組んだ工業化学科3年生は、大牟田市総合防災訓練見学での各ブース体験から災害が自分自身にもいつ起こるか分からないため、備えや知識を身につけておくことの必要性を感じていた。出前授業の準備では、中学生に災害に遭うことを考えてもらうために、班員で協力しながら試行錯誤して発表原稿を完成させていた。教員からの助言等をあまりせず実施まで行えたことは、生徒の自主性・主体性を引き出すことができたと考える。また、災害に備えることの大切さを周囲の人へ伝える態度も養われたと考える。文化祭において、避難所体験を大牟田市役所の方と連携して行えたことで、本校生徒に指定避難所であることと、実際に避難所を開設したときに何をすべきかを明確に伝えることができ、いざという時に協力する自覚を芽生えさせることができたと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

大牟田地方ユネスコ協会と連携・協働して、本校としての減災教育の取り組みを進めることができ、大牟田市民へ防災・減災の必要性を発信できたことは本校にとって大きな1歩だと考える。今後も連携・協働しながら大牟田市の活性化につながる取り組みを実践していきたい。また、大牟田市役所や大牟田市消防本部とも連携できたことは成果として挙げられる。今後もアドバイスをいただきながら、大牟田市民に防災・減災に向けた取り組みや災害時の対応を積極的に発信していきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

今回の減災教育プログラムを実践していく中で、主に体験活動を導入するよう工夫した。災害時のトイレ対応において凝固剤が実際に固まる様子や避難所の雰囲気、防災グッズの使い方などを体験することで、記憶に留まりやすいのではないかと考えた。

6) 実践から得られた教訓や課題と、次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回の実践で得られた教訓は、体験することで実践的な知識に繋がることがわかった。防災避難訓練では、実際の災害を想定して行われるべきであるがそうっていないのが実情である。火災の煙体験や避難所体験を行うことで、災害を想像した動きに繋がると感じた。しかし、減災教育を実践していくに当たり教員の知識量の少なさは課題であると考え。自衛隊など災害復旧活動を行なった方からの講演会を実施し、生徒と教員と一緒に防災・減災について学び、大牟田市の災害リスクや災害対策に関する知識を養い、情報発信を積極的に行なっていくことを次年度実践していきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。